
宇宙人と僕

遍駆羽御

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宇宙人と僕

【Nコード】

N1729X

【作者名】

遍駆羽御

【あらすじ】

僕は死ぬことも、生きること、できずに……雨に打たれていた。その雨を晴らした少女。蒼空は宇宙人でした。生死を放棄した少年と、三年の命の少女が世界を救う。それは……命の共鳴。

プロローグ サンタクロースの落とし物（前書き）

この小説はフィクションではありません。作者の中では、ノンフィクションです！ いるんです！ 可愛いうちゅーじんは！

プロローグ サンタクロースの落とし物

自分の吐く白い息を追って、空を見上げた。空には黒い画用紙に修正液を間違って垂らしたような白い粒が所々に浮かんでいる。

僕は空が怖かった。今、自分が立っている暗い廊下に首無しのお霊が現れるんじゃないのか？ っていう薄気味悪さよりも怖いんだ。僕の知る先輩、河霜扇^{かわしも}辺り^{あづき}が僕の心情を手取るように解る能力を備えていたら……

「夜、トイレに行くのが怖い幼女でちゅかぁ」と、罵るだろう。

空のどこかで、誰かが僕を睨んでいるような気がして目を逸らした。

耳元で、

「天国ってある？」

そんな少女の声が微かに聞こえてきた。

恐れている。天国から憎悪の眼差しで僕を殺そうとする存在を。

背筋がぞつとしてきた。まるで毛虫が背中をすつと通り抜けた感触がしたんだ。

今日の桜餅^{桜餅}学園警備のバイトも残すところ、科学室のみだ。その科学室が問題だった。

いつも、頼みもしないのに、河霜扇なる先輩は僕を愉ませてくれる。尤も、そう認識しているのは先輩だけだ。僕はひたすら、先輩の掌で踊っている。

科学室を示すプレートを見上げ、諦めの籠もった息を吐く。昨日は、この先にラブドールがいた。僕は裸の女性が倒れていると勘違いして、悲鳴を上げた。すぐさま、警備員の詰め所に戻り、警察と救急車を呼んだ。結果、僕は警察、救急隊員、学園からこっぴどく

叱られた。それを横目でくすくすと笑ったところで、

「暗闇に人間の眼が慣れるまでかなりの時間を要する。ですから、米乃国太郎君が見間違えるのも無理はありません。最近の世の中は何処で、事件が起きるか解らない世の中ですし」

と、先輩の荒々しさとは真逆の優等生口調で警察、救急隊員、学園を黙らせた。黒髪ベリーショートヘアのくりくりとした守りたくなる小動物風の霜河扇の言葉を否定するものはいなかった。小動物を虐める奴は格好悪いっていうロリズムが働いたのだろうか？

僕としては、ひたすら、先輩の口ウで固めた鳥の羽根が溶けんが如き、笑顔に眉根を顰めていた。ライオンが子猫のふりをするようなものだ。そして、それが先輩の処世術だ。

朝まで固まっている訳にはいかないので、僕は仕方なく、レールのがたつく扉を開いた。

「ひつ、いい！」

開いた瞬間、目があった。紐で吊された汚らしい人形と僕、米乃国太郎が出逢った。ここでメルヘンな曲調が頭に浮かぶのは、辺りが明るく、人形がアンティークドールだった場合に限る。決して今、出逢っちゃっている金髪がデタラメなパーマをかけたようにボサボサで、着ているワンピースが所々、色の違う布で継ぎ接ぎになっている人形とは違う。思わず、童話の可哀想な少女達が走馬燈のように蘇ってくる。僕はその子を手に取り、

「怖いけど……よく見ると目が丸らで可愛い。きつと、君は苦勞したんだね、両親が死んで、生きていくためにエロゲシヨップで働いて。きつと、コスプレとかもしただろう。年齢を偽って、エロゲ声優業界にも参戦しただろう。けど、諦めちゃ駄目！ 下積みっていうのはみんな、そんなもんなの。ファイトお。えーいお、えーいお、桜餅！ えーいお、えーいお！」

そう叫んでいる内に自分のヘンテコな情熱が急激に冷めていく。業務用冷凍庫で自分を凍らせたい。そう、恥ずかしがりながら、お人形をテーブルの上にそつと、置いた。ばいばい、ナナ。

扇の仕掛けとしてはなんだか、生ぬるい。と思い、科学室の隅々まで探索した。だが、何処にもそれらしきものはなかった。

なんだ、とほっとしかけた時だった。

廊下側、いや……そのもつと、先の中庭から尋常じゃない音量の爆発音が聞こえてくる。僕は驚いて咄嗟に両耳を塞いだ。耳に心臓をぎゅっと掴まれたような死の音が鳴り響いている。それから数秒も経たずに……ガラスが床の上で粉碎していく音と、それと同時に冷たい突風が僕の背中を押しした。

突風に堪えきれず、床に倒れ込んだ。

数秒後、静けさが戻った。ただ、違ったのはその静けさに同化するように何か機械的に燃える音が微かに聞こえる。

口が上手く、開かない。

やっと、恐怖に震える唇が言うことを聞き、出た一声は、

「火事だ」

の間抜けな一言。とにかく、誰かに電話。と思いがたるのは二人の人物、頭脳明晰で僕をからかうのが趣味な河霜扇と、僕の自称母上を名乗る理事長兼清涼寮の寮長である宮御みやご継きよな。さあ、どっち？

僕は河霜扇を選んだ。何故ならば、携帯電話なる文明の利器を米乃国太郎は所有していないからだ。

素早く、ポケットからトランシーバーを取りだし、通信スイッチを押す。

「扇ちゃん。頼むから応答して」

「こちらの電話番号は現在、使われておりません。電話番号を再度、お確かめの上、お掛け直してください」

「え！ 電話番号、間違えた。えーと、えーと、何番だった？ う、こんな時になんて僕の頭は豆腐なんだ！」

思わず、声が上がっていく。もう、緊張を越えて、神経が千切れそう。今にも倒れそうだ！

爽やかな笑い声が、窮地に立たされている僕の耳元から聞こえた。あ……そうか。

「お前、トランシーバーだぞ。携帯じゃねえよ。で、何か用、米乃国？」

「そ、そうだ、扇ちゃん。火事、火事、中庭で火事、ガーデンファイアー！ ファイアーだよ」

「あー、お前。昨日の事忘れたか？ ラブドール事件。あー、まず、早とちりは非常にヤバイから現場、確認して来い。ほら、行け」

まるでfrisbeeを投げたから取ってこい！ みたいな簡単なノリで扇は僕に指示を与えた。僕の体、百四十七センチを倒すほどの突風が外には待ち構えている。火の勢いも相当、酷いに違いない。

僕は放尿しそうだった。あまりの過酷な試練に。

「おい、ヘタレ。早くいけよ。そして、この通信も早く終われ。今良いところなんだよ。ライトノベルの挿絵部分を凝視中なんだよ。ほら、あんだらう？ 湯煙の合間からおにゃのこの股間が見えそうで見えない。絶対領域？ でも、こう、目を凝らせば実は見えるのでは」

扇の要求通り、トランシーバーの電源をオフにした。恐怖が身体を科学室に留め、一種の地縛霊にさせようとするが、扇の僕をからかう行為がネコの額ほどの男気を全面へと平手打ちさせてくれた。

「行くぞ！ 米乃国太郎。お前はヘタレじゃない、ナイーブなだけだ！」

と僕は叫びながら廊下を駆けていく。廊下には音から予測した通り、ガラスの粉が散らばっていた。破片として残っているガラスは少ない。それだけ、衝撃が強かったと物語っている。

学園指定の上履きがシューズで良かったと、ガラスの粉を踏みしめていた。そんな余裕はすぐに消えた。

コンロ上にしか存在してはならない朱色の鮮やかな光が木々を燃やしていた。

「炎、火」

炎が中庭で一番、大きな桜の木を舐めている。

それにも驚愕して、両足がぶるぶると震えたのだが……すぐ横に

目を向ける。そこにはとんでもないものが存在していた。小型の機械の塊がこんがりと焼けている。もう、原型を留めていない。さらにその近くに不思議な物体があった。

卵だ。スーパーやコンビニなんかで売っているサイズのおよそ、二百倍くらいの大きさだ。その卵から人間の足が飛び出している。「なんで、卵に人間の足……。いやいや、ラブドールに違いない。また、扇ちゃんが僕を脅かす為に用意していたに違いない。大方、清涼寮の手狭な部屋に置けないから、卵の中に隠しておこうって……。いやいや、ないよ。ないよ、そんなのないよ」

卵に触れてみる。ざらつとした材質だ。そして、覗くと、そこには僕と同じ年代か、一個下の少女がいた。

エメラルドグリーンの虹彩は不思議と見つめていても、目を逸らしたい気分僕をさせなかった。少女の方も僕を認識したのか、にこつと微笑んだ。笑窪が可愛い。

少女の小柄な顔以外に目を向ける。全裸だった。思わず、両手で視界を塞ぐが、指と指の合間から見ってしまうのは健全な男子高生の証ということで許して欲しい。誰かに、主に警察に、何でおにゃのこの裸を凝視した、この変態！ と怒られたら、そう言い訳しようと思える片隅で、お持ち帰りしたいほどの美人さんだと生唾を飲んだ。

ちよつと、胸は小振りだが、そこがプリティーだ。むしろ、それが良い！ 肝心な多分、桜色の二つのボタンは少女の長い黒髪に隠れている。このサラサラヘアが、またまた、肝心な恥部を隠している。まるで、アニメの地上波放送のようだ。そこはDVD仕様にして欲しかった。

卵の殻に座る少女の足はすらつとしていて、踝の皮が薄く、骨の形が解る。その骨が私に触れてごらんと誘惑している。その一方では円らかな瞳がキラキラと好奇心の輝きに帯びている。

「とりあえず、君？ ここ、危ないし、僕と一緒に避難しよう」

そう、優しく声を掛けたというのに、少女の薄い唇は動く気配も

見せない。唇から視線をエメラルドグリーンの深海に向ける。きっと、僕が信用するに値する人間なのか？ 判断に窮しているのだから。

「知らない男がいきなり、現れて君は戸惑っているんだろう？ けど、今はその時じゃない。だって、火事だよ」

「……」
「ねえ、行こうよ。本当に危ない。風の方角は卵と……呼んでいいのかわからない物体の逆方向だけど、いつ、変わるかわからないよ」

「……」
僕は少女のピアニストのように繊細な指に触れた。

同時に少女が瞬きをする。

そのあどけないしぐさを見て、僕は思い出さずにはいられない遠い日に僕の本当の名前と一緒に封印した過去を思い出しそうになる。ああ、もう、駄目だ。僕はあいつじゃない。僕はあいつじゃないんだ！ それでも僕は陽乃心だ。あいつだ……。

「……僕には君を助ける資格なんてないのかもしれない」

「……」

「どうしてだろう、変なんだ。君の目を見てみると、嘘つきだらけの米乃国太郎でいらなくなる。僕は……ね。酷い奴なんだ。うん、僕は人殺しなんだ」

勝手に涙が込み上がってきた。これだけはどうしようもない。どんなに自分に対する防壁の言葉を何重に心に打ち建てても……涙が全て、台無しにするんだ。

「うん、僕は人殺し。それも、将来を誓い合った女の子の、母親と……女の子の妹を殺した。あっけなかった」

「……」

透き通った瞳はつぶさに僕の鼻水で開きの悪くなった口からだらしなく垂れる情報を吸収しているようだ。

「ごめんね、こんな世の中で一番汚い情報を君に与えてしまって。信じてほしいから、君をこんな寒空の下で。あ」

忘れていた。目の前の少女は裸だったのだ。なんて事だろう、僕は自分勝手な台詞を述べるだけで相手を労る気持ちを忘れていた。自分の羽織っているブレザーを少女に貸そう。僕はその為に一度、少女の指と別れようとした。だが、僕の指は少女の指と別れられない。ぎゅっと、とても強い力で握られていた。

「くっぴっ……」

雛のような何処までも透る声が少女の口から飛び出した。第一声だ。

「君、言葉が喋れないの？」

「くっぴい？ くっぴい」

疑問文口調は理解しているのだろう、少女は必死に首を傾けたまま、考える。解らないのか、だんだん、顔色が曇り空に変化していく。

やばい。だが、少女には言葉が伝わらない。どうしよう？

「何をヘタレておるのじゃ。キスすれば良かるう。キスで互いに暖め合えば、安心するのじゃ！」

僕の丁度、斜め後ろから幼い女の子が無理矢理、威厳に満ちた口調で喋っている。

「あ、そうですね。キスですね。ご親切にありがとうございます！
って、誰だ、あんた？」

横入りしてきた声の持ち主は仁王立ちしていた。いかにも強気な深紅の瞳、冷風に晒されている二つ結び、それだけでは髪の毛のオプシオンが足りないとはかりに地毛の金髪とは異色な雪色のエクステーションが左右対称に剥き出しの鎖骨まで伸びていた。夕焼け空と同じ彩色なのに僕の目を夕焼け空よりも惹き付けるドレス、太腿全体をカバーするオーバーニーソックスは赤い薔薇をイメージした刺繍が至るところに施されている。さらに、幼い声の主が豊満な胸を持つやや、背の低い少女だった事実には僕は間抜けにも好気の眼差しで魅入るだけだった。

深紅の瞳を怪しく輝かせた少女は妖艶に笑う。

少し間を開けて、地上に這う全ての人間が虫けらだと言わんばかりのやや、僕を小馬鹿にした口調で僕の問いかけに応える。

「我か？ 本来ならば、なれに名乗る名など、持ち得ていないのじやがな。萌え星人の幼女に一瞬にして好かれるとはなかなか」

僕はすっかり、泣いてしまった少女に目線をちらつと向ける。困った、本格的に泣き出している……。そして、警戒を解いて、目線をやわらかく、深紅の瞳の少女の方へと向く。

「いや、泣かれていますけど？ 好かれてないようなあ……。ってそれよりも火事ですよ！ あんたも逃げないと駄目ですよ」

「火事？ そんなものはすぐに止まる。あんなのブラックホールの群れにぶつかつたのと比較するとじゃ……。どうってことないじゃろう。消滅可能な訳じゃし。おい、やれ」

深紅の瞳の少女は顎をしゃくる。誰かにサインを送っているようだが、桜餅山の麓に位置する桜餅学園に夜遅く、闖入してくる馬鹿はいないだろう。当然、僕は怪訝な表情を浮かべる。これで合っているはずだ。

「おい、やれって誰に？」

そのちよつとバカにした言葉はすぐに撤回される。

啞然……。って言葉がこれほど、似合う場面はない。何も無い空間、しいて言えば孤独な自動販売機なる絵画名がつきそうな空間から続々と屈強な男達が現れた。男達は皆、そのまま、葬式に出席できそうな黒いスーツに身を包み、ランドセル程の容器を背負っていた。その容器からはホースが繋がれていて、そのホースの先にある発射口部を男達の黒手袋に包まれた両手はがしつと握り締めていた。「うわあ、なんか出てきた！」

「くびっ！」

と、怖いよと言う代わりに叫んだのだろう。同時に僕に向かって、少女は跳ぶ。

その瞬間だけは自分の脳内ハードディスクに永久保存した。宙に浮く少女の裸体は想像以上に神秘的だった。少年か、少女か？ を

区別するには恥部で判断するしかない年代の裸体を凝視することすら、禁忌なのに僕はそれを堂々、看破する。

乳首の色は

「うわっ、やっぱり桜色！」

そう、狂気の叫びを洩らす僕に変態を咎める嫌悪を露わにする深紅の瞳の少女。その瞳を無視し、僕は両腕にすっぱり、収まった少女の熱を守る決意を固める。

黒服の男達は好きなアイドルの話仲間としながら、手に持った発射口を延々と校舎を蒸し焼きにしている炎に向けていた。その発射口から特殊な液体なのだろう、透明な液体が勢いよく、噴射されている。ともかく、その液体の効果は凄まじかった。消しゴムで間違った文字を消すみたく、簡単に炎を始末していく。

「ふっ、火事の消火完了じゃ。グッジョーブうじゃ、皆の衆」

グッジョーブと親指を立て返す謎の黒服集団。その集団は一箇所に集まっていた。

もう、僕の頭はおかしく、なっている。頭痛なんていうレベルを越えて、めまいがしてきた。決して、腕の中に収まる少女の芳しい匂いでくらくらっときているのではない……はず。

「何、これ？ 扇ちゃん、もう出てきていいよ。これ、扇ちゃんの仕込みでしょう？ 幾ら何でも女の子を裸で放置は犯罪だよ」

「ん、なれ、頭のネジ締め直すのじゃ。うむ、その子は今、産まれた。信じようが信じまいが、人生は去勢ルートなのじゃ」

「もしかして、強制ルート」

「そうとも言っつものじゃ。ともかく、地球の運命を左右する萌え星人の幼女に名をつけるのじゃ。う　ことか、ち　ぼとか、禿げ山ハゲ憎とか、つけたら、地獄行きなのじゃ。ほれ、用意してあるぞ、地獄なのじゃ」

「さあ、ユー、キメちゃいなよ」

そう、黒服の一人が洪い声で言った。それは別に問題ではない。何が問題か？ って黒服全員がサブマシンガンを構えているからだ。

何処から出した？　なんていう質問はこの際、止めておこう。どうせ、黒服達が出現した方法と同じだろうから。

「……蒼空^{ウツク}」

僕は平穏な空を見上げて、そう呟いた。それは尤も、嫌いだったはずの言葉だ。でも、それしか、僕の頭には思い浮かばなかった。不思議と拒絶反応が起きない。

「くぴっ？」

「解らないかな？　米乃国太郎」

「陽乃心」

僕は二つの僕の名前を言いながら、自分自身の胸を指さす。

少女を一度、僕の胸から引き剥がす。寂しそうな顔をする少女には悪いが。

「蒼空」

僕は少女の桜色の乳首を指さす。

「くぴっ！」

「蒼空」

もう、一度、そう言って、今度は僕の頭よりも高い位置にある蒼空の頭を指さした。

「そ、らあ」

発音は不明瞭だったが、自分の胸に手を添えて確かに蒼空はそう辿々しく言ったのだ。さらにその言葉を連呼し続ける。楽しそうだ。「仲間に入れるのじゃ、雛^{ヒナ}みみる」

いちいち偉そうに聞こえる深紅色の瞳の少女は雛みみると名乗った。自分の胸を指さして。

「では、宇宙連合主催の試験の開始なのじゃ」

「は？」

「試験内容はそこにいる娘。うーと、蒼空じゃったな。なれと蒼空は共に暮らすのじゃ。蒼空の命が尽きるまで……。そうすれば、なれらと、我は同盟を結べるのじゃ。どうじゃ、良い提案じゃろ」

「何処がですか……」

出逢いは四月と相場が決まっているのに、少女達と出逢ったのは十二月二十四日、クリスマス イブ。神様は僕に厄介なプレゼントをしてくれたものだ。

僕はただ、生きるのも、死ぬのも、怖くて……ただ、動かぬ岩の如く、そこに在ることを望んでいた。いや、今も望む。

予感がした。僕は変わらざるを得ない。だから、この出逢いを無効にする言い訳を探していたんだ。サンタクロースの落とし物とか？

結局、そんなの何処にも存在していなかった。

「話しは聞きましょう。でも、聞くだけです。せつかくのサンタの落とし物を拾ったことですし、オタ話に付き合うのもやぶさかではないです」

「後悔するのじゃ、米乃国とやらは。にやり、なのじゃ」
結果、僕は後悔した。本当だった。

> ? <

世界は至って平穏だった。ここが土の中に埋まっているアースガイデーションという船内部でなければ、現実感のある風景だが、と僕は何度かに分けて外の風景を窓越しから眺めた。

高層ビル群は地球人の都市、東京を連想させる。そのビルとビルの合間に個人商店や、住宅が建っている。ビルが倒れて、その商店や住宅が押し潰される光景を想像してみる。

人間としてそんな想像はいけない。いくら、難解なお話しについていけないからといって駄目だ。お、今……欠伸が出ましたよ？

「おい、米乃国」

「うえ？」

急に僕の名前を呼んだ先輩は、自分の短く揃えた後ろ髪をシャム猫のように撫でながら、こちらの顔をにんまりと眺めている。不吉な予感がする。

眼鏡の位置を直した。微妙に眼鏡の奥にある目が笑っている。

「さて、米乃国。俺とみみる宇宙連合代表の簡単な、そう、簡単なお話を聞いていたら解るよなあ。さて、試験に不合格な萌え星人と、同星人の蒼空ちゃんが言葉を少しずつ、憶えてきたのは何故だ？」

先輩の問いにみみるは口出ししない。そういうことから、この問いの答えは僕の前で話した事柄の中にあると、いつか過言ではない。

だが、僕は敢えて、胸を張って言おう！ 人、それを根拠なき強気と呼ぶ。

「えーと、蒼空ちゃんは天才児……」

蒼空ちゃん、のところまでは良かった。やった！ 今日こそ、先輩の虐めに屈してはいないと軽やかステップでこのだだっ広い、宇宙連合代表室を踊りたいくらいだ。

ほら、お前の負けだぜ負け犬の意を込めて、先輩の目を見て話を続けようとする。それがいけなかったのだ。先輩の目は狼が鹿の肉を骨から切断する鋭い牙を宿していた。

先輩は昔、僕にこういう助言をくれました。誰も喰ってかかりはしないからちゃんと人の目を見て話しなさい、と。

だが、先輩の言葉

「え？ 声が小さい。もっと、はきはきと質問に答えなさい、米乃国。大丈夫、失敗してもそこを」

は、狼の威嚇の遠吠えの如く、僕の鼓動を凍らせた。

「お前の首に首輪付けて犬みたく、散歩させるだけだから。あ、ちゃんとマーキングしろよ」

は、呼吸を再開した僕の心臓に容赦のない狼の爪先を振るった。

その二段攻撃に僕の心のライフポイントは枯渴どころか、振り切れてしまっている。そうやって人を人が調教するの、と目の前で涼やかにレモンティーを啜っているのは同じ人物だ。

どうでもいいが、先輩には猫のイラスト入りストローなんていないだろう。この人のイメージは……レモンティーも飲むが、ついでに氷を掘削して、異空間に鎮めるだろう。

「あん？」

「いえいえ、何も言ってます、扇ちゃん」

「素晴らしい鬼畜振りなのじゃ。我が雛星の拷問に使えるかもしれぬ。どうじゃ、私のボディガードの他に、拷問の教科担任ならんかえ？」

みみるはどうやら、先輩の僕調教中説を完全に信じている。いや、信じても良いのだ。哀しいことながら、それが真実だ。でも、認めたくない、認めるしかない。それが社会の構造さ。そして、諦念を憶える。僕が少し、大人になれたのも、先輩のおかげだろう。

「いやいや、姫さん。俺は米乃国専属の拷問の先生なんです。ちなみに、Mの項目しか授業では教えていません。独学する勇気もないから、将来は立派なSの奴隷になると期待してます」

「で、お前の答えは？」

この人のSレベルは大気圏突入しても燃え尽きない強度を誇る。それを刻めとばかりに再度、僕を虐める先輩。

「蒼空は天才だから」

「ちつ。まあ、乱暴だが。正解としておこつ。詳しい回答は、こうだ。萌え星人の試験の内容は三年以上、長生きをするってこと……」

そう、三年。蒼空は遠くない未来に死を迎える。一般的な萌え星人は女の子で、卵子と卵子で赤ちゃんを産める遺伝子らしい。その辺の研究は人権派であるみみる筆頭に強固な反対がある為、行われていないが……強行派の医師団曰く、可能だろうという推測が成されている。そんなのはどうでもいい。問題は三年しか生きられない点。性交すると、百パーセントの確率で萌え星人は寿命前に卵を産むらしい。それを見届けて死ぬのが一生。

この情報は確かなことだ。何を思ったか、みみるはクリスマスイブの日からその情報を開示していたのだから。

その萌え星人は、いや、これでは語弊があるかもじゃ。萌え星人は寿命三年なのじゃ、と。とても、軽かった。

僕は自分が命を奪った友人の母親と友人の妹の命と、蒼空の命を頭の中で考え続ける。

ぐるぐる、ぐるぐる、空回りする思考。いやだ、いやだ、いやだ、何が、何が？

そんな思考地獄から逃してくれたのは、味方になれば頼りになる先輩のゲンコツだった。

「お前ねえ、三年ってキーワードを持ち出すとそう、ブルーになるのよくねえ」

「痛い。扇ちゃんの馬鹿力」

僕は先輩に抗議しながら、頭頂部を恐る恐る、触った。やはりだ、ゲンコツ山が出来上がっている。これで将来、育毛剤を頭に振りかけるようになったら、先輩のせいだ。僕は頬を膨らませた。

「お前が非力なんだよ。だからさ、そんな非力なお前でも蒼空にし

てやれることを探せばいいだろう。な？」

いつも、騙される。先輩の恥ずかしそうな微笑み。この人は笑うことが苦手なのだ。なんでも、クールな自分には似合わない、アイデンティティーの崩壊だらしい。

「勿論、試験は失敗。三年以上、生きるには萌え星人以外の遺伝子の配列を持つ遺伝子を取り入れるしか手はないだろう。だが、萌え星人の性質で、彼らは他の星と交流を持つことを決してしなかった。なんでも古い言い伝えで、星の外には巨大な穴が空いていて、飛び出した瞬間、そこに呑み込まれると思っただけだ。」

「馬鹿、じゃ。だから、我も驚いておるのじゃ、蒼空の成長ぶりに。」

頬杖を突いて、退屈そうにミニカーを走らせている。テーブルの上に日夜、民草の生活を守るべく働いてくれるパトカーちゃん、救急車様、クレーン閣下等の錚錚たる重鎮が鎮座されていらつしやる。その重鎮のクレーン閣下がみみるの手によって加速させられて、現金輸送車に追突させられた。哀れ、閣下は地に沈む。

そんなミニカーの出来事など、知らんとばかりに淀みなく、みみるの声は紡がれる。

「萌え星人は。」

「うーん、そいつは違っぜ、みみる様。萌え星人と他の惑星の文化が異なっていただけの話だろう。リアルが全てではない。有り得ない事柄もリアルとして捉えることができる。それが知性つてもものだろう？」

「じゃが、蒼空が天才というのに同意したじゃろ？」

「ニュアンス。にゅゝあんすが違うのさ。ほれ、蒼空話、聞かせてみる、米乃国」

「いきなり、振られてもね」

二人の視線は僕のけつたいな顔に注がれる。みみるのオーバーニースの神々しき美、先輩の野生と知性を含んだS神的美の詰まった顔を映している。僕の眼球は破裂寸前だった。そんな妨害をかい

くぐって、僕は一つのエピソードの扉を開く。

「じじいのはどじいかな」

その声を皮切りに、僕と蒼空の一週間前のある一幕を語る。

> ? <

それは晴れた先週の月曜日のことです。その日から桜餅学園は通常の授業を再開していました。その日に合わせて蒼空の学園デビューの日ってことに僕、扇ちゃん、継さんで決めていました。学生としてではなく、給食の美少女としてなんですけどね。

思い出されるは、日常生活に慣れるための特訓の日々。その日々にはしっしー顔面直撃事件、蒼空中浮遊事件、お食事解体事件：など、ありました。が本筋と関係ないのでまた、機会があればお話しすることでしょう。

扇ちゃんがしっしー顔面直撃事件だけでも話せと言いますが、無視しますすみみる様。

「蒼空、ハンカチ持った？」

僕はエプロンドレスをきつちりと着込んだ少女にそう話しかけた。少女 蒼空はほんの少し、僕の瞳を見つめていましたが、僕の言葉の意味が解ると、ポケットからハンカチを取り出した。水色の飾り気のないハンカチだ。

「あい、しーちゃん」

そう言っつて、僕に渡そうとしたけど、勿論、そうしたくてそう言っただ訳ではない。確認だ。

洗濯物を竿に吊しながら、その光景を見ていた清楚な淡い水色の着物姿の宮御継はやりわりと微笑んだ。それをまるで演出するように微風が継の長い黒髪をくつぐる。

「微笑ましいです、兄と妹の会話」

そんな言葉もあの時の僕には感情を高揚させる起爆剤にしかならなかった。なんて、可愛いそらあ。

っつて、僕……真剣に話しているんですよ。牛乳を鼻から吹かない

で真面目に聞いて下さい、みみる様。

「じゃあつて、米乃国が母みたいじゃ！ 笑えるぞ、笑えるのじゃ」
だからといって机を激しく叩くことはないと思われる。背が高い子どもと背が低い親なんて恰好がつきませんものね。しかも、蒼空、僕を親と思つてない。とほほ……。

さて、さて、話しを続けます。

「蒼空、ちり紙持った？」

「あい、しーちゃん。そら、いいこ？」

「蒼空、パンツ、ちゃんと穿いた？」

「あい、しーちゃん。にゃんがまえ？」

蒼空は自分でスカートの裾を持ち上げる。そこから覗く猫さんのイラストを眺めた。首を傾げる。もう、一度、眺める。もう、一度、首を傾げてから僕に視線を移した。

「何、確認してるんですか！ ちなみににゃんの方が後ろ」

洗濯物を箆に放り投げて、パンツの位置を直そうとする蒼空を抱き上げたのは、その発言者である継だった。本人にしては声を荒げたはずなのに、黒い瞳は穏やかな水晶体をしている。

「そら、わるいこ？」

「うっん、直せばいいの。にゃんを後ろにすれば、いいの」

「にゃん、直して」

そう、ちよっぴりお嬢様気質なところのある蒼空が僕に命令したが、それはどうだろう、許すはずがない人間としての理性が。

「私の息子。いくら、妹ちゃんのおパンツでも触れちゃいけません」

「今更……」

ここまで育てるのに蒼空の身体を何度、この目に焼き付けたことだろう。お風呂の入り方、お洋服の着方……その度に僕は己の性欲に打ち勝つたのだ。

「その度に僕はヘタレたのだ、の間違いだろう？」

「過去のお話しに入つて来ないで下さい、扇ちゃん」

そう、僕が先輩に釘を刺すと、先輩は少しきつと、睨んだがすぐ

に冷静さを取り戻した。

今更、とため息尽く、僕の心を見破るように継は先手を打つ。

「いいえ、蒼空ちゃんも恥ずかしいはずです」

「にゃんがうしろ。にゃん、にゃん、にゃおー」

だが、もう半分、蒼空はパンツを脱ぎ始めていた。

恥って何だろう……。

それを考えつつ、僕と蒼空、継は給食調理室へと辿り着いた。

狭い通路を抜けて、裏口の扉から室内に入る。室内には、人当たりの好さそうなおばさん達がいた。良かった、僕が思い描いていたサンタクロース系の人達だ。

だと、いうのに蒼空は僕の背中に隠れて給食のおばさん達に挨拶しようとしなない。それでも給食のおばさん達はにこにことした皺だらけの顔を崩さなかった。

挨拶した後、経歴をさり気なく、聞いてみるとここにいる給食のおばさん達は元小学校の教師だったり、元幼稚園の先生だったり、と子どもと接してきたプロなのだ。

そんな彼女らの蒼空懐柔法は巧みなものだった。

「蒼空ちゃん、いつまでもお兄たんのお洋服をぎゅ、ぎゅ、してたら駄目だよお」

元幼稚園の先生であるお下げ髪の真夏梅雨まなつつゆが恐竜のお人形を手首に装着して、さもそのお人形が話しているように女性でもやや、きついソプラノを発していた。

「あの〜」

「大丈夫ですよ。蒼空ちゃんの事は継ちゃん」

僕の後ろに背後霊のように控えている継の姿をやり手教師風の眼鏡のレンズに捉える。そして、磯壁好実いそかへよしみは言い直す。

「継理事長様から聞いていますから、スタッフ一同、心して立派な米乃国家のお嫁さんに仕立て上げますから、グッ」

親指を立てている好実は何やら訳の解らぬ雑情報も継から伝えられたようだ。僕は継に抗議しようとしたが、背後から両肩を抱きし

められた。身動きが取れない。

風に乗って背後から華の香りが……しなかった。代わりに強烈なビール臭がする。継という生物の性質を知らなければ、おかしき清楚な美女が！なんて嘆くことになるだろう。

僕は回れ右をするよ、

「のほほんとしている顔がほんのりと赤く染まっていた。思わず、僕はビールくせえんだよ！ と叫んだ」

「だから、過去のお話しに勝手に登場しないで下さい！」

僕は回れ右をすると、継に抗議した。

「また、朝、飲んできたんですか？」

「大丈夫ですよ、お母さんは金色水を飲んできただけですから、給食室前の蛇口から」

なんとも上機嫌な人だ。常に蛇口を捻れば、何故かビールが飛び出してくる魔法水が継理事長の元気の素だった。校内の至る箇所に設置してある。

それとはかく、とばかりに頭を切り換えるべく、ブレザーを脱ぎとボタンに手を掛けようとした。

「あら、何、僕も手伝いますよ、キラんな体勢に入ろうとしているの？ お母さん理解できない」

自称、お母さんモードに移行した継は僕の身体を無理矢理、調理室の出口方向へと向ける。ちなみにこのお母さんというのは、僕に家族はいないと言った僕を同情して継理事長がお母さんになってあげると言った発言から始まったものだった。こんなに続いているなんて。

みみるが僕の耳元で囁く。

「良い奴なのじゃ、継は。人の為になることを率先としてするのじゃ。地球大使のお仕事、理事長のお仕事、寮長のお仕事。エネルギーは九十パーセント、ビールなのじゃ」

駄目人間なのか、そうではないのか？ という疑問はさておいて、話しの続きをします。

僕は梅雨の操る恐竜さんから丁寧にハンバーグの作り方を教えてもらっている蒼空を一瞥した。蒼空はじつと、恐竜を眺めて、話に聞き入っていた。

時々、くだよね？ とちゃんと聞いていたか、確認を求める恐竜に対してあい、と元気よく、返事をして蒼空は応えた。ぴんと伸びた左手には輝く指輪がある。正確には薬指に銀色の指輪がはまっている。女の子はオシャレをしているものらしい、と僕は適当な女性雑誌から適当な知識を得て、以前、購入したものだった。

「可愛い」

「そんな可愛い蒼空ちゃんのお仕事ぶりを信じてあげて、君は勉学に勤しむ」

でも……と、キャベツをまな板の上に置いた蒼空を見つめる。心配でたまらない。

「指を切ったり、しないだろうか」

「ねえ、学ぶってことは失敗もつきものでしょ？ 失敗から逃げてそれっきり、そこから逃げたらそれはそこで終わってしまう。人間はね、命の短い生き物だから、一生、砂に埋もれるんだよ、それは」
継は目を細めて、蒼空の包丁の行方を見守っている。震えた包丁の刃の軌道さえ定まらない。愛らしく、うーんと蒼空は唸っていた。別にキャベツを細かく切る 千切りにするなんて簡単な技術だ。

簡単？ いや……違う。

「そうでしたね、僕も包丁の扱い方で失敗したこと、ありました。双嵐……」

僕は一端、一息吐くべく、いつの間にか閉じていた瞼を開いた。まだ、優しい闇にたゆたっていた頃を忘れずにしがみつこうとする。それでも僕の視界はぼんやりと現実の光を直視しようと努める。

「双嵐……朝が僕の指を一生懸命吸って……止めようとしてくれたんだ」

僕の記憶には必ず、そいつの名前がある。当たり前なんだ。一人で生きていく奴なんていない。

眉間の皺が深くなるのが自分でも解る。

「どうしたのじゃ……」

そんな僕の罪の傷跡を感じ取ったのだろう。みみるが僕を気遣う。珍しい。

「……」

無言の扇が痛い。お前は米乃国太郎だろうが、陽乃心ではない！
と今にでも言いそうな怒気が籠もっている。

「ともかく、蒼空の包丁捌きを眺める時間も僅か数分。給食のおばさん達に僕は追い出された。ちなみに蒼空の包丁はキャベツではなく、まな板を切ることが多かった。蒼空は大丈夫なのだろうか」

> ? <

国語の時間、昔の言葉を何故、学ばなならん？ という誰もが思う疑問。

数学の証明よりも恋愛成功の証明を教えてください神様と内心の叫び。このままじゃ、蒼空ルート〃兄妹ルート。ちなみに桜餅学園では米乃国太郎には米乃国蒼空なる先天的記憶喪失症を患っている妹がいる設定になっている。

保健の時間で思うことは知識よりも実践をお願いしたいんです！ そんな内なる叫びとの葛藤が全ての男子にはある。女子と別の教室で良かったと思う原因はその葛藤によって悪エネルギーがある部分に増幅されるのだ。それを見られると……今後の学園生活は絶望的だ。そうだ、ボツキマンという某国民的アニメヒーローのパクリが出来上がってしまう。

「ボツキマンになったのじゃな？ 萌え星人の適齢期は後、半年後じゃぞい。ぐふふふつ」

「なつたなあ、こりゃあ……」

みると先輩がまた、僕の話しに横入りする。この人達はきっと他人が停車しようとしていた駐車スペースを横入りするようなせこい人達に違いない。そして、そういう人は得てして自己中心的なんだ。

「殴るぞ、自己中心的なんて！」

「殴ってから言わないでよ、扇ちゃん」

さて、四時間目は体育だったのだ。最悪だった。僕はボツキマン。窮屈な股間を隠すべく、僕は走った。おかげでマラソン練習なのにぶつちぎりの一位。その代償は長時間の腰痛による痛みと、急激な疲労感だ。

それを抱えつつ、学食の門を潜った僕を出迎えたのは、お兄ちゃん専属給食の妹 米乃国蒼空というプレートを抱きかかっている蒼空が、

「おかえり、あなた。ごはんにする？ それとも、おふる？」

と辿々しい声で言ってきた。僕は照れてチーズが蕩けてパンに粘着してしまったと表しても良い笑顔で蒼空を太腿辺りから眺める。

蒼空にこういいう悪いことを吹き込んだ野郎どもを探そうとくると辺りを軽く見回す。体育の授業が終了してすぐに駆け出してきたというのに、もう数名の生徒達が談笑していた。結果、米乃国というキーワードで弱い少女に変なことを教える変態さんはいないようだ。いるとすれば、カウンターでちらほら、こちらの状況を物色しながら、レジスターを打っている継以外にはいないだろう。

僕が席について、じゃあ、ごはんにするよ、てへっ、と言う前に蒼空はテーブルに何やら、乗せた。何やら、とはこれが何なのか、正体を判別できなかつたからだ。黒い、黒い三次元球体に見える。例えるならば、黒い地球儀。

「え、これは何バーグ？」

「あい、ハンバーグ。たべる、しーちゃん。きつと、おいしい」

「蒼空、味見した？」

鼻を近づけた瞬間、焦げた苦い匂いがした。焦げバーグから発せられる白い煙さえも避けたくなる。

「あじみ？」

しまった！ 味見の意味が解っていないだろう、蒼空。急いで蒼空に味見の意味を教えよう。

「一度、食べてみるんだよ」

「りゅうさん、しーちゃんのだから、めって」

しまった！ 梅雨さん面白がっている。カウンターの横であまつさえ、手を振っている。聞き取れなかったが、がんばってね！ と言っている。

「蒼空？ お仕事は？」

蒼空が仕事をしている間に僕の斜め後ろ三十歩あたりにあるゴミ箱に焦げバーグを廃棄しようとその質問を蒼空にしてみせる。勿論後から美味しいっていう予定だったんだ。

それでも、みみると先輩は最低と口を揃えて述べる。実際に焦げバーグの黒さを体験していないから言えるのだ。

「ひとくち、しいちゃんगतべて」

焦げバーグをスプーンで掬って僕の唇にそれを触れさせた。ほんのり、苦い。

「落ち着け、ケチャップがあるじゃないか……」

「しいちゃん、ケチャップすき？」

「どつちか、つていう……」

蒼空は焦げバーグと一緒にお盆に運んできたケチャップのチューブを握り締めた。ケチャップが勢いよく、黒を赤に染め上げていく。もはや、キャベツの十切りがケチャップの重みに堪えかねて沈みそうだ。

「……と好きかな」

と僕が絶句混じりの言葉を言い終えた時には蒼空は焦げバーグにケチャップをたらふく、掛ける行為に喜ぶを見出したようだ。嬉々とした鳴き声をあげながら、両手でケチャップのチューブを絞めていた。どれくらいか？ と言いますとみみる様……それはもう、焦げバーグ島と周辺の赤い海ってタイトルがつきそうな芸術作品です、はい。

「あい」

「あいつて、おい……」

勿論、僕は泣く泣くケチャップの海から焦げバーグの欠片を僕という救命ヘリに搭載し続けた。キャベツもサルベージ。

その全てがにやにやとする思い出で、それから得られた蒼空の得意なことは、

「そう、蒼空は適用力の天才。ハンバーグの件といい、皿洗いといいね。あの子はまだ、数ヶ月しか生きていないんだ」

と僕は力強い口調でそれをみみるに伝えた。

「そうじゃな、それを考慮すると……試験は今のところ合格なのじゃ」

「その試験が蒼空と三年間、過ごすってことだろう。簡単じゃないか。それをクリアすれば、地球も宇宙連合の仲間入りなんだよね？」

みみる曰く、宇宙連合に所属した星は色々と技術協力を得られるそうだが……それにしても僕と蒼空のいるところにさり気なく、黒服の強面お姉さんとお兄さんが潜んでいるのはどうかと思う。それを含めての試験だ。

「そうじゃ。しつこいぞ、そういうことなのじゃ。励むのじゃ」

「あ、もうすぐ、完全下校時間だ。給食調理室に蒼空を迎えに行かないと、それでは失礼します」

時計は午後六時三十分を示していた。

「米乃国、このゴミ屑。お前の下駄箱に入っていたぞ」

律儀にも紙袋に何通も入れてくれたらしい。その先輩らしからぬ優しさが気になるが、今は蒼空のお出迎えが急務だった。

「みみる様、それでは失礼します」

みみるだけに挨拶をして、僕は扉を潜り、手前にあつたコピーメーカーを大きくした機械である物体転送装置に入る。それを確認した転送装置の係員の女性が営業スマイルと共に装置の左右にあるボタンを押す。

すると、桜餅学園の現在の様子が僕の目の前にホログラム映像として現れた。といっても、僕が突然、現れても危険性がなく、地球外技術の秘匿性が損なわれない箇所に限られている。

「陽乃心様、ご利用有り難うございます。現在、あなた様が転送できるポイントは以下のポイントです。一、米乃国蒼空様がお昼寝中の給食ワゴン収納スペース手前。二、給食室前のしょんべん臭そうな男子トイレでございます」

ホログラム映像と同じ光景をご丁寧に係員が説明してくれた。

その横では僕が何処へ跳ぶかを黒服がトランシーバーを片手に待

機している。あれ？ どこかで見た可愛いトランシーバーだと思つたら、今流行の動物トランシーバーシリーズじゃないか！ トランシーバーに見えない所が魅力的なのだ。それ故、ごつい男がキューとな河童さんのトランシーバーを握り締めている様は可愛い。

「やべえ、動物トランシーバー欲しい」

思わず、口に出してしまった。トランシーバー使いにとっては憧れのマストアイテム。

「ああ、ごめんなさいです。係員さん。蒼空の前に転送して下さい」

「はい、了解しました、陽乃様。では、お気をつけて」

係員がボタンを押すと、急に眠気が襲ってきた。視界が黒く染まっっていく。空気の匂いのようなものが変わった。石鹸の清潔な香りがする。芳しい。

何か、暖かい輝きに包まれている気がする。その暖かさは大切な人の体温のようだ。

ああ、この体温を僕はとても、好きだった気がする。

僕はその体温の理由が知りたくてゆっくりと目を開いた。あれ、おかしいぞ。これは僕がよく知っているにゃん（子猫のイラスト）ではないか？ そのにゃんが少し伸びていて周囲の白色が例えるならば、早朝に焼いたばかりのパン屋のロールパンのようだ。かぶりついたらどんなに香ばしい香りと甘みを僕の胃袋に提供してくれるだろうか。

きつと、小学生の頃、同級生女子のパンツを無理矢理、香がされた香りと甘み。

それにしても暗い。そうか、暗い原因は僕が被っているカーテンのようにふんわりとした生地か？

「何してるの、私の息子。妹のおパンツでビバークですか？」と、
継。

「あらあら、そんなに給食室は寒くないはずですよ。四月ですし、
継理事長」と、給食室のおばちゃんのうち誰か。

「だいじょうぶ。しーちゃん、さむいのなら、そら、あたためる」

と、蒼空。

これらの言葉は同時に僕の純真な心を直撃した。もう、僕の衣服は僕イメージ画ではボロボロだね。何故か、青少年の教育に配慮して股間の部分だけの布は真新しいけどね。

「無事に到着しました。オーバー」

「無事じゃないです！」

それでも、緊張感たつぷりの渋い声を吐く黒服に、僕は蒼空のにやんパンツの中心部に向かって叫んだ。

「あい。だから、しーちゃん、あたためます」

僕は蒼空の無邪気さに感謝した。まだ、変態にはならんよ、と二ヒルに僕は笑ってみせた。誰に？ 日頃、新聞を賑やかにさせている性的な変態さんに向かってさ。

「何語ですか？ これ」

数時間前、こういう時は思いつきり、引っぱたいてめって言うのも愛なのよと教育された蒼空の掌によって、僕の右頬に小さな掌の跡が構築された。それを手で隠しながら、僕は長テーブルの上を開封した手紙に目を落としていた。

「あら、私の息子の頭はもう、お馬鹿さんになってしまったの、これは日本語よ」

理事長室の主は、フカフカそうな椅子にどっかりと深く腰を掛けて嘆かわしいため息を吐く。

「いやいや、その横」

「あら、これは英語よ」

「いやいや、その下」

「あら、これは手紙で遊んでいる蒼空よ」

紐の指さした先には怪獣のように手紙を啜えている蒼空が長テーブルの上を四足歩行で闊歩していた。目は何だか、焦点が合っていない。合わせるのも嫌なくらい蒼空は退屈を強いられているようだ。

「いやいや、その蒼空が啜えている手紙」

「あい！ そら、いいこ？」

やっと、構ってもらえると、素直に唾液のたっぷりついたこれまた、訳の解らないお国の言葉で書かれた手紙を僕の掌に落とした。

「はいはい、いいこ」

「うっ、てきとう」

「そら、いいこ」

「あい」

「これはドイツ語よ」

「何で、ドイツ語？ 僕、ドイツ在住の方に知り合い、いませんよ」

「ドイツの大統領 ゲテンチーズ氏からのよう……ですね。あら、らら」

「宇宙人の事柄はアースガーディアン艦長のアカエルか、地球大使の私を通してからにして欲しいわね」

「理事長に、地球大使に、清涼寮長に……過労死しますよ」

「ならば、君にバトンタッチ、清涼寮長をね」

そう、爽やかな笑顔と共に肩をタッチすれば、職業がやりとりできるシステムに僕の閉じた口は門戸を閉ざした。

「……」

およそ、十秒くらい……理事長室の壁に飾ってある写真を眺めて次に言うべき、言葉を考える。この学園が完成するまでの写真が並んでいた。さすがに、その学園の下にアースガーディアンという巨大な船が埋まっているのを示す写真はない。

「本当に？」

「地球大使、嘘吐かない」

そう言っつて、継は全ての手紙を総括して解析した内容を僕に告げた。

「えー、この手紙全部、僕や蒼空との会談の申し込み？」

「ええ、試験に成功すれば……。多分、陽乃心が初代地球大統領になると見越しての政治的戦略でしょう。つまりは我先に、とお近づきになりたいんですよ、私の息子に。鼻が高いですよ。もう、もう」

「日時は早い方がいいですよ、その辺はみみる様とも、相談しな

52

>?<

七月七日、今日は七夕。みんなが笹に各々の願い事を吊したりするけど、誰もがそれをしたことでその願いが叶うなんて思っていない。ここにも独り、その寝ぼけた偽希望を憎悪している少女がいた。

少女の唇は半年も言葉らしい、言葉をその口から紡いだことはなかった。心を、言葉として紡いでしまえば、あの日、霊安室で母の手を握り、母の生前の優しさに反した自分のどす黒い感情の意味がなくなってしまう。

少女、双嵐朝（そつらんあさ）の脳裏にはずっと、その光景が再生され続けている。目の前にはそんな生命の危険とは何ら、関係ない今が流れているのに。

だから……見つけてしまったのだろう。朝のどす黒い感情が行き着く先、終着点を。その列車は長い、長い、トンネルにずっと、留まっていなければならなかった。それが社会生活を送るため、秩序の女神が決めたルールだ。

ガードレールの錆ついた箇所は何気なく、視線を向けていた。始まりには終わりが付きもののように、ガードレールも途切れていた。慌てて視線を真っ直ぐ、歩く方向へと修正する。案の定、自動車の行き交う道路と横断歩道が目前にある。

横断歩道の先にあるサクラ県でも有名なホテル アリエスを見上げて、こんなホテルに宿泊する人間はどんな殿上人なのだろうと自分の矮小さに惨めさを些か感じなくもない。

噴水の先にある玄関には絶えず、黒塗りのリムジンが停車する。そこから降りてくる人物は新聞やテレビ、教科書などに登場する人物ばかりだった。

「リムジンなんて、僕達には贅沢すぎるよ」

その声は半年前に最後に聞いた声

「朝ちゃん、ごめんね。僕が君の……お母さん、めもさんを……ころ……したんだ。僕が車道の真ん中を呑気に……歩いていなければ……。ガードレールに激突することは……」

とは全然、違い、澀刺とした声で誰かと会話をしている。

先輩と呼ばれた人物はベリーショートヘアの髪型で体型も良く、特に胸の発育が良い。自分とは大違いだとマドレーヌサイズの胸を朝は見下ろした。それにその先輩とやらの掛けている眼鏡の奥にある瞳は鋭敏な知恵のナイフのようだった。ああ、羨ましい。きつと、幸せなんだろう、笑顔だよ、あの女。

「馬鹿。役得だろう、そんぐれえ。パー券配れば、一儲けも二儲けもできたのに。人間と野生動物の違いは自分の利益になることはばんばんやりましよう。不利益になることはそれでは仕方ないって思われるような嘘で回避。憶えておくんだ、米乃国の妹よ」

「あい、そら、おぼえる」

片言の可愛らしい日本語の少女は何処からどう見ても日本人のようには思えない。緑色の瞳は終始、スポーツ刈りの少年 陽乃心の身体の何処かを凝視していた。朝とは違い、それは恋する少女の憧憬の眼差しにも、頼れる父親を観察する娘の眼差しにも映る。

朝は嫌悪した。心の中で罵倒の叫びを連呼する。そいつは上品な赤いパーティードレスを着込んだ少女の柔らかな掌を触ることの許されない犯罪者だ。罪のない少女が穢れてしまう、強く抱いたら壊れてしまいそうな身体を壊されてしまう。私の母や妹のように。

でも、良いか……。もう少しであれ、殺しちゃうんだし。

口裂け女のように歪んだ口からその台詞を溢しそうになった。その台詞を溢してしまっただけで拘束されてしまうだろう、今日は非公式ではあるが、ホテル アリエスのホールで会談が開かれる。宇宙連合と地球との今後の関係を左右する会談が。

「全く、変わってないんだ心君、そんなとこだけ。扉の鍵を閉め忘

れるとことか、大事な事柄はメモして置きましょうとか。確か、小学二年の北島先生のご指導だっけ？ そのせいで……」

「おい、お前。宇宙連合代表の雛みみる様に九百円貸すのじゃ。お願いなのじゃ」

「ん？ 誰？」

第二章 分かち合いたい、分かち合えない……。どうして、人は闘うの？ & 1

>?<

みみるは、少し不機嫌だった。いつも身に付けているエクステーションを忘れるほどに慌てて、桜餅学園最寄りのバス停から縞々模様バスに飛び乗った。ぎりぎりセーフ。

「ぜいぜい、と息を切らせながらもバスに乗って最初にすべき事を思い出す。

「そうじゃった。整理券を受け取るんじゃったな」

「おい、その一般地球人（アルファ）」

みみるは知らなかった。一般地球人と命名したヨレヨレのワイシャツと不健康そうな青い顔が特徴的な運転手を睨め付けている矢先に、その横で機械が薄っぺらい整理券が顔を出す。まだか、お嬢さんと待ち構えていた。

だが、雛星の女王 雛みみる様は知らない。

「さつさと整理券を寄越すのじゃ。今日の我は短気じゃ。早う、急ぐのじゃ。愚民どもめ、宇宙連合代表であるみみる様をこともあるうか、忘れおつて！ 我がお手洗いに行ってる間に！ それは少々、緊張もあつてか、下痢気味じゃった。おかげで三十分も頑張っていた」

「おい、早く整理券を取れ、餓鬼」

クールな野太い声のみみるを急かす。急かされたみみるは瞬間湯沸かし器に早変わりした。

「じゃから、さつと、我に整理券を寄越すのじゃ。我はちゃんと地球史を勉強してきたんだぞ。妹のあるるにお姉ちゃんって宇宙一の天才よね、だから私の宇宙立宇宙大学進学も推薦入学できたんだよって言われるくらいのレベルなのじゃ。なっははは、なのじゃ」

豪快に笑うみみるの明るさを殺したのは、痺れを切らした一人の老婆の鶴の一声だった。

「お前さんの、目の前に整理券がある。ささっと取って席につかない！ 早くしな。スーパーでキュウリの特売やってん」

「な、はは、のじゃ……。なんと！ 地球にもこのような便利なテクノロジーがあるのかや」

その脳内で用意された台詞は完全な照れ隠しだった。同時にみみるは思い出していたのだ。宇宙立宇宙大学 未介入惑星科 地球史の期末テストのとある設問を。

問一、未介入惑星 地球において、バスという乗り物があります
が、最初に乗る時、何をすることでしようか？

みみるはこう回答した。機械から整理券を取り出す、と。

我ながら優秀じゃ、とその時ばかりは鼻高々だった。だからこそ、みみるのブラックホール級の自尊心は激しく、傷ついた。後ろの席を大股開きで一人独占して、なけなしの自尊心を孤高に変化させる。近寄るな、彼女は人間じゃない。ライオンだ！ という中二病音声ほりえが声優 堀江百合ゆり声でみみるだけに聞こえてくる。それがみみるの自尊心を全快させた。みみるは堀江百合のファンなのだ。自分と同じ声質だと密かに思っている。

「天才にも間違いは、な、な、なのじゃああ……」

自分はエクステーション以上に大切なものを忘れてるのに気が付いた。血の気が一気に引いた。俯き、考える人のポーズを取る。まさに深く考える……。

この事態を教えてくれたのは、未介入惑星科 地球史の期末テストの記憶だ。

問五十、地球、特に日本で使用されているお金の単位は？

みみるは変態的な馬鹿だが、地球に関するペーパーテストはその馬鹿には当てはまらず、高い正答率をマークした。勿論、みみるの回答は円だ。

その記憶を辛くも思い出したみみるの表情も今にもえーんだ。そ

う、日本のお金を持っていない。今、みみるのリスさんポシエットに入っているのは

「アースガーディアン内や宇宙連合加盟国だけで通用するVIP専用ゴールドンカード……なのじゃ、終わったなのじゃ」

両側にある銀色の突起を握り、下窓を上向きにゆっくり開く。よし、全て開き終われば飛び降りて脱出できるかもしれない。背に合わない乳なんて所詮、脂肪だ。押し込めば、なんとかかなると考えたみみるの手は慎重に窓を上げる。下の部位は全て開け終えた。次は上の部位だ。

「あれ？ 開かんのじゃ……。どう、上窓を開けるのじゃ」

数分後苦心の末、開かない仕様だと諦めた。爽やかな風を顔面に感じる。あの雲一つない青空の向こうまで飛んでいきたい願望を胸に抱いていた。自分のツインテールを弄ぶ。ひよつとしたら、萌え星人みたく、特殊能力が備わっているのではないか。

「この場合、なれと同じ。飛翔能力が欲しいのじゃ」

窓から掌を指しだしたそこに蛾が止まった。その蛾に語りかける。だが、その言葉に蛾は応じることもなく、鱗粉を撒き散らせながら、飛び去ってしまった。

「なんて奴なのじゃ。私のツインテールが蝶の羽根ならば、なのじゃ」

そう、落胆のため息を吐いたところでバスは止まらず、頂上に桜餅学園が建っていた噴枷山ふんかやまを下山し、サクラ市街地へと入る。

バスはホテル アリエスの建物が目の前に見えたところで停車した。

「ご乗車、ありがとうございます。終点、ホテル アリエス前。ホテル アリエス前」

憎たらしくも、一般地球人は美声を響かせた。その美声に従って、客達は機械に九百円と整理券を落としていく。あの老婆も機械にお金と整理券を落としていく。次、次と乗客が同じようにする中、この事態を打開するためにみみるは知り合いを捜した。

その甲斐あつてか、窓の向こうに丁度、バス停のポールに寄り掛かっている若い黒服を視界に捉えた。

みみるはその黒服に大声で叫ぶ。

「おい、お前。宇宙連合代表の雛みみる様に九百円貸すのじゃ。お願いなのじゃ」

「ん？ 誰？」

みみるの予想に反して、黒服がいつも、着ているスーツではなく、しかも男性でもなく、振り返った女性が着ていたのは就職活動に勤しむ学生用のリクルートスーツだった。その服のクールさを引き出しているのは棘のある視線に浮かぶ深い慟哭のせいだろう。その黒い両虹彩がみみるを睨むが……みみるが怯えたのを知ると深い慟哭はより深くなり、棘は鳴りを潜めた……。

「あの、あの、知り合いとま」

「九百円か？ ほら、出しましょう。受け取りなさい」

第二章 分かち合いたい、分かち合えない……。どうして、人は闘うの？ & 1

>?<

「さつきはありがとうなのじゃ、えーと、確か、双嵐朝じゃったな」
場所を移して、十回目のありがとうを丁寧^{テイジン}に頭を下げて言った。

「良いんですよ、良いんですよ。困った時はお互い様ですし、何か、助けなきゃっていう気持ちになったんです。久しぶりに……」

「久しぶり？ どうしてなのじゃ」

みみるの言葉に気が触ったのか？ 前を歩いていた朝が立ち止まった。それに遅れて、ふんわりとポニーテールが頂へと手をつく。

そして、振り返る。片眼は長い前髪に隠れているがその視線は窺える。穏やかなものだ。

「さて、どうしてなんでしようね？ 心理学でも嚙^かつていれば解るのかもしれないが、人の感情なんてものは結局、その人だけの文化に基づいているものなのでしょう」

人懐こく笑い、話題を変える。

「それはそうと、よく、すんなりとこんな高級ホテルに入れますね。何処かのご令嬢ですか？」

百七十センチと長身なため、百五十センチのみみるの目を見据えて話すには中腰になるしかなかったが、それも苦にしていけない朝。

「そうじゃ。驚くなよ！ 我は宇宙連合代表で、^{オホクニ}雛国の女王なのじゃ。ここには地球の各国の代表と試験の対象者 萌え星人とその地球人の男子を如何に護衛するか？ または何時、発表するか？ で集まったのじゃ。当然、この高級ホテルにすんなりと入れる。顔パスなのじゃ。あ、あ、まずいのじゃ」

背の低い自分に合わせてくれた心優しい朝に気を良くして全て、喋ってしまった。みみるが慌てて、口を塞いだ時にはもう、全て話してしまった、後の祭りだった。

自分の失敗を主に扇にネタにされると思ったみみるは絶望感に包まれた。だが、その絶望感を破ったのはくすりつと女性らしさと中性の凛々しさを二割八割で調合した微笑だった。

「面白い内容ですね。些か、現実味を欠いています。あたしはリアリストではないので心配しないで下さい。デリユージョン イデオロジストですから。まあ、確かに顔パスって感じでした。ね、お嬢様という肩書きはリアルなんですよ」

軽くみみるの言葉をジョークとして受け止めた朝を案内した場所はホテル アリエス内に新店している太平洋を眺めながらお食事のできるお店 土偶とくだった。

「ところでお礼をして戴けるとか。ですが……あまり高いものならば、ご遠慮しますよ。いくら、お金を降ろすと仰ってもお嬢様だつて限度額はありますし……」

遠慮がちにそう言つて海を背にした席に座つた。

「大丈夫なのじゃ。ここでは我の財力は無限なのじゃ。第四世代のエモーショナルプレイヤーを何機も楽々、購入できるのじゃ。さすがにアカエルが目を光らせているので、試作機は」

「また、妄想ですか。あたしも妄想好きなんです。妄想をしているとね、悪いことをみーんな、忘れられるし、その逆も簡単なんですよ」

ウエイトレスの持つてきた水を口の中に含んだまま、左右に水の塊を動かす。別段、それに大した意味はないのだろう。だが、みみるには頭に引つ掛かつた単語があり、それがあるから妙に朝の言葉に深い意味を感じてしまう。

「簡単？」

ごくつと、朝の喉が水を食道へと送る音がする。日本人特有の明るい肌色がうねった。咳込んでから、笑顔と一緒に朝はみみるに話す。

「強く、現実の痛みを覚えておくには……妄想が一番つてことですよ」

「お客様、何をご注文なさいますか？」

丁度、みみると朝の会話に無の空間が生じて、みみるはどうしようと思いつつも、海側の席の後ろ、つまりは朝の背後にあるガーデンスペースを眺めていた。薄い赤の朝顔が綺麗に植えられていた。

みみるはなんと、可憐な小さき華なのじゃ……とうつとりした。ウエイトレスの声を聞いた瞬間、びっくりした猫のように飛び上がった。

それを見て、朝が笑う。その笑顔はこれまでとは違い、裏のない、幸薄くない少女の笑顔。まるでエンジェルスマイルのよう。

「笑うのは酷いのじゃ」

そうは言うが、みみるも笑っていた。

「みみるは、苺ケーキなのじゃ」

「あたしは血のように赤いトマトケーキを。ごめん、まだ。くすすっ」

顔を真っ赤にして爆笑しながらも、懸命に見本にあるトマトケーキを指さす。小さな人差し指がふるふると震えていた。

「飲み物はそうですね、二人ともコーヒーでいいですね」

笑いの余韻をまだ、内包していても、その発言は平常を取り戻しつつあった。その朝の意見にみみるは少し、考えた後、同意した。

馬鹿にされなくなかった。目の前にいる中性的な美女に、十二歳なのにブラックコーヒーが飲めないことを。陽光が指してもその造りもののように整った美女は霞まない。そう、なるまで、みみるは後、何年かかるだろうか？ 激しく、落ち込む。

「ふっふ、一つは砂糖を三杯入れて下さい。お願いします」

へっ？ と見本に目を通していたみみるは朝の方を向く。当然のような佇まいがそこには在る。

「無理はよくありません」

それでも……みみるは無理をしなければならぬ。これから、何十年と苦渋の決断を何百回も繰り返すだろう。母 雛そそのの仕事 宇宙を喰らう者を滅ぼす兵器の開発を手伝った。あの

化け物を初めて観測した瞬間、あれからは逃れられない。アリク連合の手段は間違っていると感じた。母の死後、正式にその仕事を受け継いだみみるは反論しなくなった。だが、みみるは口をつぐんだ。インフィニティーエモーショナルエンジン構築プロジェクト。それに全ての力を。それが唯一、人類が生き残る方法であり、それが唯一、王座を引退した父親の愛を受ける方法でもあるから……。

「ありがとう、会えて楽しかったよ。色んな妄想話はあたしの好物なんだ」

「うむ。また、何処かで会えると良いな」

そう言っただけで朝とみみるは席を立った。

みみるは最上階にあるロイヤルホールへと行くべく、エレベーターのスイッチを押す。

朝は土偶付近のトイレへと行く。

第二章 分かち合いたい、分かち合えない……。どうして、人は闘うの？ & 1

>?<

女子トイレ前の壁側からみみるエレベータに乗るのを窺う。

完全にエレベーターの扉が閉まりきった時、朝の頬に涙が伝う。

「すぐに会えますよ……」

みみるにも、心ちゃんにも……。そして、きっと、新しい仲間と一緒にもう、一度、あの日々を。駄目だ、そこには母も、妹も、いない。陽乃心が全部、壊した。

「まさか、自分が刃物の使い方間違えるなんてね」

鞘に封印してある果物ナイフをじっりと眺めた。そのナイフにどんな願いを乗せればいいだろう？ きっと、それは七夕に相応しくない。また、そう思うと、涙が零れる。

>?<

人には等しく静寂なる死が待っている。では、今の私は人と言えるのでしょうか？ と巨大なポットに入った少女は自問自答する。その裸体には幾つもの、チューブが装着されている。装着？ それは可笑しいなと少女、アカエルは嘲笑った。直接、アカエルにそれらは繋がっていて、強制的にアカエルを生きながらえさせている。

逆らえば、苦痛が与えられる。

逆らえば、萌え星人最後の希望である蒼空がアカエルと同じ道を歩むことになる。

「アカエル。蒼空と心君はちゃんと捕捉できているんでしょうね、お母さん的には凄く心配」

脳から直接、声が聞こえてきた。それは今、アカエルの瞳が捉えているのとは全く、異なる映像だ。その声の主、宮御継に言われるまでもなく、ブレインチャンネルを切り換えて、小型偵察子猫にやん（名前はなかったが、みみると婿さんのやり取りから命名）の脳とリンクしている。

その結果がこの映像。

蒼空と陽乃心は仲良く、一つの望遠鏡でサクラ市の喧騒具合を眺めていた。心は遠慮しがちで、蒼空を抱っこするのに専念している。微妙に心と蒼空に望遠鏡のサイズが合わないのだ。心が一人で眺める時は背伸びしていた。但し、上手くないかない、蒼空がよじ登ってくる。心と蒼空の様子を呆れつつ、読書（数学の参考書）に勤しむ扇。

その繰り返しを眺めながら、アカエルは別の場所へため息を吐く。

「はあ、すっかり、婿さんのお母様気取りですね」

「あらら、愛があれば、なんのそのよ。で？」

「はいはい、大丈夫ですよ。わたくしの可愛い娘 陽乃蒼空ちゃん
は婿さんと展望室にいます。みみる様専属ボディガードの諸刃の刃
が居ますから平気ですから、わたくしが出る幕はないでしょう」

にゃんの円らな瞳から本のページを捲る扇 有機物質感情士

第一位 諸刃の刃を確認する。頼りになりそうだ。眼鏡をちゃんと
掛けている。

「ましてや、空に待機してある第四世代のエモーションナルブレイカ
ー フランジュベルグ、試作機 白妖精剣の出る幕はないです。大
袈裟です」

そういうアカエルだったが、蒼空に危険が及んだら、いつでもア
ースガーディアン小型惑星調査船 エデンが対応できるように待機
させていた。無論、フランジュベルグも、白妖精剣も、唯一の王族
機 エクスカリバーもその船内だ。人間の視界には脳を誤魔化す電
波 ブレインウェーブを周囲十キロに仕掛けてある。ホテル ア
リエスを通過する一般人がふと、空を見上げてもそこには昼寝には
最適と思わせる青空が広がっているだけだ。

なんて、母の愛は偉大！ と悦に入っていたアカエルに鋭いツツ
コミが加わる。

「白妖精剣なんて誰もまだ、起動に成功していないでしょ。対象者
または対象物との心的相性百パーセントの人間か、親族遺伝を両方
とも必要とする機体」

「母の愛は無限なんです。通信終わり」
うるさい、継の罵声を脳内から放り出した。実際は彼女が喋り続
けていればの話だが、脳にはそれが認識として伝わっている。だ
が、それを聞くという選択を意図的に却下したのだ。

にゃんの脳に語りかけ、蒼空が見える位置まで歩いてもらう。に
ゃんは望遠鏡の背後の手摺りに飛び乗った。

「蒼空。髪の毛の色つやはわたくしと似てますね。背の低い……
……ところはあつ、クロエルお姉様に似たんですね。えへん、わた

くしは背が百六十センチだぞ、蒼空ちゃん」

と、ピースサインをしてみせる。だが、そこにあるのは自分を包む檻にも似た巨大な試験管の障壁。

生命を維持する保温水の中を平泳ぎした。

「わたくしはこんな化け物になっても遠くから貴女を見守っています。頑張りなさい、蒼空。滅びた萌え星人の女王……」

ゆっくりと目を瞑る。脳内の設定は情報解析モードにセットしておく。しばし、眠ろう。

「わたくしの蒼空」

それがアカエルの子守歌だった……。

第二章 分かち合いたい、分かち合えない……。どうして、人は闘うの？ & 1

>?<

僕は不思議に思う。何故？ 自分はここにいるのだろうか？ 確か、あの日からずっと、死んでいるはずの僕なのに……。生前の僕、陽乃心よりも米乃国太郎の方が生きている気がする。それをクリスマスの日から頬を寄せ合いながら一つの望遠鏡で暮れゆく街のオレンジ色の影を鑑賞している相棒と感じている。きつと、蒼空も今の僕と同じく生き活きしているのだろうか。

ふと、望遠鏡内に映る街並みを使い、あれなんだ？ と蒼空と遊ぼうと思いついた。

楽しいだろうな、と頬が綻ぶ。その頬から、正確には右頬から温かみが消え、体臭を一切感じさせない石鹸のやわらかい香りが消えた。

僕はそれだけで不安になった。

「あい、こねこ。これ、せいちょうする。なにになる？」

良かった。蒼空はどこからか、迷い込んだ子猫を大事そうに両腕で抱いているだけだった。その灰色の子猫は迷惑そうに蒼空を眺めているが、害を与える気配はなさそうだ。欠伸までしている。

「それはね」

「ねこだよ、しーちゃん」

「えへん、そら、えらい？」

「おおう、蒼空はそのヘタレの数億倍、偉いぞ。こいつ、数学の宿題は諦めるか、今日は遅くまで各国の方と話し合いだし。なんて、昨日、ヘタレの水溜まりに浸っていやがったんだ」

先程から熱心に何かを読んでいる。僕はそれが何なのか、近寄って確認する。それは僕達、桜餅学園御用達の一平堂いっぺいどうが出版している参考書だった。わんぱく坊主が女の子を足蹴にして女の子のリボン

らしきものを掲げて勝利のポーズ！と言わんばかりに大口を開けている絵が印象的。もちろん、PTAに^{ひんしゅく}顰蹙を買っている。それでも、変更が利かないのは素晴らしい参考書であるためだ。主に宿題として利用される。

僕は疑いの眼差しを先輩様にこれまでの復讐の総決算とばかりに向ける。

「チートしている人には言われたくない台詞ですよ」

「ただ、読書してるだけだ」

「知ってますよ。扇ちゃん、書かないでも大抵、事足りるらしいじゃないですか」

僕のデキル先輩様、扇様はその言葉を待ってましたとばかりに僕のおでこにデコピンを喰らわして、したり顔で自分の脳を指す。

「ここが、ここが、違うんだ、蒼空君？」

「あい。ここ、ここ」

蒼空も、扇の真似をして自分の頭を何度も指を指す。僕を小馬鹿にした含み笑いも忘れずにトレース。

「蒼空には言われたくない……」

後ろからガチャンという音が聞こえた。振り返ると腰を屈めて、取り口から缶を扇が取りだしていた。よいしょ、と昭和のおばさん風な掛け声の後、姿勢を元に戻す。

「おい、おい、蒼空の適応力を見たら、未恐ろしいぜ。てめえなんて、これよ」

コーラを何度か、振って僕に手渡した。思わず、僕は感動しそうになった。扇が僕に奢ってくれたのはこれで二度目だ。一度目はあの日なのだが……。

「僕は、またコーラか……」

そう、僕が落ち込んでいる時間も無く、僕の身体が普段の地球の法則では有り得ない独りでに吹き飛び、真っ白な壁に激突する奇妙な現象が起こる。なわけもなく、僕はそれを足を蹴るといふ些か平凡な格闘術で起こした女王様に抗議の目線を送る。

「ここにいたのか、なれら。我を置いてゆくでない、なのじゃ！」
なんて、言つて僕の鋭い目線攻撃が効いてない。あるうことが、
床に膝を付いている僕の近くにオーバーニーソに守られた御足がゆ
っくりと近付いてくる。その鈍重な動きが語る。ささつと詫びを入
れる。さもないとオーバーニーソが火を噴くぜ、と。

当然、僕は床に頭を擦りつくほどに下げて

「ごめん、みみる」

謝つた。僕は一般的な日本人だ。

「おい、酷いヘタレだ」

仲間だと思つてた扇が僕を非難した。さり気なく、えへつと笑つ
て蒼空も扇と共にみみる側についている。何か、知らないが僕対、
その他の人々で対立の構図になつて……。

「え、えー！ 僕、僕だけ悪いの。くそ、これ飲んで元気注入」

棒読みでわざとらしいリアクションの後、他から見たら、変質者
よ！ と叫ばれるような笑みを浮かべて、喜んで、それを拾い上げ
て

ぷしゅ~~~~~。

自爆スイッチを押した。いや、僕を含む仲間達の爆笑スイッチを
押したんだ。

人を陥れない優しい仲間の温かみは甘い炭酸水の味がした。僕に
はもたいたなくて、ゲップをしてしまう。

それでも好きだ、こんな空間が。今でも手に入れることを許して
くれる？ 朝ちゃん……。

第二章 分かち合いたい、分かち合えない。(?)

暗い空間に潜み、少女は宇宙連合と各国の記念すべき初の非公式会談の開会の挨拶を聞いた。歴史に残る会談の進行が、彼女の胸を締めつける。顎から伝う汗が暗闇に吸い込まれていく……。

「許しませんよ……。絶対に、殺す、殺す。殺す」

今の双嵐朝にはその憎悪しか支えるべきものはなかった。確かに朝の心に優しい日射しを与えるくらい、みみるとの接触は精神安定には重要だった。精神科医がもし、この場にいたとしたら、それを両手を挙げて認めるだろう。そして、それを続けなさいと言うだろう。

だが、もし、精神科医がこの場に……朝の潜んでいるダクトにいるとしたら、引き摺ってでも入院の手続きを取るだろう。

「止めなさい、そんなことをしても無くなった時間は元通りにならないよ」

「お姉ちゃん、もういいから。ちゃんと高校を卒業して幸せになつて」

「どうして、どうして、あたしにはもう、これしかないのに」

「そんな顔しないでよ、お母さん、明日」

声はするのに、そこには母や、妹の明日の影さえなかった……。

会談はその場にいる人間達の緊張に包まれていた。ずらりと、国際連盟に加盟している国々のトップがこの為に改装されたロイヤルホールの席にそれぞれ着席していた。勿論、公用語の英語で会議はつつがなく、進行している。国々のトップの視線を一斉に集める形で僕と蒼空、さらにその僕らの背の先にみみるを中心とした宇宙連合の重鎮が着席している。宇宙連合の方々は僕たちと姿形は変わら

ない。それは宇宙連合が宇宙に散らばった人類を集めたコミュニティーだからだ。そう、最初に宇宙連合で代表を務めるみみるが人類側に説明をした。

その言葉にも驚いたが、彼女らが英語を話していることにも声をあげて、国々のトップは驚嘆した。だが、僕はあまり、英語が得意ではないので不安になった。それでも、米乃国太郎になる前は、陽乃財閥内で家庭教師をつけてありとあらゆる教育を受けたのだが…。それもしかたない、人類側、宇宙人側、双方とも選りすぐりのエリートなのだ。

扉を警護しているスーツ姿の少女 扇に目を向けた。彼女も、きつと、そのエリートの端くれなのだろう。

僕は不安のあまり、用意された天然水を飲む。蒼空もそれに合わせて天然水を飲む。

「では、たった独りの少年と萌え星人に我が、地球の命運を託せと！ 日本の双嵐隼人」

野太い野性的な声はその大きなお腹から発せられるのだろうか、シンガポールの大統領 ロラ・シエが不満げに言った。

マレーシア、ニュージーランド、アメリカ合衆国からも不満が漏れる。特にアメリカ合衆国は日本と深い関係にあり、基地なんかもあつたりする。宇宙人と日本が結託して、アメリカを越える軍事大国になるのでは？ という懸念がどうしても彼らにはあるのだろうか。

それに中国なんかも、日本と決して良い関係ではない。気が気ではないだろう。

僕はそう、分析し、空のグラスを覗き込んだ。

「ああ、そうだよ。みみる地球連合代表が言うには、萌え星人を保護するのはその少年。えーと、陽乃財閥の」

「米乃国太郎です。朝ちゃんの……双嵐総理」

ダンディーなヒゲをボサボサに生やし、長髪の男性 双嵐隼人はどちらかというところ、そのアラブ的な風貌からよく、アラブ人に間違えられる。僕が双嵐家とお付き合いがまだ、あつた半年前の記憶

が正しければ、おじさんは日本人だ。

そのおじさんは半年前と同じ人の好さそうな笑顔で僕を見つめた後、立ち上がった。そして、各国の代表達に説得する。僕がいつも貰っているおじさんの励ましの手紙　朝は機嫌を損ねているが、君がめもの死に責任を感じることはない、あれに責任があるんだから。君は君の人生を送りなさい、私はいつでも応援しているよ、の文面通りの大人がそこにはあった。僕はその姿が見られずに……透明なグラスの底を眺めていた。

「米乃国太郎君に彼女を託した方が良い。萌え星人の特性上、始めに見た動物を親と見なすそうだ。親と子を離れ離れにするのは倫理的にどうか、と思うが？ ドイツのグテンチーズ」

ドイツのグランチーズ氏ではなく、みみるが応える。

「そうじゃな、我もそれには賛成じゃ。それにの、萌え星人は三年しか生きられないのじゃ。ある特殊能力故にと、仮説を立てる学者もいるのじゃが……。とにかく、こうも、臆病な子じゃ。親が認めた人物と以外、口も開かないのが萌え星人の特性でもあるのじゃ」
その臆病な萌え星人が声も出せず、涙も出せずに泣いている僕の膝の上に乗っかり、視界を塞いでくれた。

ありがとう、先から僕を心配するように、応援するように、見つめる朝の父親の視線が痛かったんだ。そう、僕はその視線で心が瀕死の状態に陥っていた。今は蒼空の黒髪がその熱視線を防いでくれていた。ごめん、ありがとう。

僕のこの場を離れたい気持ちとは裏腹に会談は続く。

「星が滅んだ時も、そうでした。第一級戦艦　ブレイブロードを初めとする戦艦で萌え星人……遺伝上では女性しか産まれないので、彼女たちと言っても差し支えはないでしょう。その彼女を救いに行ったのですが拒絶されました。なんでも、萌え星の外には底なしの穴が広がって、落ちたが最後、そこから抜け出せないという迷信とそれを産み出すとされる深白神様を頂点とする宗教　深白神教が一般的でした。ですから、親である米乃国太郎君が頼りになるでしょ

う」

僕と蒼空を不利にさせないべく、地球大使の継がやや早口気味で各国に説明した。それに一早く、反応したのはアメリカの大統領エル・ミーネだ。エルは僕らと同じ年代のようだ。スーツに着られているという印象だ。

「そうならば、仕方ないですね。日米和平条約に基づいて、我がアメリカは米乃国太郎君と米乃国蒼空ちゃんの平和な暮らしを保証しましょう」

その小柄な体格からは理解しがたい大声がロイヤルホール全体に響いた。

「いやいや、ことはそれで収まるレベルではありません。どうです、みみる様？ この際、公式に宇宙連合と地球の関係を広く、公表し、同時に各国の軍隊で太郎君と蒼空ちゃんを護衛するというのは」

「イタリアのフルセス……。前半は我もいずればすべきだと思っのじゃ、いずれな。後半は……何を恐れておるのじゃ。よもや、護衛にかこつけて、スパイを送り、我らの真意を探る腹じやろうか？」

「ふん、宇宙人共が変な事をしたら、石油を初めとしたエネルギー源を日本に輸出全面禁止する処置をとらせていただく。悔るな、宇宙人」

イタリアのフルセスはみみるの言葉に尻込みしてしまったが、OPEC（石油輸出国機構）の加盟国の一國、サウジアラビアのオウセラスト国王がみみるに怒鳴りつける。

「まあ、まあ、熱くなるな」

と、ロシアのアルコノフが仲裁に入る。

「そうじゃな、熱くなる理由はない。それにの。私の愛機 エクスカリバーを駆らせるだけでも充分、地球征服できるテクノロジを宇宙連合は用いておるのじゃ。今更、種も仕掛けもありませんんで、だまし討ちはしないのじゃ」

「それも、そうですね」

「そうですね」

と苦虫を噛んだ表情を浮かべた各国の代表達から賛同の声が挙がる。

ようやく、本題に入れそうだ。各国の軍事的な思惑なんてどうでもいいんだよと内心、僕は蚊帳の外で思っていたところだ。

僕の膝がふるふると震えているのに気が付いた。正確にいうと蒼空が地団駄踏んでいる。心無しか、両の頬が桃色に染まっている。

丁度、僕と蒼空の様子を見に近づいてきた扇に小振りながら手を振る。相手は怪訝そうな顔をしたが、蒼空の表情を見てにやりとした。また、この人だけが何か面白いことを考えている。

「扇さん、蒼空が先程からもじもじしてるんですけど……もしかして」

「察しろ、ヘタレ君」

「でも……この会議の最中」

「ああ、注目の的だな」

朝の視線は一人の少女を注視していた。三年しか生きられない少女、陽乃蒼空に。彼女が彼を失ったら、やはり、自分と同じようにどす黒い感情を自分に向けるのだろうか。そう思うと、朝はぞっとした。自分がそれをやろうと思った時はなんて、自分は正しいことをしているのだと甘美にも似た血のシナリオが脳に浸透したというのに……。

そのなんとも苦い迷いを掻き消すように独り言を放つ。

「うちのお父様。話し長いよ」

そう言っても、自分の心に所狭しとやってくる感情　憎悪、迷い、嫌悪、緊張、逃亡、死、恐怖、夢などのキーワードは渋滞を創り出す。それを掻き消すべく、ワッシャーと思い切り喋りたかった。それは許されない。ここは会談の場の真下なのだ。

「何が宇宙連合治外法権法を成立よ。これで、終わり、終わりなんですよね」

そう、呟いても渋滞は続く。

握った果物のナイフの鞘を捨てた。そこから現れたのは濁りのない銀色の輝きだった。

「蒼空、がんばれ……きつと、これで終わりだ」

僕は蒼空の、主に蒼空の下半身に向けて小さなエールを送る。ここでしーすれば、世界の笑いものだぞ、蒼空。

「あい、そら、がまんする！」

「蒼空！ だめ」

その言葉は虚しく、蒼空は僕の言葉に対して過剰なまでのやる気を出した。よく、体育教師、または音楽教師が言う、腹から声を出せとはこういう声のことなのだろう。

僕と蒼空のやり取りに各国のトップや、宇宙連合の方々がざっと一斉にこちらを向く。まるで、敵兵を発見したやり手のスナイパーの目のようだ。怖い……。

蒼空も恐怖を感じたのか、ちよつと、僕の両膝が湿る。

その異様な空間を破ったのが、商店街の気前の良いおっさんの如き馬鹿笑いだっただ。その人は腹を抱えて笑っていた。とても、この国の代表とは思えない。

「はっはは、変わらないな、米乃国君は」

「やっぱり、隼さんは気づいて……いたんですね」

そう言えば、昔の僕と朝の構図に似ていたものな。双嵐隼人が蒼空の様子に気が付いても当然だ。昔の娘と同じ状態だったのだから。「レディをエスコートしなさい」

「あ、はい」

辛くも双嵐隼人の機転で僕は蒼空の右手を引いて、扉に向かおうと歩き出した。

背後からは暖かい笑い声が聞こえる。人格者達が集まって良かったと僕はため息を吐いたが……

……急に痛みを感じた。

重い音が僕の右側から聞こえる。なんだと思った瞬間、赤く染ま

つた右腕と、懐かしい顔をそこに見た。

僕の瞳孔は開く限りまで開かれる。

スーツ姿の女性はポニーテールを鞭のように翻らせながら、瞳には迷いの光もなく、トドメの一撃を僕に加えるべく、腰を落とす。握り締めた真つ赤な果物ナイフは僕の肺に焦点を充てている。

苦しんで死ねること？ それが君の天国から受けてきた答えならば

「朝、やめるのじゃ！」

「お願い、止めて、私の息子に……」

「諸刃の刃において命じる。来い、フランジュベルグ」

「止める、そんな事しても！ めもは生き返らない！」

みんな、御免……受け入れる。

スローモーションに見える。死にたくないから、避けるって脳が命令しているのか？

でも、却下だ。楽しい人形（米乃国太郎）劇はここで終わりにしなきゃ彼女にだけはその権利がある。

朝の身体が一度、後方に飛び、素早く助走を付ける、僕を確実に苦しめるべく。

僕の右手から温もりが消えた。

「だめ、しーちゃん、だいじ」

必死の形相で蒼空はそのナイフを両手で包んだ。

「蒼空、なんで……」

ナイフが僕の肺に刺さるって解ったの？

驚愕のまま、動けない僕を尻目に銀色の光沢は、赤く鈍っていく。僕はそれが床に赤い点々をつける瞬間を見続けているだけで何もできない。

いや、あつ、と情けない声は出た気がした……。

蒼空の能力の意外なほど、早い開花に母親であるアカエルは絶句していた。自分がやらねばならないこの事態への考察をできずに、

にやんの瞳から覗く娘の血によって現実へと引き戻される。

その瞬間、自分の手に痛みを感じた。確認しても勿論、そこには傷一つない。試験管の周囲にある液体が瞬時にアカエルの傷を治すからなのか、お肌が常にすべすべだ。

「萌え星人の先読み能力……蒼空が？ でしたら……」

「フランジュベルグの出撃は却下。同じ理由でエクスカリバーの出撃も却下。エデンはそのまま、待機します」

にやんの脳を少し、借りて、蒼空の素晴らしい真剣白羽取りにひゅーと慣れない口笛で驚いている仕草を表現する扇にそう伝えた。

双嵐隼人総理大臣は自分の娘にただ……

「馬鹿なことは良しなさい。まだ、朝と心君は婚約者なんだよ。こじれたあれ、これが解ければ、前みたいに君たちは」

「うるさいよ、お父様」

と娘に翻弄されているだけだ。

「蒼空は大丈夫だ。確か、双嵐隼人総理は元医者だしな」

楽観的な言葉が扇から飛び出た。確かに……宇宙連合側としては無闇に武力を示して相手方を怖がらせるというのも外交上、問題がある。

特に白妖精剣は地球でいう核レベルのヤバさの代物を積んでいる。

「インフィニティーエモーショナルエンジンによる瞬殺白神剣……」

あ、搭乗者が足りない……」

「馬鹿になりました、アカエルさん？ それ以前にそんなん、使ったら制御不能で星が崩壊する……。現実的にはエクスカリバーの拘束機が妥当だろう。でもな、過去はあいつがケジメをつけるべきなんだよ」

そう言った扇も、アカエルも、まだ、蒼空任せのどうしようもないヘタレに静かなエールを送る。言葉にも、動作にも表れないが今、彼らができるのはそれだけだ。

「馬鹿！ あなた、なんで？」

無数の唾が怨念の籠もった言葉と一緒に蒼空の黒髪に飛散した。それだけでも、怖いのに、

「そら、ゆるさない。しーちゃん、そらのばば」

いつもの蒼空の幼い日本語なのに気迫が一音、一音、籠もっていた。それは大切なオモチャを取られないように意固地になって、抱いている小さな女の子のそれに似ている。

可哀想に、蒼空の左手薬指に光る指輪が赤く、染まっている。

可哀想に？ 僕は何を言っているんだ。そう言える資格があるのは、蒼空を一秒でも、早く、朝から離し、自分で決着をつける男だけだ。

両足がガクガク、震えている。最低だ、僕。

「え？ そつか……」

朝はその指輪を眺めて、すっーと俯いた。そして、僕をこの世のありとあらゆる憎悪を纏めた眼差しで敵視した。その瞳を蒼空に向けて、突然、蒼空からナイフを離す。

すかさず、僕は蒼空と朝の間に入る。だが、事態は余計に悪化した。

白い喉に自ら、朝が突き立てる仕草をする。少し皮膚に刺さり、鮮やかな血が肌を汚す。

「でもね、あたしは殺されたんだよ、ママをおおお。返せよ、陽乃心。妹をおおおお！ ねえ、返せよ、陽乃心。こんなところで子育てごっこなんで……」

そう言った次の瞬間、全く予想できない速さで僕の心臓を突き刺そうとする。今度こそ、覚悟を決めよう。だが、そんな決意の前に蒼空の手刀がナイフを落とした。それがまるでナイフの軌道がそこに来ると解っていて、待っている感じでやってのけたのだ。

ナイフを落とした反動で朝はよろめき、床に両手をつく。

それでも悔しさのあまり、朝は顔を真っ赤にして吠える。爪の暴力が床に悲鳴をもたらしていた。

「お前！ どこまで、あたしの心を弄ぶんですか！」

「僕はそんなつもりじゃない。朝が僕の命を欲しいって言うのなら償いの為に差し出す」

「ふざけんなよ、どこまで良い子、なんですか！」

ポケットから、バタフライナイフを取りだし、わざと僕に刃先を見せびらかす。もう、朝の瞳は新手の呪術に掛かったように焦点がない。

バタフライナイフを朝が軽く振ろうと動作したのと、同時に蒼空が握り締める。蒼空も怒りのあまり、顔を火照らせていた。

僕はただ、その光景を見て後悔していた。

半年前を。そう、半年前の冬が一番、小雪だった日。入試の一週間前のことだった。

どうやら、二人とも裏世^{うらよ}高校に合格できそうなラインまでは到達した。そのことに気分を良くした僕は珍しく、朝のパシリを申し出た。

道路中央をスキップで歩く中学三年生なんて、補導されても仕方のない怪しさだ。だが、そんなのは気にならず、大袈裟に食材

浅漬けの材料や卵、食パン、スナック菓子の入ったビニール袋を観覧車の如く、回していた。これに人が乗っていたら何人も殺しているなあ、と浮き浮きしている僕を、未来の僕は本当の大馬鹿野郎だ！ と何度も叫んだことか！

「朝、疲れてんだろなあ。あいつ、徹夜って弱いし、浅漬けでも作ってやるか。朝なだけになあ」

「うあへえ、やばっ」

気持ちの悪い笑い声だ、面白くもない。とうとう、勉強のし過ぎで頭のデータがクラッシュしたか？ なんて考える余韻があったのなら、ちゃんと歩道に戻れば良かったんだ。

未来の僕は拳を握り締め、脳内で再生される思い出に歩道！ 歩道だ、馬鹿！ この馬鹿！ と叫び続けていた。

だが、結末をしていると、呆気ないものだ。

僕の目の前に目が潰れると思うほどの自動車の放つ光量が近づいてきて、急に慌ただしい音がタイヤから溢れ、僕を避けて、ガードレールに激しく激突した。

しんと静まりかえった夜のとばりを鬱陶しく、感じるくらい、衝撃で凹んだ扉が開かなくて四苦八苦した。

そんなことしても、無駄だった。ただ、開かず、僕は無力に頭と口から血を流した意識のない朝の母親 双嵐めもを眺めるしかなかった……。

数分後、巡回中の自転車に乗った警官が通るまで、心の中で自分じゃない、と連呼した。

本当に情けない。

だから、現在……そう罵られても仕方なかった。

「いつまで、あたしのナイフ握ってるんですか、退け」

だけど、そんな僕を蒼空は守ろうと必死にナイフに食らいつく。

「あいい、いたい、いたい！ いたい！ いたい！ いたい！」

「蒼空、もう良いよ」

蒼空の肩に優しく手を置いた。

蒼空はそれでも、首を縦には振らない。長い髪が横に撓る。

僕は諦めて朝を直視する。

「そうだ、それも僕の罪だ。僕は弱かった。すぐに携帯を使って通報する勇気が持ってなかった……」

「そう、あんたのせいで、お母様は」

手術中を示す赤いランプが光っている。その光景を僕は夢心地に眺めていた。冷たいソファに腰掛けて、必死にだっしょうがないじゃないか、起こりえないことが起こったんだから、と必死に言い訳、都合の良い救いを天井に探していた。

あるわけない。ただ、蛍光灯が微かな音を立てて輝いているだけだ。他はたまに、通る看護士のシューズの音くらいなものだ。

この世界が終わったような寂れた光景さえ終わりは来る。でも、来て欲しくなかった。

医者が一人で申し訳なさそうに出てきたからだ。

そして、彼が全ての命を司る神様のように厳かに伝える。神様は白いマスクを手術着のポケットにねじ込んだ。まるで不幸の言葉を発する踏ん切りをつけるように。

「私も最善を尽くしましたが、母子共に死亡を確認しました。時刻は……十月十日 午前六時三十分でした……」

「先生、ありがとうございます」

暗い表情と無理に絞り出した声は両者とも同じだった。

そんな僕らのお辞儀が終わったところに朝がパジャマのまま、駆けつけてきた。履き物が三年二組とネーミングされた上履きだった。朝のお父さんにも病院側が連絡してくれたのだが、総理大臣である双嵐隼人は頻繁に関東で起こる地震についての緊急対策会を纏める仕事があった。関東大震災クラスの地震が遠くない将来あると言われて育った身としてはそれは仕方がないように感じた。

「お母様は？」

粘ついた声が僕を責めている。実際に僕は壁際まで追い込まれていた。

医師は既に役目は果たしたとばかりにこの場にはいなかった。医師にとつて、それは日常。でも、僕らは瞳さえ、交わし合えなかった。

「朝ちゃん、ごめんね。僕が君の……お母さん、めもさんを……ころ……したんだ。僕が車道の真ん中を呑気に……歩いていなければ……。ガードレールに激突することは……」

「そう……あんたが代わりに死ねば良かったんだ」

始め、朝はそう、自分の理性で言った。震える肩は暴力の衝動で今、思えば震えていたのだらう。当時は廊下の寒さのせいか、それとも母と妹を失った悲しみだと漠然と思っていた。

かっ朝の黒い虹彩が開いた！

それに驚く間も無く、僕は激しく、壁に頭をぶつけていた。後頭部を抑えながら、彼女の新しい一面に僕は恐怖で動けなかった。

「あんたが！ うわあああああ」

朝の感情の吐露が彼女の汗臭い匂いと一緒に僕を苦しめた。彼女という存在の檻が僕の目の前に今、まさに構築したのだ。

その騒ぎに気付いた通りがかりのベテラン風のおばちゃん看護師が朝の右手を押さえた。朝は僕を力一杯殴ろうとしていた。そういう体勢だった。

「止めなさい、ここは病院ですよ」

衰えの見える看護師の声にこれなら、と思ったのか、朝は獣じみた言葉と一緒に看護師の手を振り切った。

「そんなの知るかあ！ 死ね、陽乃心！」

そう叫んで、一発目で倒れた僕の全身に馬乗りになり、朝は僕の全身に醜い青アザを造り、噛み傷を首筋に造り、最後に泣きながら、僕にくちづけをした。

その意味を僕は結局、今も解らない。

だけど、今、すべきことなら僕は解る。

未だに朝のバタフライナイフが暴れないよう、持っていた蒼空の両脇に手を添えて僕は蒼空を思いつきり、くすぐった。

蒼空は爆笑しながら、それでも、

「そのすきなしーちゃん、ころされる」

と歪だけでも、ちゃんとした日本語を喋った。こんな時にこの子はまた、一段、大人道に一歩進んだ。

バタフライナイフが朝の制御下に完全に戻った。

嬉しかったけど、ここでお別れだと僕は笑い、蒼空は泣き、朝も泣いていた。

だけど、ナイフは……。

ナイフを握る蒼空を覗いていたみみるはもう、我慢の限界が来てい

た。にゃんを抱っこすると、その猫に向かって厳しい言葉を投げかける。

「エデン、ブレインウェーブ撒布オフ。エクスカリバー 対人攻撃機発射なのじゃ。この状況を打開するのじゃ」

その言葉と共に、蒼空と朝、心に注目していたこのロイヤルホルルに集まる人間に気づかれず、エデンは静かに姿を現した。その姿は不死鳥のようだった。

その不死鳥の嘴から、一对の輝く剣が放出された。但し、戦闘機程の大きさだ。そのエクスカリバーの柄が二つに割れて、そこからみる達、宇宙連合の言うところの拘束機が表れた。もし、心が日常でこれを観たらただのペリカンだろう！ とツツコミを入れるだろう。

しかし、そのペリカン 八匹の嘴からプラズマが発射された。

そのプラズマが見事、邪魔な窓硝子を大破させた。

バタフライナイフは突如、侵入してきた強風に翻弄されて、持ち主の手から離れて絨毯に落ちた。代わりに同じく突風で前のめりに倒れそうな僕の背中に硝子で構築されたナイフが刺さった。

「はっ」

僕の最後には相応しい断末魔の音が腹から漏れている？ 少なくともそれは僕の声ではなく、朝の昔……僕が指を包丁で切った時の声に似ている。

さすが、地上五十階。それだけに息がままならない。

背中にある激痛でどうすれば、良いのか？ 次、取るべき行動が浮かばない。スランプの作家さまのように。

「おい、馬鹿みみる！ この状況を打開だ？ みる、私の……」と慟哭する先輩。

「くつくつ、なんか……」
やだな。貴重な顔をしているだろうに。景色が霞んでいる。

「くつくつ、なんか……」
おかしい。青い色が床、一面に広がっている。

「あい、あい！ しーちゃん」と蒼空の悲哀の叫び。遠ざかっていく。

麻痺しているのだろう、僕の両足は床を舐めている感覚を覚えていない。

「いやあああああ、心君」とこれは、宮御継叔母さんの声。

最後くらい、母さんだつて言つてあげれば良かったね、と僕は心にもないことを嘔み締め、地面に向かって落ちていく。

「頑張るんだ！」

朝の父さん？ 何を頑張れつて。無茶な要求に僕は苛立った。

「頑張るんだ！ 朝！」

「え！」

太腿に何か巻き付いた。この懐かしい冷たさを知っている。けど、この冷たさは双嵐朝の暖かい心を冷やす冷却装置みたいなものだ。だから、僕は困惑した。その困惑が身体に伝わり、余計に左右に揺れる。

「死なせない、死なせない、死なせない。心君、足を離したら、いつものようにお買い物に付き合ってもらいます。しかも……」

言葉を切つて僕の重みに堪えるように、朝は叫んだ。

「しかも、私の下着選び！」

その声に呼応するように僕の身体は持ち上がり始める。視界がやつと、ロイヤルホール内の会場に戻る。蒼空が必死に朝の胴体を支えていた。

「ああ、朝ちゃんのスーツ、血まみれだ」

「いいんです。謝るべきは私です、ごめんなさい、蒼空」

「ゆるさない」

「そうですね、私は今が許せなかっただけなんですよ、きっと。心君は前に進んでいる」

僕を引き上げた後、素直に蒼空に謝罪したが、朝を蒼空は許そうとしなかった。だからなのだろう、表情に翳りのある少女は両腕を組んで寒そうにしている。

今にも凍えそうなのだろう、心が。そして、やがて、死んでしま
う。

だから、僕は言おうとした。

「違うよ、僕も」

朝と同じだ。死んだ？ いや、死んだふりの上手なだけの米乃国
太郎だ。

そういう心の吐露を僕は吐けなかった。代わりに朝が吐いたのだ、
それはもう、豪快に涙を流しながら……。

豪華な絨毯に散らばった硝子の破片達はその落ちてくるにわか雨
に襲われる。

「解つてはいたんです。でも、ずっと、心のモヤモヤをぶつけよう
がなかったんです。お母様の事故は」

朝は大きく、息を吸い込む。そのモヤモヤを振り切れないのに無
理している。

「お母様が定められた速度以上に車を飛ばしていたのが原因なん
ですから。心君を恨む理由なんて、なんて……」

そこで彼女は堪えきれなくなった。昔、僕がいじめっ子にコテン
パンにされ、朝に慰めてもらったように、朝は僕の肩をすっぽりと
包み込んで人の言葉にならない声で喚いた。

僕だけには解っていた。

いや、蒼空にも解っているようだ。少し背のびして、朝の髪を優
しく撫でている。

それは蒼空なりの許してやるよ、っていう寛大な心の表れなのだ
ろう。

奇しくもこの出来事が宇宙人ってふざけた存在がいることを世に
知らしめた。

それを知ったのは、ベッドの上で新聞を開いた時だった。

何故って？ これから僕は出血し過ぎた痛みと吐き気に堪えきれ
ず、脳が勝手に僕という名のゲームを強制セーブして、テレビの電
源を切ったからだ。

ただ、不思議と蒼空？ に似た声を聞いた。すぐでは無かったとは思っただが……。

「ごめんなさい、まだ、彼の存在を知らない星の方を巻き込んでしまっただけ」

何だ？ それは……。

「蒼空と貴方の絆がやがて……」

蒼空？ の癖に習い立ての外国人の如き、日本語ではない。

「夢か……」

「そうです、これは覚めない悪い、悪い夢の始まり」

そして、静けさが戻り、確か、蒼空と朝、扇が、誰が一番、僕を調教できるか？ という内容の凄いマニアックな夢を見たような気がする。

高校生はこれでなければ、いけないな……。

第三章 疾走する白き妖精と、愛情に飢えたオーバーニーソ神。

窓からは変わらぬ、夢を与えてくれる存在が在り続ける。

宇宙から観測した地球は実に青々しく、後光が差している。その後光を放つ球体に様々な資源が詰め込まれている。早く、その資源の風を感じたい。

そう考えると、少年は思わず、舌なめずりせずには居られなかった。奴隷にできるだけの人間は何人いるだろうか？ 特に自分より年下の少女は何いるだろうか？

そして、今度こそ

その思いは中断される。司令室に入室してきた無粋な人物によって。

「アリク連合の貴族 アリス・レオ様がそのような下卑た真似をしてはなりませんぞ」

初老ではあるが、まだ鋼鉄のような体躯を保持しているレオの妹 アリス・カノンの執事 ウレン・ゲーの叱責が飛んだ。

自分を密かに無能と囁いている癖に自分よりも無能な人間の言葉は、究極の目標を抱いている人間には本物の傷がそこにあるみたく、疼く。それでも、レオは握り締めた女性もの犬を模したペンダントを離そうとせずに、恥辱に堪える。

「地球人に混じって潜伏している先兵からの情報によると、未だに宇宙連合の内部情報を得られておりません。ですが……必ず、近日中には学生に扮した蒼空ちゃんファンクラブから情報がもたらされるでしょう。頭はそこそ良いそうですが、萌え星人は迷信で滅んだ馬鹿でありますから、必ずや」

その長々と抑揚なく、並べ立てられる口上を聞いていてもレオとしては我慢するしかなかった。

レオは指揮座に隣接しているベッドの上に寝ている少女をゲーの長い長い言葉の節々に一瞥をくれた。意識レベルは昨日と比べて、落ち着いている。昨日、サンプルとして先発隊が持ち帰った地球の酸素を与えたことによって落ち着きを取り戻したが……きめ細やかな肌には潤いが失われている。身体の至る所に肌の荒れが確認でき、彼女の吐く息が荒々しい。まるで、酸欠のようだ。

だが、違う！ 酸素アレルギーだ！ そういう叫びは胸にしまい、自分の染色にそっくりな銀色の髪を撫でて、大丈夫だよ、とくり返す。

「聞いておりますか、レオ様。カノン様とじゃれ合うのは後にして下さい。えー、良いですか」

じゃれ合うだと！ お前に背負う者の苦しみが解ると言うのか？ 俺は解らない。カノンはそれを独りで背負っている。だから、頑張れと投げかけるんだ。そう、彼は弁解したかった。恥辱に堪える。それは彼の戒めの台詞。

だが、彼は観てしまった。妹の意識レベルを示す値がマイナスに滑空していく瞬間を。それを知らせるようにけたたましいブザーが鳴る。

カノンは息をせず、死んだようにそこに在る……。普段ならば、微かに膨らみ、凹む華奢な胴体も……人形のような。

二十四時間交代制の医師団がすぐに、カノンの命を繋いでいる酸素ポンペを変える。それは先程のアリク星の酸素ではなく、残り少ない地球の酸素で充たされていた。宇宙連合と地球連合が手を結んだ今では酸素を補充しに降りるだけでも狙撃されかねない。

その手間を惜しむような、冷たい視線がゲーに宿っている。レオの被害妄想だったのかもしれない。だが、代表としての過酷な責務と妹の病状の板挟みに精神が疲弊していたレオには冷静さを取り戻す術が見付からなかった。

「じい、貴族たる者の資格を測る前に……」

と、穏やかな口調が突然、ドスの聞いた口調に変わる。

「敵戦力のデータを持つてこい。それ以上に酸素を持つてこい。それから、そういうふざけた口は聞くな、妹にそんな馬鹿な萌え星人みたいな目を見せるな、おい」

それだけではレオの感情の高ぶりは抑えきれない。咄嗟に自分の銃を抜いて、初老の脳天に向ける。

「ひいひいひい！ 止めてくだされ、レオ様」

哀れな老人の命乞いの中、カノンの蘇生処置が着々と行われ、ついでにチューブから朝食分の栄養を含んだ液体が流し込まれた。

さすがに妹の食事の後に行われる身だしなみの整えには兄としては同行は避けたい。

深い溜息を吐いて、長い銀髪を翻し、廊下へと歩む。それにゲーも同行する。

ふと、立ち止まり、長髪の男は一辺の嘘もなく、実直に嘆いた。

「俺はゼブンス ガードの一人、蒼天の槍だ。そのプライドに賭けて今回は、今回は失敗できなんだ」

そう、前の失敗は萌え星でのことだ。萌え星の酸素も地球ほどではないが、カノンには適していた。そう言った個人的な後悔と、軍事的な後悔が彼を苦しめた。

ありありと今でも思い出せる。

ソードタイプの真つ黒い機体が黒い羽根を模した鰐と刃が同化して、切っ先から波動が凝固した光景。止める間もなく萌え星をそれ一刀両断し、その範囲内に存在していた星、宇宙連合機、アリク連合機、カノンの搭乗していたランスタイプのイヴをも巻き込んだ。

「恐れながら……申し上げます」

「なんだ、言ってみやがれよ！」

まだ、いたのか！ 無能という意味でその言葉をぶつけた。

「恐れながら申し上げます、もう……そのような恰好は」

初老のウレン・ゲーはそれ以上、喋れなかった。レオの放った銃弾がゲーの脳漿を壁や床にぶちまけさせた。

「ばーか。俺は少しでもカノンと、同じでありたい」

「熱い心がお前には理解できんのか！ 害虫が！」

痩せ細った少年は拳銃をバッグに仕舞い、両肩の真っ赤なフリルの生地が特徴的なノースリーブの赤いワンピースを着ている意識などないかのように仁王立ちする。そして、まだ、足りないとはかりに銃弾を転がった死体に放ち続ける。

これに驚いてやってきた若い兵士に命じる。

「あゝ、お気に入りワンプに血が吐いた。これはもう、良い。替えをもって来い。丁度、カノンも服を替えた頃合いだろう、それとお揃いので頼む」

「あの……」

「あ、これ、ごめん。殺しちゃった。百人目かな。誰か適当なの、また連れてきてよ、なあ、頼む」

人の好きそうな笑みを浮かべる女装少年は血まみれの頬を少し、舐めた。

「カノンの唾液、早く飲みたいな。カノンもそう思っているだろう？ 俺の唾液を飲みたいだろう？ 全く、ヤダね、植民地拡大戦争は……」

兵士が死体処理に必要な道具を持ってくるべく、退去した後、レオはそう呟いた。

宇宙人が存在していた、観たこともない化学兵器がそれを証明してしまっただ。主にエデンなんて、人類からしてみれば動く倦厭すべき不死鳥だ。

些細な一つの出来事が多くの出来事を引き連れてくる。それを知ったのはかつて、双嵐総理が勤めていたイノウエ総合病院の個人専用病室でゆっくりと目を覚ました二時間後だった。何故？ その二時間を僕が要したか、という隣に眠っていた蒼空のあどけない姿が原因だった。僕は頭を抱えた。頭の痛いのは蒼空のあどけない……もとい、ピンク色のリボンを黒髪にはまだ、可愛いねって言うて良いレベルだろう……問題は下からだ、薄いシャツだけを着てい

る。しかも、それは僕のシャツだ。白い色だから主に学園の制服
ワイシャツの下に着ていたんだけど、蒼空はそれだけ。大事な箇
所が見えそうで見えない絶対領域は辛うじてシャツに隠れている。
そんな蒼空と二時間。

「げんき？」

「ああ、元気だよ」

そんなテンプレ話を繰り返していた。

そこに扇が新聞を抱えてノックもせずに入ってきた。この人はし
ようもない理由でノックをしない。

「おお、今日こそはビンゴだったか！ ついてるな、今日は。本当」

「で、したんだろう？ したんだろう？ 子どもはいつ、できる？」

扇が蒼空に詰め寄る。きつと、この人のことだ。次に出る行動は
解っていた。そう、思考して僕が動く前に蒼空の両手が扇の両手を
拘束した。

だが、そのおかげで大事な部分が見えてしまった。

僕は若い妄想力に打ち勝つことができず、鼻血をタラリと流し、
気を失った。

失った時、天国のお母さんが、

「心ちゃん、女の子の大切な宝物を覗いちゃったら結婚しなきゃ駄
目なのよ」

と聞こえてきた気がする。きつと、天国から面白がってるんだ。

何しろ……これで二人目だからだ。

覚醒後は、蒼空はいつもの動物シリーズパンツを履いて、はしゃ
いでいた。覗ちゃったよね？ って聞くのも恥ずかしい。僕は最悪
な

「ヘタレ」

「誰が、ヘタレだ。自覚してるだけに、僕は傷ついているんですよ」
「えっ、なんで？ 朝ちゃん」

振り返った僕を迎えてくれたのは、ベッドの横に座り、何処か居
心地の悪そうな笑顔を浮かべる双嵐朝だった。

「まだ、その名で呼んでくれるんですね？ 本当にお人好し。じゃあ、心君のお母さんの」

「どうやら、天国のお母様はまだ、僕を笑いにしたいらしい。僕は朝の言葉をわざとらしい咳で有耶無耶にする。そして、ふっと、驕りある表情を石膏職人のように素早く、形作った。」

「それより、朝ちゃんは大丈夫だったの、あんな事件を起こしちゃって、僕、ずっと、心配してた」

「このお人好し」

「そう、言って朝はゲラゲラと下品に笑った。その下品さは親友だからできる。開放的な笑顔だ。治療した後のある奥歯まで覗けた。」

「こう、笑うのはいつも、僕の前だけだった。帰ってきたのだ、朝は。笑い事じゃないよ、本当に」

太陽すら、蕩けてしまう柔らかな笑顔で僕は答えた。

「ああ、その事なら、陽乃典命ひのてんめいと、双嵐隼人が圧力をメディアや諸外国に掛けたらしい。尤も、宇宙連合の存在の影に隠れてしまった感があるのが大きかったかもな。感謝しろよ、俺らに」

「いいえ、宇宙連合で一番、まともなまだ観ぬ人に感謝します」

横から口を出してきた横柄な先輩の口にチャックをすべく、横柄な態度を示すが、この人もある種の鈍感のようで手に丸めた多くの新聞紙で僕の両肩を優しく叩く。

「んじゃ、会いにいかないとな。お前の傷をほとんど、治したのもその人なんだぜ」

と、最後に一発、いらぬ強烈な一撃を僕の右肩に喰らわせて、そっけない言葉で言った。

「その人は人間か？ 肌がすべすべ。どうなってる、蒼空？」

蒼空が心配そうに眺める中、扇から新聞の束で造りし剣を奪い取り、自分の硝子の刺さったであろう箇所箇所に恐る恐る近づけるが、痛み痛みの欠片すら残っていなかった。あれほどのことから、縫っても酷い傷だろうとため息を吐いた僕は蒼空と朝の言葉と、少女達の頬の感触で不安が吹き飛んだ。

「あい、すべすべ」

「あい、すべすべ」

「あーさー！」

仲が良いな！ 蒼空と朝の死闘はもう、過ぎ去りし過去の事か、
と思つたが矢先、蒼空が朝の頬を払いのけた。朝はその思いもよら
ない攻撃を受け、尻餅をついた。

「怖いですよ、蒼空。昨日の敵は今日の友っていうでしょ？」

よく観ると扇が着ているのと、同じ桜餅高校の紺色のブレザーと
スカートという出で立ちの制服を朝は着ていた。そのスカートにつ
いた埃を払いながら、朝は立ち上がり、蒼空よりも大人だから余裕
つてな感じのにんまり笑顔を浮かべた。

だが、年齢から公平に計算していくと、実はもう、蒼空の方が一
つ、二つ、年上かもしれない。その意味をさらに深く考えようとし
た。だが目の前に、正確には布団に新聞紙が無造作に放り投げ出さ
れた。

「アースガーディアンまでお前を治療したお方に会う許可の申請を
貰いにいくからそこで大人しくそれ、目通しておけ。お前が寝てい
た一週間で世界は結構、面白い様変わりをしているぞ」

僕の顔を指さしながら、扇は慌ただしく、出て行った。何やら、
僕とのお方を会わせるのは扇的には面白い祭りらしい。僕か、も
しくはそのお方が扇の仕掛けた祭りで炎上しなければいいのだが。
とはいえ、僕の今、すべきことは情報収集だ。

宇宙連合に関する各新聞の情報をまず、ピックアップしていく。
当然、テレビ欄なんてばい！ だ。この新聞は過去のものであり、
過去のテレビ欄を観て、自分がその番組を観たことがないのに、超
面白そうこの番組なんてやってられない。それに僕の部屋にテレビ
なんて高価なものがないからだ。あるのは、蒼空と、廃材で作った
家具達だ。

浅木新聞、あさき 浜名美新聞、はまなび 徒社新聞の新聞界の三強の記事を纏めて
脳内整理する。

七月七日、極秘裏に世界各国の代表による初の宇宙人率いる宇宙連合との対話に成功。尚、宇宙人のコミュニティーである宇宙連合は我々と同じ人間で構成されている。多くの新聞にはその証拠として写真が掲載されている。

オモチャ屋で何処かのガキ達と混じって流行しているカードゲームに興じていらっしやるみるさんではありませんか……。本当に子どもだ、この人。負けて、半べそ掻いている……。

どうやら、宇宙連合の操作によって、扇達、民間協力者及び、桜餅学園とアースガーディアンの関係性（以前、扇が三年から選択できる文系、理系の他にある特別クラスは宇宙連合の関係者あるいは宇宙連合にスカウトされた人類側で構成されている。表向きには東大、早稲田、なんて言ってるけど、うちの特別クラスの連中にはその後、足が途絶えているのはそれが理由と教えてくれた）が情報漏れしていない。

当然だが、僕の負傷の記事もない。この点は人類側や宇宙人側の情報操作。

七月九日、地球も一つに纏まらねばならないと、日本の総理 双嵐隼人がジェット機で各国を緊急訪問。皆が賛同する。代表は日本の総理となった。

やはり、伏せられているが、今回の騒動が僕（日本人）と蒼空（萌え星人）を中心に起こっているからだろう。強い義務感、責務感でこの決定が成されたと信じたい。

「さて、次の情報は」

「七月九日の教育テレビの、うさちゃんと遊ぼう！ を蒼空は観たような気がしますけど、どうでした？」

「あい？ てれびって？ なに？」

それもそうだ、僕の部屋にはテレビ、なんぞない！ 文明に毒され過ぎた人間は退化していくんだという確固たる理由を盾に蒼空にもトランシーバーだけ持たせてある。

「へえ、そうなんだ」

完全に小馬鹿にしている声が聞こえる。無視だぞ、蒼空。それはただの虫だと思え。そう、僕は思いつつ、情報収集に勤しむ。

七月十日、宇宙連合に加入する条件として地球連合に出した試験内容は、一人の地球人の少年と一人の宇宙人の少女がその少女の命が尽きるまで共に過ごすことだ。これに対して、多くの評論家がナセンスだという意見が大半だ。僕もそれには同感だ。何故だ、これほどのコミュニティーが？

それでも僕と同じように従順に地球連合は承諾したようだ。それからは防衛について話が行われたが、宇宙連合の技術力を目の前にしている彼らは桜餅学園周囲の警備を担当するに留まったようだ。勿論、宇宙連合の技術力で引き下がったのではなく、地球人の少年に配慮して普通の生活がなるべく、送れるように、という実に見事な寝技だ。これでは新聞各社も反論できない。

七月十一日、記者にアースガーディアン内部が公開される。もちろん、地中基地としてのアースガーディアンではなく、単なる空飛ぶ巨大要塞都市としてだ。だから、桜餅学園との関係性は、その情報からでは追えない。

そこでの生活模様は全く、日本と同じだが、円ではなく、ルーンという硬貨で商業が成り立っていると、平和的な写真付きで紹介されていた。その写真にはやっぱり、みみるが端の方に写っていた。この人は心霊写真気味になってまでも、目立ちたいのだろう、可愛い人だ、脳みそが。

それにしても……と一息吐くべく、宮御継の差し入れてくれたらしき、ハートのクッキーを籠から一つだけ、摘む。摘む際に見えた息子へ愛をこめて、なる文章は見なかったことにする。

「うはー、こんなに漏洩するなんて、宇宙連合もたいしたことないですね」

いきなり、扉が開いて、おでこに高速のデコピンが飛んだ。避けるのが不可能だった。

あれ？ と思い、鈍い動作で壁に掛けられた時計を観る午後三時

二十分。扇が病室を出てから二時間が経っていた。

「アホ。重要じゃない情報を大量に公開して、その森の中に秘密情報を隠してるんだよ。そういうのはセオリー、お決まり、だろ！馬鹿！」

「痛いですよ、扇ちゃん。傷口、開いちゃいますよ」

「大丈夫だ。あの方の治療を受けられるだけで幸運……か？ あ、ある意味、嫁姑問題に。いやいや、そこはかとなく、背徳感が。ぐへへへ」

気持ち悪い笑いはこの人の邪悪さが滲み出ている証だ。徹底的に避けるに限る。

「朝ちゃん、蒼空、この笑う人形はここへ置いて美味しいモノでも食べに行こうか？」

「デート！」「と異口同音の蒼空と朝コンビ。

「え、どういう展開で、そうなるの？」と反射的に狼狽した僕。

「ばーか、もう、お前は逃げられないよ。絶対、三十歳で魔法なんて覚えられない種だぞ」

「魔法？ やだな、現実を直視して生きようよ、扇ちゃん」

僕は腹の底から笑った。笑った後、気が付く。この人の復讐は心底、地獄に堕ちた方が……というぐらい、恐ろしい。

「お前……。魔法使いになるかも。この鈍感！」

「痛いよ、ハゲちゃんよ」

頭を引つ張られつつ、僕は扇と無理矢理、シャワールームへと入っていった。さすがは、一番、高価な病室。金箔をそこら中に貼った床と湯船がある。そこで僕は扇の本当の邪悪さを知った。

この人の生き甲斐……僕、米乃国太郎、改め、陽乃心を虐めること。

ぜひ、卒業文集の趣味欄に書いて欲しい。こうなれば、後世まで伝われ、ヤケクソだとばかりに僕はそれを着た。

ここは一般エリア。その一般の名すら奪い取りたい気分の僕。い

や、僕の出で立ちを決して変ではない！ 変ではない！ と自分に魔法を唱え続けた。だが、魔法なんてこの世に存在しないことを僕は知っている。アースガーディアンに到着後、蒼空の検診もついでにやってもらった結果、蒼空は間違いなく、二年半の命だつて、宇宙連合の北野医師きたのが表情一つ変えずにそう言っていた。みみるも同席していたのだが、みみるもそれが当然のように構えていた。

ロビーで待つていた蒼空に聞けなかった。

君の命は後、二年半だよ？ って……。

今も聞けないでいる。そう、世の中に魔法なんて都合の良いものなんてない。

僕が宇宙連合のマスコット 猫の胴体と、犬の下半身を持つ不思議な生物であるパピドくんの着ぐるみを着てエモーションナルシップ、そうアースガーディアンのような宇宙船を呼ぶそうだ、を闊歩しているように。

「しーちゃん、そら、それ、きなくてよかった。これ、らっきー？」

「ラッキーに決まっているなのじゃ。我にその嘆願書が届いた際に閃いたのじゃ。なれらのうちの誰かに着せればいいのじゃ、とな。

扇のフォローは実にナイスなのじゃ」

「扇さんは逃げましたけど……。アースガーディアン内の産業の活性化だか知らないけど、各エリアでこんな魔物が練り歩いているのはさすがに……逃げるわ。心君、不気味格好悪い」

商店街のみんなが、みんなが、僕を振り返る中、グサリと胸に食い込む台詞を言ったのがあるうことか、味方であるはずの三人の少女から拳がったものだった。僕の右腕を頑なに離そうとしない歩道まで伸びそうな黒髪を弄ぶ白いシャツとジーパンのラフな陽乃蒼空スカートを履いているのに大股で僕たちの前を歩く白い髪エクステーションを鎖骨まで垂らしつつ、ツインテールとオーバーニーソの一般装備の他に今日は臍だしルックな雛みみる、ぴんと背筋を伸ばして、偶然的に僕らの桜餅学園を宣伝しているかのように着ている制服を目立たせている髪を一纏めにした中性的な魅力のある双嵐朝

からだ。

確かに僕も間が抜けていると着ぐるみ内でため息を吐いた。しかも持っているプラカードの言葉が幼稚臭い。

みんなで消費すれば、怖くない！ みんなで消費すれば、この不況も乗り切れる！

いや、確かにそうなんですけどね。はい、そうですかって出す人はいるはずない……とプラカード文面にすら、不平不満を言いたい気分の僕が観たのはお菓子を買い漁るみみるの姿だった。あっと、いう間にみみるの両腕には食べきれないほどのお菓子の山が出現する。それをみんなで分け与えるのか、と思いきや、全部自分で食べようと頬張る。後ろから蒼空が羨ましそうに眺めていた。

僕はそれを、不憫に思った。この子の時間はもう、残り少ない。だが、普通の子のように僕は蒼空と接したかった、朝と接するように、扇と接するように。勿論、みみると接するように。

「ごめんね、僕は貧乏だから。うちの父さんに言えば、陽乃財閥系列の引越し会社のトラックでお菓子を山のように届けさせることも可能だけど、蒼空、それは」

「わがまま？ ごごまん？」

「正解」

と横から朝が口出した。

「あい、おかしはいらぬ。そら、しーちゃんのぱぱからしーちゃんのみようじをいうの、ゆるしてもらった」

「叶わないな……」

「へえ？ 何が？」

僕は狭い空洞から頭を抱えて苦々しくもあるし、それすらも楽しんでるような朝の微笑を眺めて問い質した。

「恋することにさえ、気づいていない女の子にはどんな女の子にもない不思議な恋愛パワーがあるってことですよ」

「よく、解らないけど、意外と乙女なんだね、朝ちゃん」

「扇さんの言うとおり、きつと、魔法使いになりますよ、心君」

「へえ？」

「ま、しーちゃんが独り身のまま、だったら、この朝ちゃんが貰いますよ。チナミチヨコ一年分で」

高校生にありがちなジョークだと僕は錯覚して、

「大丈夫、僕には蒼空がいる。蒼空が当分、隣にいるから、朝ちゃんには迷惑かけない。もう、何年も……迷惑を掛けたし。大丈夫。孤独になりはしないんだよ、人間」

そう、深く考えずにふと、心に浮かんだ想いを喉から吹き出してみた。

木々の影が朝の顔を寂寥感に溢れたものに変える化粧だとは思えなかった。僕はどうしたの？ と聞けなかった。けど、僕は駆けだしてどうしたの？ を言おうとした。

朝が駆けだした瞬間、涙をそこに見た気がしたからだ。

「離してよ、みみる。朝ちゃんが泣いていたんだよ」

僕は半ば、義務感と半ば、同情心を織り交ぜてみみるの説得に掛かろうとした。

その前に服の袖を掴んでいた手が急に離れ、僕は前のめりに倒れそうになった。そして、横目でみみるがビンタの動作に入ろうとしている。

叩かれる。そう、思った僕はぎゅっと目を瞑った。

それを阻止した蒼空の薬指にはシンプルなデザインの指輪が銀色に輝いていた。

あ、思い出した。朝が昔、言っていた。結婚指輪は左手の薬指に填めるものなんだよって。

昔、そうはにかみながら彼女の父と僕の父で決められた婚約者はそう、教えてくれた。僕が起こしたあの事件でそれは解消になってしまったが、同じ感情を朝は持っていたんだね。

「蒼空、止めてくれてありがとう」

「あい、ほめられるの、うれしい」

「でもね、僕は叩かれた方がすっきりしたかもしれない……」

「なんで、そら、いたいのきらい！ だから、しーちゃん、まもつた」

献身的な眼差しで僕を見守る蒼空の薬指から、銀色の指輪を外せなかった。蒼空に何気にプレゼントした時から、心の何処かで蒼空と僕の道は重なり合っているって決めていたんだ。

僕は未来の晴れやかさと、過去の消失感を同時に感じて心が引き千切れそうだ。竜巻が僕の身体を引き裂いてミンチにしている錯覚を憶える。

それでも、夕暮れ時の街は暖かみのある情景で進み続ける。僕の悲しみなんてしちゃこつちやない彼ら、彼女らの歩みは実にゆつたりと、慣れたものだった。

僕の傍を仲の良いおじいさんとおばあさんが一歩、一歩に時間を掛けて歩いている。もう、急ぐことはないんだとその一歩は語っているようだった。

その彼らの会話が少し、僕の耳に入る。

「ああ、そっぴや、ばばあ」

「なんだい、じじい」

「蔵田くらだのじじいがついにくたばりやがった。俺らだけになつちいまつたなあ、同級では。俺よりも腕っ節強かったのになあ」

「そういうもんですよ、じじい。死にそうにない奴から死んでくもんなの。きつと、次はあんただ、じじい」

「俺は一緒にいいなあ」

「そっね、やつぱり、その方がしっくりくる。後腐れがないわね」

なんて、会話は尚、いつそう、僕の未来の翳りと過去にあったはずの翳りの最終地点のお手本だった。過去はもう、届かない。いや、振り返らない。すると、未来の姿はすぐ、そこにある。

僕は仲の良いおじいさんとおばあさんの遠ざかる曲がった背中を眺め続けた。枯れる前にもう一度、咲こうとする些細な遠き昨日の栄華のような気がして……泣いていた。

その僕の肩をそつと、みみるが優しく叩いた。

「二年半、楽しく過ごすのじゃ。それで蒼空とはお別れ。それが一番じゃ。死の恐怖は誰にでも訪れるのじゃ。それを無闇に長引かせるのは我は……絶対に反対じゃ」

絶対という言葉と、深紅の瞳は燃えていた。何か、強い力によって。

だから、僕も泣くのを止めざるを得なかった。

「しーちゃん、早く、早く」

いつの間にか、僕らと離れすぎた蒼空が元気に飛びはねながら駆け寄ってきた。言葉と行動が一致していない。僕は笑わざるを得なかった。

「地球人は忙しい奴ばっかじゃ。だから、味方になりたくもなるものじゃ……」

そのみみるの儂げな言葉は、今日の豆腐を最後まで売ろうとして躍起になって傍に来る通行人達に声を掛けまくる中年男性の声に混じって消えた。

途中、着ぐるみは商店街の着ぐるみレンタルショップに返却した。レンタルものだったらしく、みみるがレンタル料を払った。そして、領収書を切って貰っていた。

その時、携帯の話題となり、みみるの携帯番号を教えて貰ったのだが、僕には携帯という文明開化を象徴するアイテムを持っていなかった。みみるは無償で僕と蒼空に買い与えてくれた。領収書を切っていた。きつと、宇宙連合か、地球連合の出費になるのだろうか、僕は急にお腹が痛くなった。幾らだったのか、携帯。

エナジックエリア、このエリア内に近づくにつれて、ネクタイをきつちりと締めたスーツ姿のアースガーディアン運航に携わる士官が目立つ。その前の軍服エリアには一般兵の詰め所やそういった人々を対象に商う商人の店で賑わっていた。尤も、宇宙連合代表であるみみるがいたのだから、兵はみみるが通る度に恭しく、一礼する。僕と蒼空はこのエリアでは蚊帳の外って感じだった。これから進む

エナジックエリアではもつと、蚊帳の外なのだが。

「何故、兵士達は同じような動きをするのじゃ、我なんぞ、ただのガキじゃぞ」

確かにみみるは十二歳であつたが、その年からぬ、私は偉いんだぞという気迫を放っていた。

みみるの標準的な動作は一々、偉そうなのだ。例えば、歩くときなんかはスキップなんて、幼き日の恥ずかしい動作なんて皆無。Dの胸をもつと、強調させるような胸を張った歩き方をする。背が百五十センチしかないのに。

僕は建物が一切無く、薄い膜が僕らを覆う形になっている道路を不安げに観察しながら、みみるにそれを加味したアドバイスを送る。別に会話がないと、なんか不気味だなあなんて思った訳ではない、決して。

「我とか、なれ、とか、なのじゃ、を止めて、普通の喋り方にすればいいんじゃないかな」

「蒼空からあい！ を無くせと言ってるようなものじゃぞ、それ。なれは我に没個性になれというのじゃな、いうのじゃな」

あい！ って蒼空返事を実物よりも幼く、むしろ赤ちゃんの辿々しさに表現していたはずのみみるは全て、喋り終わった後には僕に詰め寄っていた、さらに詰め寄る。その先には例のなんか気持ち悪そうな透明な膜がある。それに触れると嫌だなど本能が働き、みみるを押し返そうと思うが、何処を力場にすればいいのだろうか？ 小さなハムスターでも出てきそうな臍周辺？ そ、それとも高校生級の胸なのか、そうなのか、と頭を悩ませる。女の子の肌は何処に触れてもマシユマロみたいに柔らかい。それは蒼空で実証済みだ。そう、考えている身体がお留守な僕に急激な後退させる力が襲った。僕は踏み止まるうとしたが、踏み止まれない。

その力を僕の肩に生じさせた人物は詰まらなそうに張り手のポーズのまま、固まっていた。

僕はその人物、蒼空に抗議しようとしたが、後ろにある膜に気が

付いた。次に後頭部に加わるであろう衝撃に備えて、神様に祈りを捧げようとした。

そこで気がついた、自分が無神論者だったことに。とりあえず、偉そうに仁王立ちして僕のヘタレっぷりを鑑賞しているオーバーニソ神に祈っておく。

「あれ？ 痛くない」

一度、シャボン玉のように壊れた膜の先にはさらに、膜があり、僕の身体をやんわりと、支えてくれた。もの凄く、弾力性に優れている。

「これは？ って表情でそう馬鹿のように大口を開けるではないせつかくの平均的に存在しても許されるレベルの顔が台無しじゃ」

「あい！ おうぎ、みたい。そら、それでも、しーちゃんすき」

そう笑顔で言った蒼空は僕の隣で早速、透明な壁を遊具に遊んでいる。弾力性がやたら、高いものだから、蒼空の小さな身体は宙に浮いて、また、柔らかい壁に戻ってくる。

「君達、扇病に感染したの」

そう言ったら、僕の腰に巻いたポーチに入っている携帯電話に迷惑メールが掛かって着そうだな。

「安心せい、機能こそ、地球の携帯並みじゃが。こいつはやたら、頑丈なのじゃ。宇宙船が踏んでも大丈夫なのじゃ」

何気に自分の星の高度な技術力を自慢してみるのは僕らに構わず、歩き出した。

「それ、雛星のギャグ？ 全然、理解できないよ……」

みみるの背筋の伸びた後ろ姿に対して僕は首を捻った。反論するようにポーチから黒塗りの携帯電話を取りだし、地球の携帯電話にあるはずのないボタンを訝しげに凝視した。

「どう見ても、銃のアイコンだよなあ」

「おしてみる、みる」

「あ、蒼空、だめ」

「ぼちっ」

「うわー、何、これ、銃、銃銃、じゅ〜うう」

「じゅう、じゅういち、じゅうに」

「蒼空、こういう場合、ギャグってる場合では……」

ボタンを蒼空が押した瞬間、僕の携帯電話が銃に進化した。何やら、窓枠のボタンがあることから推測すると通信も出来て、銃口が二つもあり、お徳感たっぷりだという軽い気持ちにはなれない自分がそこにはいた。

だが……

「オモチャで遊ぶなんてまだ、なれらは子どもじゃな。たった、コンクリートを粉砕する程度の武器なのに。つまらんのじゃ」

「せんたいひーろー？」

この子達は平気のようだった。もう、この装備については言及しない。平和な生活を送る僕には必要ない機能だ。

そう、僕は思えなかった。胸の鼓動が普段よりも高音に響いている気がする……。

それ以降、僕は拭いきれない不安感を抱えたまま、何度も通った検問所である有人ゲートの一つ、クルブシゲートを通過し、さらに何度も立ち寄ったアースガーディアン中央ビルへと入った。ここに来る時は大抵、宇宙連合代表室に用があったが、上へ上がる転送装置ではなく、今日は下へ下る転送装置だ。

今日はいつもと違い、転送装置の前に黒服でトランシーバーを持った人はいない。風邪でも引いたのだろうか。

だが、僕と蒼空が転送装置の中で呆然と立ち尽くしているのとは違い、みみるは階段を降っていく。

「あれ、みみる様？ 転送装置の方が早いよ」

「今日に限って故障しておるのじゃ。全く、しかも技術部の連中が賃上げしろ、アキバ観光させろ、とボイコットしておるのじゃ。当然、寛大なみみる様は労働者諸君の条件を全部」と言って大きな胸を叩いた。「飲んでやったのじゃ。だから、みんな、今頃、アキバなる場所でアニメ映画鑑賞に勤しんでおるのじゃ……」

僕は思った、全員行かせるなよ。交代制を採用しようぜ、と。だが、僕は所詮、部外者だ。さらに言えば、気を良くしている人間をわざと悪くさせる無粋な真似はしたくない。

階段を死ぬほど、降った。ガクガクな両足に鞭を入れて、扉を開ける。

そこには蒼空がいた。正確には、蒼空と瓜二つの少女が眠りに就いている。だが、彼女の眠りの体勢はかなり、ヘンテコだ。

試験管人間用みたいな容器の中には透明な液体が満たされていて、そこに少女は浮いているのだが、立った姿勢のまま、何かの力によって固定されている。それが少女の身体のおちらこちらに繋がれたチューブのせいか、どうかは僕の頭では解らない。ただ、絶え間なく、その管から少女へと液体が送られているようだ。生命を維持するような液体だろうか？ 何しても僕が今、やることは一つ。

少女の身に纏っているものは何もなく、僕は慌てて、蒼空の後ろに隠れた。

だが、身長がほぼ、同じ蒼空と僕なので隠れても意味のないことに気がついた。

「そら、とおなじだ」

自分と瓜二つの少女に感動した面持ちで近寄っていく。蒼空のジーンパンを中腰の姿勢で握り締めている僕をお供にして。

蒼空が試験管に触れた時だった。機械音しかない不気味な部屋に澄み切った声が軽やかに試験管の少女から紡がれたのは。

「ようこそ、アースガーディアン 最下層部、または、アースガーディアン管制室へ。蒼空、心、あなた方を心よりお待ちしております」
「これはども、ぼ、僕は」

「ヘタレさんっていう噂は本当なんですね。それじゃあ、蒼空のお尻の香りを嗅いでみたいに見えますよ。変態さんなんですね」

「あい、そらは」

「蒼空、萌え星人、最後の星人にして、ソラ・エル女王様。このよ

うなはしたない姿で蒼空様に謁見させていただき申し訳ございません。わたくしはアカエル。機械で命を繋ぐ宇宙人です、以後宜しくお願いいたします、お二方」

「そらはきにしない、あかえるもおうぎとおなじで、いい」

違う、違う、この人が本当の蒼空の母親だ。僕は自分が苦い思いをしていないのに、砂が口に入り込んだ時の硬い苦味を感じていた。

「良いんですよ、お嬢殿」

「え？」

僕の吐露がすっかり、口から飛び出してしまったのだろうか、と僕は唇を押さえた。だが、アカエルの形の整った唇から凜と奏でられた言葉はそれを否定する。

「蒼空の薬指を見れば、解ります。もう、決めているんですよ」

「あ、はい。それと、僕の傷、あなたが治療してくれたんですよ、ありがとうございます」

「いいえ、造作もないことですから。一緒にこの生命維持装置に数分程、入っていただいただけですよ」

何の問題もないと言つかのようにその言葉は人工的なよどみのある川ではなく、全ての時間がゆっくりと流れている川のように思えた。だからだろうか、急に僕は恥ずかしくなつて、蒼空の方を見て、誤魔化した。

蒼空は異星語と、透明なモニターに興味津々だった。今もモニターが自分の手を通り抜けるのを不思議に思っているのか、首を傾げている。

そんな娘を見てアカエルはくすつと笑った。それは少女がいたずらを思いついた時の可愛らしい声。

「あ、エッチな妄想は蒼空にだけにしてください。但し、絶対に子どもは産ませちゃだめですよ」

「馬鹿、言つなのじゃ。最近の若者は進んでおるのじゃ！ どんどん、産むといいのじゃ」

みみるの言葉は相変わらず、斜め上を言っていたが、硬質の響き

を持っていた。何か、それ自体に目的があるような……。だが、勘ぐったところでみみるはただのオーバーニーソ神だ。一人の意志では何も出来はしない。まして、人道的ではないことなど……。

思考が停まった。

みみるの蒼空を射貫く怜悯な瞳、うすらつと開いた口は引き攣っている。この人は僕の知らない内なる自分を飼っている。そう勘ぐらせるには充分だ。僕はアカエルと蒼空の傍へと後退した。何故か、会ったばかりのアカエルの方が信じられる気がした。

「みみる様……」

そのみみるを射貫く緑色の宝石の如き瞳には、侮蔑と感謝が含まれているような気がした。

入って直ぐに僕と蒼空には喋ったのに、みみるとは喋る所か、視線すら交わさなかった。

アカエルの唇がぎゅつと、結ばれている。それはある種の苦痛からくるものだって誰にだって解る。みみるはそれを見据えてわざとらしく、偉そうな平常心を保っているように思えた。

「みみる様、蒼空様、すいませんが席を外してくれませんか」

蒼空は案外、容易く、あい！ と本当の母親とは知らずに脳天気な返事をアカエルに送り、退室する。それに比べ、みみるはアカエルに釘を刺すような視線を注いだまま、退室した。扉が自動的に開く類でなければ、きつと後頭部を強打して痛い思いをしていただろう。

急に静かになった気がする。それは何にも、行動せずには居られないあの蒼空と離れたからそう感じるのだろう。いずれにしろ、僕の耳には大きな試験管の液体の蠢きがよく聞こえた。僕はそれが急に恐ろしいものに見えた。もし、あの機械が止まれば、あそこにいる緑色の瞳を細めて、優しい微笑を僕などにくれている女性は確実に死ぬ。

全て……死んだら、終わりなんだ。そんな自分勝手なアカエルに関する感想を思っている間にも彼女は可動式のレールを使い、試験

管ごと、僕に近付いた。その為のレールだったとは知らなかった僕は少し、驚いた。わっ！ って口から大声が逃げた。

それに対して、何も言わず、アカエルは繊細な掌を試験管の硝子壁に両手ともに押しつけた。

「同じように……。陽乃心さんも」

僕はアカエルに従い、同じようにした。だけど、そこからはアカエルの温もりは伝わってこない。それに対して、アカエルは目を瞑り、何か解ったように肯いた。

「さて、陽乃心さん。貴方が後察しの通り、私は蒼空の母親です。もう一人、クロエルという母親がいるのですがそちらは行方知れずですが、萌え星人は卵からかえってすぐに見た人間を親と認識します。貴方が親でいいんです、そして、できれば親でいて下さい」

アカエルのエメラルドの瞳は僕の口を少しでも動かすことすら、許そうとしない屈強な眼力を保持していた。とても、その瞳からは逃れられない。

「意外と思われたでしょう。娘に彼氏ができる、もしくはこれからですか？」

「はい」

「では、お互い、不幸にならぬよう、このままの関係を」

「何故ですか？ 僕は蒼空と中途半端な関係ではいられない。僕は蒼空の親にはなれない。今まで、蒼空とは兄妹のような関係……。いや、だと思っていたというべきかな。とにかく、中途半端でした」

「僕は蒼空が好きでこれからもずっと、深く蒼空を知りたい」

「そうですね。でしたら、世界の現実、みみるの思惑……。宇宙連合の思惑を少しだけ、話しましょう」

「では、一つ、質問です。何故、萌え星人があなたの元にやってきたのか？」

「偶然でしょ、そんな！」

僕は声を荒げていた。蒼空を萌え星人と呼称するこの蒼空の母親が許せなかった。僕の母、もう故人となってしまうた陽乃美樹は僕

を産むのに、元々、身体が弱かった為、その命は磨り減って、病床に伏せていることが多かった。それでも、愛をくれたのだ。

目の前で淡々と喋り出す母親だってその類の母親じゃないのか。僕は笑顔を振りまいていたアカエルを蒼空に観た、でも、今は機械のようだ……。

「いいえ、初めからみみるの作ったシナリオ通りに事は進んでいきます。宇宙連合の主力航空兵器 エモーショナルエンジン搭載機には強い感情が必要です。その値の高い地球人はアリク連合と植民地拡大戦争をすることや、聖戦には貴重な人材です。そして、その中で一番、感情値の高い地球人を一年前から調べていました」

「冗談じゃない！ 僕達をそんなのに」

「世界は地球という紙コップの内だけで成立しているわけではありません。聞きなさい、蒼空のためにも、蒼空の思い人……貴方の為にも」

一瞬だけ、母親の顔にアカエルは戻り、すぐに機械的に喋る。目まぐるしく、アカエルを繋ぐプラグが液体を送っていた。多分、喋るのに必要なエネルギーが注がれたのだろう。

「朝さんの事件の影響で貴方と宇宙連合の職員である扇との接触が容易くなったのは偶然です。これにはみみるは両手を叩いて大喜びでした。私も別の意味で喜びました。そして、主に貴方以外の地球人と接触する餌の為の試験、これもみみるの計算」

「でも、試験をクリアしなければ、そんな無効でしょう！ 宇宙連合の保護下に」

「本当にそう思います？ 試験に合格不可能な試験設定をし、萌え星を一瞬に崩壊させ、女王と女王の家族を拉致した非道な宇宙連合が！」

息が止まった。呼吸がほんの少し、要求する呼吸の速さと噛み合わず、せき込んだ。今、目の前の美麗な女性はなんて言った？

萌え星を一瞬で破壊？ では、宇宙連合のトップは……雛みみる。僕らと行動を共にし、威厳のある少女の仮面の下に殺戮者の顔を僕

は思い浮かべた。ぞっとした。多分、まだ観ぬ存在の方がぞっとしなかっただろう。

僕は裏切られた気持ちを抑えきれず、床を殴った。鈍い痛みと、泣けない悲しみが僕の心を浸食していく……。

みみる！ みみる！ 騙したな！ 息を荒く、邪念の如く、己の心に擦り込ませる。

そんな僕の邪念は頭上の天使の声に浄化されてしまう。

「大丈夫です、貴方の人柄を扇や宮御に調査させました。貴方は必ず合格します。あなたは決して人間を見捨てたりしない。貴方が陽乃財閥の屋敷にいた頃に、貴方専属のお仕事役達は恵まれない異国の少女少女で結成されていた。調査に誤りは？」

「ありません。執事のカローナ、コックのナーニ……。全員、僕の大切な家族です。米乃国太郎を名乗ってからも手紙でやり取りしてました。僕は意志の弱い人間なんですよ、彼と彼は別人だったのに」
「違います、あなたは優しすぎた人間です。ですが、それ故に現実を知る。これがわたくしの知って欲しい現実」

「貴方と蒼空は強制的にでも交配をさせられるでしょう、あれのため」

先程まで意味のないような、あるような数字の羅列を浮かべていたモニターが広々とした寒そうな空間を映し出す。但し、その寒さは冬の風の寒さとはレベルが違う。致死量に値する寒さだ。画面は次々と兵器を映し出していく。

その兵器の名をアカエルが一々、口ずさむ。

赤い刀身と、鬼の顔を鏢に持つ怒れる炎 フランジュベルグ。

雛星聖句である、意志を貫く者のみに我が扉は開かれんを刻む黄金に輝く聖剣 エクスカリバー！

敵を潰す巨大な刃と仲間を守る不屈の友情を保てる者のみが鏢左右の巨大なベルリンの壁を建築する唯一の万能剣 レゾナンス。

その次は、とまだ、見ぬ兵器に目を白黒させていた僕にこれが最後だ！ とばかりに画面は緩やかにそれに停まった。

それはあまりにも美しい。鎧の左右から広がる白い天使様の羽根。それはあまりにも戦場に相応しくない。細身の刀身。

それはあまりにも幼い。蒼空に似た……いや……きっと、それが蒼空に似せた少女が両手を翳し、その手には一降りの剣が握られている鎧の構図。

その構図で僕は予測できてしまった。きっと、これがアカエルの言うあれ、みみるの執念の結晶体。

でも、確かめずにはいられない。それが賤しくも人間の好奇心。「あれは？」

「みみるの研究の成果。第五世代を超える唯一の第六世代機体 白妖精剣」

「綺麗だね……」

咄嗟にそんな言葉が口から飛び出してしまった。だが、白妖精剣はその名の通り、他の機体と比べて細身で、白い肌をしている。まるで少女のようだ。

「とんでもないあれに乗るのはわたくしのように寿命を強制的に延命する試験管に入れられた蒼空と、貴方と、貴方と蒼空の娘です」
慄然と唇を震わせて、そうアカエルは嘆きにも似た声を試験管内で響かせた。そして、失神しかけそうになる自分の身体を壁にもたれることで防いだ。

「ふざけないで下さい。なんで……そんな酷いことを」

僕は狼狽するアカエルに詰め寄るような声でそれについての究明を行えなかった。ただ、小さく、そう唸った。

みみるは我ながら、自分は酷い奴だと自分の行動を振り返って反省……できなかった。彼女にはやるべきことがある。それは証明すること。

俯いた瞬間、ツインテールが力なく、揺れた。

証明……。王の私生児であるみみるが、王と王の妃の娘、あるるよりも上か、下か？

上の者が愛しい、愛しい、お父様の愛情を全て、独占できる。

みみるの研究 インファイニティーエモーショナルエンジン構築がアリク連合に未開拓惑星を取られるならば、と萌え星を萌え星人自身が減ぼす刃 黒妖精剣くろまようせいけんを作らせてしまった。

「私は……反対だった。インファイニティーエモーショナルエンジンは殺戮兵器ではなく、平和利用。ただ、脅すためってお父様にあれほど、説得したのに。お父様はアリク連合を憎んでいた。同じ人間なのに。私に言った……。黒妖精剣で萌え星人の星を壊しなさいって……。結果、萌え星人五十人を搭載させた黒妖精剣は……萌え星人を……う、う、うお、ああ」

頭に浮かんできたあの映像 星を切り裂いた瞬間、萌え星の爆発に混じって、黒妖精剣に繋がれた未完成のサブエンジンから洩れ聞こえる怨嗟の声。

「宇宙連合！ お前らをあたしはうわあううっえいあ、あごあ……」

「ちくしょう、ちくしょう、母様……」

「姫様、お子は……萌え星の未来は……うううううう」

「くそつ、最強の戦士と詠われたこの私がこの様か、くっくつ、笑いが止ま……」

「許して下さい、救えなんだ、アカ・エル様、この……ばあを……」

「アカ・エル、無事かい？ 君の乗っている黒妖精剣の本機ならば、この熱に溶かされないだろうね。げほっ、げほっ、ああ、最期まで君の熱に抱かれて死にたかったなあ……」

声達はそれぞれの最後を彩り、未完成のサブエンジンは熱を宇宙に逃がせず、その搭載者を屍に変えた。悪臭だけの灰に変えた……。それをモニター越しに見て、朝食のバナナ、チョコレートミルクや昼食のカレーライスを全て、床に吐いた自分を最後に思い出し、みみるはあの日と同じ後悔に苛まれ、昼食に食べた寿司を床に吐きそうになる。

が、留まる。みんな……自分を信じてくれた。なのに、殺戮をそ

のみんな、特に蒼空や心にさせるのか！ 否、否、否、否、と胃が再び、寿司を呼び戻し、脳がみみるにインフィニティーエンジンだけを見つめていたお父様よりも、みみるを見つめてくれたみんなを信じろ、と叫ぶ。

「どうしたの。みみる、ないてる。だから、これ、はい」

小さな掌にはティッシュが乗っかっていた。それは街頭でよく配られている宣伝チラシがはさまれたティッシュだった。でも、みみるには最高の信頼の証だった。

そのティッシュを受け取り、涙を拭き、鼻をかんだ。

「みみる、こうはいつて？」

みみるが感動に浸っているのにも関わらず、早くも蒼空は次の世界へと飛び込んでいく。ませた言動だ。

先まで、壁に耳をつけていたからもしや、聞いていたのか？

「赤ちゃんを産むことなのじゃ」

その後には前の自分ならば、急かしただろう。だが、否。

「今の蒼空にはまだ、早いじゃ。きつと、後、一年は早い！」

と豪快に笑って蒼空にその涙でテカった顔を見せた。

蒼空はその顔が可笑しくて笑った。その笑いに釣られて、みみるも本格的に笑う。

その瞬間、けたたましいアラームが鳴った。

来るべき時が来たと、みみるは独り、ある事を心に決断する。

それは

「蒼空、ここにいるのじゃ。地球人も、アカエルもここにいるのじゃ、皆は我が守護するのじゃ」

そう言い残して去ろうとしたみみるだったが、きよとんとした蒼空に向かって再び、声を掛ける。その言葉には迷いはなかった。

「我は地球人を騙そうとしておったのじゃ。だから、償いに行くのじゃ。蒼空、それを心に伝えてくれ。そして、蒼空と心に普通の生活を一！」

今度こそ、みみるはドックへと向かって疾走していく。

僕は心の底からふざけるなど罵倒の言葉を連呼した。短い髪が走る自分の速度よりも遅い気がしただけで心は掻き乱れた。

その間にも耳に装着したスピーカーからはみみるのやる気に満ちた声が聞こえる。先程のアラームが地球連合、宇宙連合の敵であるアリク連合が、地球へと接近してきたと知らせるものと知っているはずだ。

「エクスカリバー 全装備……装着なのじゃ」
「いけません、みみる様。それでは……」

そのやる気に満ちたみみるを説得しているのはアカエルだ。こちらの声はぴりぴりとした緊張感のある声だ。

僕はドックへと走りながら、蒼空のお尻の重みを感じながら、推察する。

エクスカリバーという機体がどんなに優れていても、単機でアリク連合のランスタイプ全機と渡り合えない！ って表情を蒼空からの報告を受けたアカエルははっきりと浮かべていた。あの顔は驚愕以外の何ものでもない。

僕の焦りをまるで感知したように蒼空が口を開く。

「あい！ だから……そら、あかえる、しーちゃんてしろちゃんをきどう！ たすける」

蒼空は知らない。あれが蒼空の故郷を奪った悪魔の技術、インフイニティーエモーションナルエンジン搭載機だと。

どれほど、改良が進んだのか、解らない。だが、アカエルの話では萌え星人をアカエル含めて、五十人も消耗してやっと、本来の能力を開放できる代物。しかも、生き残ったのはアカエルのみ。その時、蒼空のもう一人の母親 クロエルは行方不明らしく……恐らくは。

ドックの扉に差し掛かった時、遺書でも読むような朗朗としたみみるの声がスピーカーから聞こえた。

「計画変更じゃ。アカエル、地球人を頼むのじゃ。きつと、我の後

釜はあるるじゃ。あいつも地球人好きじゃ。上手くいく。この罪人よりは」

思わず、僕は自分の冷たい感情を隠して、携帯電話の通話ボタンを押した。

すると、絶対、こいつは人前では泣かないなと思わせる高飛車なみみるがめそめそと泣いている映像が中空に映った。だが、その顔は凜々しく、涙だけが本当の感情。悔しいを表していた。僕はこれ程までに嘘つきなツインテール少女を知らなかった。きっと、アカエル以外にはこの表情は見せずに、この気高き少女は死が約束された戦場へと向かうつもりだったはずだ。

僕は叫んだ、そんな馬鹿な少女に、そんな一途な少女に、全てを抱えている重圧に耐えるこいつに喰らわせてやる！

「みみる、僕はよく解らないけど……帰ってきたらこの計画の全てをちゃんと話せ！ いいな！ だいたいアカエルから聞いたけど、お前も当事者だろう。しかも重要参考人だ！ 僕、いや……。俺が蒼空とアカエルさんとで白妖精剣を起動させる！」

「ふふつ、大事な人間には熱くなる。扇の調査通りなのじゃ。気遣いは無用じゃ。白妖精剣はなれ……心には扱えない。あれはまだ、試作機。あれを動かせる感情値を持った人間は多分、この宇宙にはいないのじゃ」

「そんなの解らない。俺が、俺が、俺はもう、大切な人を自分の目の前で死なせたくない。今度こそ、死から……逃げない！」

アカエルが遠隔操作で開いてくれたのか、扉が独りでに開き、目の前には既に白妖精剣。鏢の左右に白き羽根を備えたエモーショナルブレイカーが存在していた。

俺はアカエルに訪ねる。

「これに乗るにはどうしたら良い？」

「今、わたくしの生命維持ポット。ネバーが転送され、白妖精剣に搭乘しました。こちらから転送陣を発生させます。それに乗ってください。蒼空と一緒に」

そのスピーカー越しの会話のすぐ、後に白刃の如き輝きを宿す転送陣が急に俺の足下に具現化された。静かに歩み寄ろうとした瞬間、突風を感じた。目を瞑り、両足で踏ん張る。その場に立ち止まるのが精一杯だった。

もじゃ！

「おい、みみる。今のはお前か！」

もう、既にみみる側から映像がカットされていた。中空には通話のみと黒い文字で落書きしただけの透明な窓が在るだけだった。それは決して他者の意志では開けない、窓。

「急に声が鋭くなったのじゃ。それが本当の陽乃心か。最期に心の本質に会えて良かったのじゃ。一応、安全な場所に待避しておれ。」

さらに地下のトワイライトシェルターがオススメじゃ」

「おい、そんなのが聞き」

「さよなら、そして、御免なのじゃ、地球人達」

「おい、応答を……。頼む、みみる！ あっ……。そんな」

中空に浮かぶホログラムモニターには通話不能とだけ表示されていた。

「無駄です、彼女の意志は固い。私としては仇のような女です。どうとでもなつてくれて結構ですが、娘のために早く」

気がつくと、蒼空がみみるを按じて、人形のように黙っていた。

蒼空にしては珍しいというより、その表情を見るのが初めてだ。

深呼吸して、俺が……。僕が落ち着かなきゃ、と考え直した。

転送陣が僕と蒼空を連れて行った先は何やら、無骨な装置が所狭いしと並んでいる。

耳の奥底を刺激するような重々しい音はこの機材達が唸っているのだろうか、これから始まる血と血のぶつかり合いに興奮して。

中央にはアカエルがいつも、浮いているあの試験管、いや、彼女がいうにはネバーが固定されていた。もちろん、アカエルはその中にいる。

「蒼空を双対象人物に指定」

鋭い口調で有無を言わずに、蒼空に指示を与える。そのアカエルが指さす方向には小さなシャボン玉が口を開けて蒼空が来るのを待っていた。

蒼空にはそれに対する恐怖はないのか、あい！ と自分自身に対して肯くと、

「あい！ そらのせき」

そう言って駆ける。すると、蒼空が内側に入ったのを確認したシャボン玉自身が意志を持っているが如く、口を閉じた。それと連動して、銀色の剣の刻印を刻んだ円陣が蒼空の足下に出現した。

蒼空を包んでいたシャボン玉が全体に広がった。そして、シャボン玉は、個々を包む膜に分かれる。

「蒼空はその円から出ないで」

「大抵の攻撃はこの膜　ディアシールドが防ぎますから皆さん、安心を」

そのアカエルの淡々とした口調のすぐ後に、円陣から、二本の細いチューブが飛翔した。僕は驚いて目を瞑った。

ちくつとした蚊に刺されたほどの痛みを感じて恐る恐る目を開く。今度は開いた目が閉じられなくなった。驚いた……。自分の肩にそのチューブが深く突き刺さっていた。だが、痛みは継続せず、身体の一部みたいだ。

ネバーの機械部にもチューブは収まっていた。そのチューブの挿入口をアカエルは確認すると、指揮者のように両手を軽やかに舞わせる。

それに合わせて、生命維持に必要な液体内に透明なキーボードが出現した。それに素早く、アカエルは両手を走らせた。あまりの速さにこちらの目が追いつけない。

「想い人はアカ・エル、陽乃心。双対象人物は陽乃蒼空。白妖精剣、起動します」

「起動、起動、どうして！」

どうやら、アカエルは起動に必要なプログラムをこの短時間で成

し遂げ、エンターキーを何度も押すが……起動には至らないらしい。アカエルには明らかに焦りの色合いが浮かんでいた。手順を口ずさんでいる。その声が徐々に大きくなる。そして、僕はある人物からも聞いた単語を耳にした。

「やはり、感情値が……」

「みみる、お前の言う通り、感情値が足りないかと動けないのか……。アカエルさん、感情値って！」

「感情値はこの第六世代の場合は、双対象人物に対して、二人の想い人がどれだけ共有する感情を持っているか……。一体、どれに設定すれば？」

僕はその問いに考えた。蒼空と僕を繋ぐもの、蒼空とアカエルを繋ぐもの。僕は蒼空に異性としての愛を感じている。アカエルはきっと、蒼空に親としての愛を感じている。

どちらも、他者を想う心。ならば、こつも解釈できないか？ それは恋愛だと。他人を強く想う。それが恋愛だから。

「恋愛感情値つてありますか？」

「あるけど……それでも、予想される値は……稼働に必要な五万マターには程遠い、三万マター」

「何か、何か、あるはずだ……。考える、陽乃心」

だが、どんなに考えても一介の高校生には良い名案は浮かばず……時だけが無情にも過ぎていく。

機体内にある無数のホログラムモニターの群れの一匹が逃げ惑う雛鳥を見つめていた。

僕はどうしても我慢しきれなくなって、アカエルに叫んだ。

「みみるに俺の声を届けて欲しい。みみるの応援しか俺には出来そうにない。くそっおおおおおおおおおおお！」

その叫びと一緒に床を叩いた。だが、叩こうとした手は床の目の前で止まった。決して、自分の意志ではない。

「感情のやり場が見つからなくてごめんなさい。そういう自傷行為は勝手に対象者の脳に命令してチューブ エンゲージチェーンが

防いでしまいます。今、二人に共通した蒼空と共有できそうな感情値を大急ぎで検索してます。回線は開いたから、私を含めたここにいる全員がみめる様と会話ができます」

その言葉は機械的で、全ての思考を指先に導入していた。

本当は自分が一番、父親に愛されているとその答えだけを知りたかった。だけど、どうだ。この様は……。

七歳の時、みみるは自分の開発した最初に父に認めて貰ったエモーションエンジンで最大加速させる。だが、第五世代であるエクスカリバーでは宇宙に豆粒のように拡散するランスタタイプの敵ユニットに対して攪乱すらできない。それでも、みみるは冷たい微笑を浮かべる。

それはアリの兵に向けたものではない。少女の感情値の源であるディアシールド内に佇む円らな瞳の雛のぬいぐるみに注がれたものだ。

「お父様が褒めてくれたのじゃ。エクスカリバーは敵がいるほど、強くなる。すなわち、敵を喰らう機体なのじゃ。エクスカリバーに注がれた愛情は全て、我のものじゃ！」

雛の縫いぐるみとは別のディアシールド内にいるみみるの手元には透明なキーボードが浮かんでいた。そのキーボードを素早く、操作する。そして、エンター！

その瞬間、虚空の闇に金色のコウモリが七匹、放たれた。

当然のように敵のランスタタイプは逃げ惑う。連隊を組んでいた彼らだが、今や、その機能を失っている。それを群れにはぐれたガゼルを追い回す獅子の如く、牙をその胴体に向けた。

但し、この牙は一閃で相手を絶命させる！

「地球を巻き込むことは許さないのじゃ。アリク連合……偵察部隊！ 我らも退く。だから、貴様らも撤退するのじゃ！」

言葉とは裏腹にみみるのエクスカリバーは先端の刃を振り回し、有無を言わず、逃げ遅れたランスタタイプを一網打尽に切り裂いて

いく。

アリク連合偵察艇 シラメはエクスカリバーに対処するためにランスタイプ他にシールドタイプの機体を出撃させる。

だが、みみるは怯まなかった。

みみるの機体、エクスカリバーの周囲に先程まで敵を攪乱する役に徹していた七匹の忠実なるコウモリが戻ってきていた。

「ほう、その盾で我の聖剣を受け止めたのじゃな」

シールドタイプに易々とエクスカリバーの刃は受け止められる。そのどさくさに紛れてコウモリ達がシールドタイプに貼り付く。

背後にはランスタイプが三機。それはみみるを憎しみ一つで殺すべく、迫っていた。

みみるは口内で楽しげに舌を転がした。まるやかな言葉を詠う。

「頃合いなのじゃ」

いきなり、シールドタイプの駆動音が消えたことを無数にあるホログラムモニターの一つが情報として送ってきたが、みみるは見向きもしない。

シールドタイプと対峙していたエクスカリバーは轉身。突撃してくるランスタイプを一降りで払い、柄から素早く、可愛らしい星形の機体が放出される。

「逝け、愚者共。切り刻め、スターカッター」

カッターという言葉が可愛らしくなるくらい、それは神速と呼ぶべき速度でランスタイプの間を往き来して同時に切り刻んでいく。それに対抗しようとランスタイプがスターカッターを貫こうとするが、何せ、小さななので当たらない。

残酷にも部品のみになった三機のランスタイプからは無数の血の粒子が浮かんでいた。

それを見届けることはない。スターカッターはさらに轉身すると、コウモリ達に感情値を吸われ、空中に漂うのみのゴミを始末した。

「まだ、まだ、みみる様もいけるなのじゃ!」

気を良くした訳ではない。戦況が変わった訳ではない。エクスカ

リバーを気づいたら、七十機のランスタイプやシールドタイプが囲んでいる。

みみるはその光景に腹を抱えて笑っしかなかった。
だって

「まんま、と引つ掛かりおって、馬鹿なのじゃ！ この勝負、貰ったなのじゃ！ エクスカリバー 聖剣分離。注げ、コウモリ、今まで集めたアリの感情値を」

そう興奮のあまり、荒々しい言葉がみみるの口から溢れた。
同時にエンターキーをみみるの指が激しく、突いた。

エクスカリバーの刃が真っ二つに割れ、そこからは巨大な大砲が出現した。それを観測したアリク兵達はシールドタイプを前列に置く。

「そんなのじゃ、防げないのじゃ。さあ、一緒に地獄に行くのじゃ！ さあ、旅立ちなのじゃ！」

コウモリ達がエクスカリバーの刃に貼り付くと刃に劇的な変化が訪れた。

大砲から淡い光が集まり、始める。それは一瞬にして、アリク連合の集まる前方を攻撃し、まだエネルギーの奔流は停まらない。さらに左右、後方をも、エクスカリバーは器用に回り、攻撃を加える。
光の奔流 セイントブラスター クラスリミットが収まった時にはエクスカリバーの周囲には大量の塵が舞い上がっていた。

「エクスカリバー、我は勝つても、負けても、なれとはお別れじゃ。本当はなれが嫌いだった。お父様が好きだったのはなれや、エモーションナルエンジン、インフィニティーエモーションナルエンジン……。くっ、くっくくく、はははははは！」

「どれも、戦争の道具なのじゃ。我は結局……愛されなかったのじゃ。あるはこの事実に気づくのじゃろうか……。どちらにしても、予想外の展開、我は生きておる。地球に帰還して、我は普通の少女として暮らすのじゃ……。それを心は」

許してくれるじゃろうか？

それは言葉にならなかった。

「な、なんじゃ。あの黒い機体！ エクスカリバーよりも……。うぐっああ」

塵のカーテンは突如として破られる。その瞬間、みみるは激しい痛みを全身に感じた。

みみるを完全を守るはずだったディアシールドの多重再生が追いつかないスピードで、みみるの全身にナイフの刃ほどの光り物が突き刺さった。

激しく鳴るアラーム音と共にエクスカリバーの凶刃の破片が刺さったことにより、生じた壁の穴は自動的に隔離されていく。

あの一瞬で黒い機体はエクスカリバーの分離した刃の一部を破壊し、反撃が来ないように離脱した。そう、みみるはホログラムモニターに映る存在を見て、分析するしかなかった。まるでスペックが違う……。

塵の壁が完全に晴れた時、その正体に驚愕した……。

「黒妖精剣！ 何故、何故……。あれがあそこにあるのじゃ？」

黒妖精剣。かつて、アカエルがみみるに無理矢理、搭乗を命じ、萌え星を一刀両断した機体。だが、かつてとは違い、柄の部分にはドーム型のサブエンジンを搭載していなかった。それでも、黒い羽根がはためく度に寿命が縮まる感覚に襲われる。あの機体に装備されているものを開発者であるみみるは全て、知り尽くしている。また、その改良が行われないよう、嚴重なパスワードが掛かっていることを。それは無理な改良により、星を二つ、三つ、呑みこむ感情値臨界現象がエンジンの装甲を破壊しかなないのを防ぐ目的と、単純に弄られたくないだけだ。

「あの形態は、速度を重視したウィングモード。初期とはいえ、さらにインファイニティーエモーションナルエンジン搭載機」

みみるはホログラムモニターに映る地球を見つめる。実に青い星だ。あの中に死んで欲しくない者がいる。その存在、その願いを知らないアリク連合の機体はみみるの大切な人を無意識に殺すだろう。

確率はどれほどか、知らないが……みみるにはそれが許せなかった。みみるは激痛に耐えながら、姿勢を正した。既に自分を守るエクスカリバーの外壁は一部、脆くなったが……自分を包むディアシールドは完全に回復している。

「いける。我はまだ、闘えるのじゃ。闘えるなのじゃ……」

そう、自分に言い聞かせる。それに反対するようにアラーム音はさらにけたたましく、鳴る。

ホログラムモニターの一部に通信を求める宇宙共通語 スワル語が浮かんでいる。

「ボイス通信、要求。良いじゃろう。我を殺す愚か者の声を憶えておいてやるのじゃ……」

「俺は蒼天の槍と呼ばれているアリク連合の貴族 アリス・レオ。スパイ衛星が王機 エクスカリバーを捉えたことがある。お前の機体と同じ型。間違いなく、お前は」

聞いたことのある精悍な声が見みるの耳に届くと妙に笑ってしまった。萌え星植民地戦争以来か。

「ふっふっふ」

「何が可笑しい。しかし、随分と苦しい声だな、雛みみる。可哀想に先程の攻撃でちよつと、ばっかし、逝きかけたか？」

「そうじゃな……。息……。欠けたのじゃ。そのせいか」

「無謀な戦をしたくなるのじゃ！」
エクスカリバーはみみるの意志に応じて今や、細身となってしまった剣で相手の剣を押しさえつけると、そのまま、幸運にも破損を免れた砲弾からセントブラスター クラスノーマルを打ち込む。奇襲の成功を確信したみみるは手応えの無さに不快感を覚えた。

「甘えよ、女王様よおおお！」

その激しい失望とも読み取れる感情の迸りと共にエクスカリバーの残存していた細い剣は一振り宙に舞った。エクスカリバーはその猛撃に半回転を強制的に余儀なくされる。

「な、これほど、まで……と」

その後、セイントブラスターが明後日の方向に放射される。その破壊力は凄まじく、先程の戦闘で出た宇宙のゴミ　　デブリを圧倒的な物量が消し去った。

失意にみみるは暮れている暇など、ない。激昂と冷静さを目まぐるしく血液から受け取りつつも、キーボードを素早く奔らせる。

みみるの操作するコウモリ達が一斉に黒妖精剣に襲撃を開始する。だが、それは到達する前に黒い羽根によって生じた無重力の波に押し戻され、コウモリ達のブレーキーが効く前には黒妖精剣はその場にはいない。

再度、現れた瞬間、みみるは操る間もなく、コウモリ全機を失う。その動作に隙があると見たみみるは柄を開き、全てのユニットを発射させる。

ネットを口から吐く龍の形をしたユニット　ネットや、それと並列してスターカッターが黒妖精剣を狙う。

両者のスピードが問題にならないとレオの口から詰まらなそうに零れる。それは別の言葉によって。

「やる気でねえよ、おい。もっと、あるだろう？」

「……………」

「おい！　聞いているのか、お遊戯会に付き合ってる暇はねえ！」

「……………」

とにかく、やれること、全てを。そう、自分の身体を生暖かく、重くしている流血を眺めつつ、思考した。

その結果、みみるは一つのプログラムをホログラムモニターに表示させる。

第六世代機にはなく、第五世代機にはある切り札。それはインフィニティーエモーショナルエンジンを恐れての有無。

「ちっ、女王、俺はあの星に用がある。大人しく、あの星を俺にくれてやるってんなら今日はこの辺でやめにしよう。俺は急いでるんでな。時間を少し、やる。早く、決める！　くそっ」

ホログラムモニターには、

生命維持及びディアシールドオフを実行し、敵と思われる機体を選択してください。その後、システム 死の残滓を発動します。尚、発動後には解除できません。

遺言メッセージを登録します。登録後、地球の文化レベルで認識可能な手段でデータ送信します。両動作の実行はエンターキーのみで作動します。

では、最期のひとときを安らかに……。

と長々と台詞が書いてあったが。

「メッセージ……。蒼空と心、思えば約八ヶ月じゃったが……友人のように過ごせて楽しかったのじゃ。心と出逢った冬、あの日はクリスマス イブじゃったか？ 宮御びつくりしておったのじゃ。心が裸同然の蒼空を抱えていたから……。ごぼっ。すまぬ、今のは吐血じゃ。時間がないようじゃ。手とり早く、言う。白妖精剣をアカエル、蒼空、心で起動し、偵察隊を消滅させるのじゃ。アリク連合本拠地惑星 アリクに伝わる前に。それがゆ、い……。ごぼっ」

床にはみみるの吐いた血や涎、嘔吐物が広まっていた。もう、眠りたい……。みみるの本能の願いはその一点のみになっていた。だが、理性はまだ、どん欲に願う。

「そうすれば、地球は宇宙人達にしばらく、干渉されない。じゃが、やがては来る。その時はみみるの後継者、あると一緒に力を合わせて……。ごぼっ、げぼっ、はぁ、ぐっ、あ、わ。友だちになりたかった……。ごぼっ……」

言葉を紡ぐのを諦めて、みみるは震える手でエンターキーを……。

その薄れていく意識の中……みみるは銀色の閃光を見た。それは地球から大気圏を軽々、越えて黒妖精剣とエクスカリバーの合間を駆け抜けていく。

その光はとても、強烈で細めた瞳では、そこが天国への入口に思えた。

ああ、でも、自分はそこへは行けない。色々な人々を父に認めて

貰いたい一心で、あるよりも上だと示す虚栄心で殺してしまったのだ。

今のみみるは虚栄心の塊である父からの初めてのプレゼント
雛の縫いぐるみとは同調し切れていない。そのせいか、みみるがエ
ンターキーを押す前にエクスカリバーの生命維持以外の機能は停止
した。

時期に死神が自分の首を狩りにくると思うと、みみるは不思議と
笑いが零れた。

「よ、き、せ、な、ん、だ……」

「みみる」

自分と呼んでいる声があった。

まさか、あの銀色に輝く光は？

エクスカリバーといえば、アリク連合でも恐れられている宇宙連
合の兵器。それをここまで追い詰めたのだ。このチャンスを逃す手
はない！

最後はひと思いに串刺しにしてやろうと、残酷な笑みを浮かべる。
そうさ、妹をこんな目に合わせたあいつが死ぬにはそれが相応しい
と、レオは当然のように思っていた。

感情は冷静。ホログラムモニターも正常。自分の感情値を引き出
す妹が昔、髪を結わえていたりボンと自分との同調率も、一番高い
値を示す家族に対する愛情に設定してある。

「これで負けるはずがない！」

その言葉を憎悪の終焉の気合いとして、刃に乗せる。目の前の満
身創痕の聖剣がそれで木っ端微塵に破壊されるはずだった……。

もう、速度の落ちないゾーンまで来た時だった。

突然、ホログラムモニターの一画面が未確認物体接近警告と表示
される。だが、レオは冷静だった。経験上、ただの石ころやデブリ
だったり……。

「な、なんだ。この威圧感！ 誰だ、誰だ……。耳障りな感情値を

垂れ流しにする馬鹿は！」

と、レオ自身の驚愕混じりの言葉により、己の油断に気づく。

だが、それは遅かった！ いや、知っていたとしても遅い。予期可能でも避けられない。それはそういうものだった。

その銀色の輝きは黒妖精剣の刃を根こそぎ、消滅させて通り過ぎた。宇宙空間に塵一つ残っていない。代わりに通り過ぎたはずの銀色の光が刃を失った黒妖精剣の正面に具現化した。

短時間ワープを試みたのではない？

「圧倒的に早いのか……。何だ、あれは。俺の知る限り、その速度に到達できるのは白妖精剣。クロエルが死に際に呟いていた聖戦のための聖剣か。そんなもの！俺は妹の為に大量の酸素を持ち帰らねえといけねえんだ」

目の前の白い四枚の羽根を羽ばたかせた聖剣　白妖精剣に向かつて淡々と吠える。

悠然とそれは黒妖精剣と、その搭乗者　アリス・レオを眺めていた。まるで無機物でも相手にしているように……。

それはレオのプライドを激しく傷つけた。その瞬間、今までの感情値　四万マターから五万マターへと増大する。機体が怒りの詩を、暴君の詩を無機質に奏でた！

「俺は！俺は……アリク姫を守るセブンガードの一人、蒼天の槍だああああああ！」

無駄だと解つていてもレオは折れた剣を振るう。

アリク姫と約束した、姫の友人であり、レオの妹でもあるカノンに適合する酸素を探す旅と三年もの長き惑星偵察の成功を。

僕は動揺した。まだ、闘う気なのか？ 黒い羽根を鎧に装着した初期のインフィニティーエモーショナルブレイカーは折れた剣で猛攻を繰り広げる。

「よけるの、せいっぱい、よち、まにあわない。でも、ともだちはだいじ」

そう、蒼空が決意した瞬間、総感情値数が桁外れに増大する。五十万マター……。

蒼空はアカエルを母親だと知らなかったから、あの設定では数値は安定しなかった。

アカエル、蒼空、僕が共有する感情値は激しく震える蒼空の思いに集約されていく。

それはみみる。初めて蒼空が認めたお友達。みみるの方もそう思っ
つていてほしい。

「アカエル、君も良い人過ぎるよ」

「昔から良い人ですよ。萌え星人　良い人ランキング連続四位です
から」

「それよりも、白妖精剣の最強形態　星崩しほしくずの光ひかりをそろそろ、解除
しましょう」

その声に賛同してか、白妖精剣の装甲が自分の有り余る力に圧迫
されて、悲鳴を上げる。

「そうですね、瞬殺白神剣の波動を推進力に使ってここまで来られ
ただけでも、良しとしないと自爆ですね。それに僕は殺したくない」

「ヘタレですが、その意見には賛成です。ホログラムモニターで確
認したところ、偵察艇が母艦のようですし、交渉次第では捕虜にで
きるでしょう」

「捕虜？　手荒なこと……しないよね？」

「それは状況次第ですね」

「そら、そろそろ、くるしい。しーちゃん、はやく、さげきれない」

感情をエンゲージチューブを通して、蒼空に送る役割の僕とアカ
エルよりも事実上、脳内で操縦している蒼空の負担は大きい。せめ
で、キーボードを使いこなせば良かったのだが。

「敵に回線を開いて！」

「はい」

「こちら、宇宙連合所属　白妖精剣　搭乗者　アカエル」

「聞こえてるぜ、聖戦の英雄候補様よお」

若い男の声だ。随分と疲弊している印象を受ける。

「いいえ、残念ながら萌え星人です、きっと、貴方が想像する悪魔とは全然、違う可愛い女の子ですよ」

「萌え星人 クロエル……の仲間か？」

疑う男の声に、さらにアカエルが疑いの眼差しでボイス通信とだけ表示されたホログラムモニターを眺める。

「知っているのですか？ クロエルを」

「一応、妹を助けてくれた命の恩人だ……。俺はその恩人の仲間に刃を向ける剣を持ち得ていない」

男の声は鋭いものから一気に軟化した。クロエルの評価は男の中ではかなり、上位の方にあるらしい。

「クロエルは今……聞く必要はありませんね……。クロエルお姉様は寿命が尽きて死んだのですね？」

「ああ、あらゆる限りの手を尽くし、助けようとしたんだ！ でも、神様には勝てねえ……」

「その割りには……。我を……ボコ殴りにしおったのじゃ」

と、回線を開いて、勝手に割り込んできたみみるが愚痴を言う。

いつもの偉さは鬨りを見せ、代わりに少女らしい儂げさがあるような気がする。

「部下もお前にやられて全員、死んだ」

「……………」

そう言われると、みみるだけではなく、僕らは黙ることしかできなかった。それを吹き飛ばすようにわざとらしく、陽気な声で男はその沈黙を破る。

「気にするな、戦場ではよくあることだろう。とにかく、そういう事が解った以上、俺は降伏せざるを得ない。只、条件がある？」

「条件？」

「ああ……。妹を助けてほしい。クロエルの仲間ならば、快く承諾してくれるな？」

「妹さんは……………」

「酸素アレルギーだ。やっと、適合したのがその地球の酸素。特に日本の酸素が良いらしい」

酸素アレルギーという言葉が僕には理解できなかった。すぐにキーボードを使って雛星のネットワークからその情報を拾う。どうやら、空気中の酸素にアレルギー反応を起こし、全身に発疹が現れ、そのため、人よりも極端に疲労しやすい体質になってしまふ不治の病らしい。但し、環境を変えることで症状を限りなく、皆無にできるようだ。

「みみる様？」

「頼む、みみる。お願いだ、妹を。頼む」

「われ、にも、いもうとがおる。おなじ、いもうと、持ちのよしみじゃ。我も話せるていどには……生きているのじゃ。許そう」

満身創痍なはずのみみるは嬉しそうに妹という共通キーワードを口にした。

二時間後、アリス家の偵察艇 シラメが地球へと降下を始めた。エクスカリバーと白妖精剣を收容する目的で宇宙に上がったアースガーディアンと共に。

僕はこの事件で知ってしまった。僕たちの人生を変える植民地拡大戦争の断片を。聖戦というキーワードも頭に引っ掛かっていた。それは白妖精剣と関連があるようだ。両方とも、みみるに訪ねたが、「もう、白妖精剣になれば搭乗しなくて良いなのじゃ。だから……平和に過ごすのじゃ。蒼空のためにも、なのじゃ」
そう、みみるは言うだけだった。そして、今までの偉そうなみみるに戻って有耶無耶にされた

それから、夏は過ぎ去り、今年の冬、蒼空は僕と蒼空の子である陽乃深白ひのみしろを産んだ。偶然にも蒼空と同じ誕生日、十二月二十四日クリスマス イブ。

まだ、元気に蒼空も、僕も、深白も。もちろん、みんなも暮らし

ている。平和は続くと思っていた。
無限に広がる宇宙の雄大さのように……。
でも、それは理想だ。

第四章 聖戦

第二部 深白編

第四章 聖戦

> ? <

雛星^{ひよせ}は機械の塊の星だ。それは聖戦の最前を担う王族としての決意の表れでもあり、聖戦で先に血を流すのは王族関係者だという揺るぎなき決意の武装でもある。元は、雛星としての自然な惑星があったのだが……彼 宇宙を造りかえるメカニズム、通称、ユニバースホールに喰われてしまった。どんな兵器も彼には通用しなかった。アリク連合や宇宙連合の誰もが、その日 雛歴七億百年 四月一日を惨めさと共に現世の終幕と呼んだ。

何故って？ 彼は全ての還る場所だからだ。元々、全ての物質は一つに、彼に集約されていたのだ。

だが、宇宙に住む人間達は解りました、ではみんな一つになりましょうなんて考えは起こさなかった。そんな考えを起こしたのは、頭のネジが吹き飛んだ怪しい宗教団体だけだった。

アリク連合に所属する星々は、母性を捨て、植民地拡大という名の星の乗っ取りで彼のいる宙域から逃れる道を選んだ。

そして、雛星を頂点とする宇宙連合はいずれ、彼と闘う道を選んだ。

宇宙連合はその闘いを聖戦と呼んだ。

現在は、雛歴 七億百十二年である。

機械の星の表面に設置した雛星 宇宙最大の望遠鏡 ジャンヌ・ダルクは常に四億三千万キロメートル先に在る彼を鮮明に観測していた。

その不気味なフレア色の巨大な穴の膨張具合をホログラムモニタ

ーが二十四時間観測している地表深くにあるミミルドームなる施設がある。

その内部、午前三時を回っていたにも関わらず、王族の血を受け継いだ三千人のスタッフが昼夜問わず、働いていた。それに不平不満を言う人間はここにはいなかった。誰もが、死と隣り合わせにいるのだから。ユニバースホールに立ち向かうとは死そのものだ。

地球から送られてきたみみるの研究データの詳細を評価するのが、雛星の女王 みみるの妹である雛あるるの仕事だ。このデータはアリク連合と争っている植民地拡大戦争に利用できるのか？ それとも、聖戦に利用できるのか？

「この場合は……聖戦に利用すべき、あるはそう、分析した。異論はあるるの脳内で起きない」

白妖精剣が初起動した戦闘のデータ

搭乗日 二千十一年 七月十二日 時刻 午後三時三十分

想い人 陽乃心（地球人）、アカ・エル（萌え星人）

双対象人物 陽乃蒼空

通常起動に必要な本機の総感情値 五万マター

最高観測総感情値 五十万マター

を眺めながら、透明な硝子テーブルに置かれたブラックコーヒーを飲む。飲んでいる間も少女の赤い瞳はそのデータを睨みつける。「理解できない、分析不能。何故？ 天才さんはこれを隠す？ それにこっちのパターンをまだ、実行していない。思考の範囲外？ まさか、です」

少女は中空に浮かぶキーボードに視線を動かした。苛立ちを籠めて、脳内で強めに、キーを押すイメージを構築し続ける。

白妖精剣 エデン搭載型の予測データ

想い人 陽乃心（地球人）、陽乃蒼空（萌え星人）

双対象人物 陽乃深白（地球人と萌え星人の混血種）

「もちろん、パターンはこれ」

少女はおもむろに、だぼだぼの白衣のポケットからタバコの箱を取

りだした。テーブル上にあるライターに手を伸ばし、タバコに火を点ける。そして、美味そうに吸った。

インフィニティーエモーショナルエンジン臨界突破要員 アカ・エル

通常起動に必要な本機の総感情値 百万マター

最大予測総感情値 エラー

「まきぐそつ！ 理解不能です。数値が割り出せません。陽乃心の感情値が深白に対する感情値だと仮定する。一般地球人が娘に対する感情値は……およそ、三千程度。陽乃心はどんな感情でも一万は軽く、越えます。まだまだ、成長中。陽乃蒼空も同様の値です。陽乃深白は幼女ですから、さほど……一般地球人の幼女と変わらぬ、いや……。違うのです、その考えノー、そう分析した」

「あつ、また！ 姫、タバコ。まだ、貴女様は十二歳でしょ！」

そう言つて、あるるの小さな唇に挟まっているタバコは取り上げられた。あるるはその人物を不満の眼差しで見つめる。返せ！ という視線なのだが、あるるの目下に濃い隈が浮かんでいるせいか、疲労だけが相手に伝わっている。

やはり、音声及び視覚情報無しでは人は解り合えないと、あるるは深く肯く。

「こらっ。 ストレス解消薬を奪う、それは……ノー」

「何、言ってるんですか？ 貴女様は可愛い女の子でしょ」

分厚い唇が特徴的なヘルマンから美少年の如き、甲高い声が発せられる。出逢った当初は音声を改善する機械を喉に移植したのか？ と疑ったものだ。それはともかく。

「まきぐそ……。 いますぐ、地球の天才さんに緊急通信」

「あ、はい。でも、その前に一言。まきぐそつて乙女が言つては」

「早く。速やかに、俊敏に、刹那に、一瞬に！」

苛立ちは自分の脳では制御不能な程に募っている。こんな時、あるるはテーブルを趣味で吹いている地球のトランペットに似たハ―

ムンのロータリーバルブを押すように叩く。

それでは足りない場合は激しく、頭を上下させる。一つ結びにした猫の尻尾のような髪が哀れにも激しく揺れている。人間ならば、エモーショナルブレイクカー酔いだなあと大人の余裕を見せながら、早速、ヘルマンは緊急通信の準備に掛かる。

>?<

同時刻 地球日時 四月七日。地球では雛星のマッドサイエンティストの静かなる憤怒など、知る由もない。

花見を存分に楽しむべく、次々と集合場所の桜餅学園の中庭へと集まり、始める。

一番乗りはやはり、遅れたらどうしよう? とへたれな思考の元に行動した陽乃心だった。彼は高校三年生で、特別クラスIED(インフイニティーエモーショナルドライバーの略)に進学を果たしてからその行動に変化はない。

早速、彼は背負っていたリュックサックを降ろす。そのリュックサックから、様々なものを取りだしていく。

手始めにレジャーシートを引く。

そんな時だった。彼の目に異様な二人が映った。思わず、何度も目を擦って再確認した。

いつもの如く、陽乃蒼空の深緑の瞳はキラキラと輝いている。その視線は娘の陽乃深白に愛情と共に注がれていた。お手々もがっしりと掴んでいる。

そんな母とへたれな父 心の愛情を茹だるような太陽光の如く、浴びて育った深白は、今日も周囲には虫けらしかないなんて、無感情でとぼとぼ、歩いている。

だが、これがとても、可愛いらしい女の子なのだ。

く我が家の自慢の一歳児 深白ちゃんの一時間身支度う

手順一、深白ちゃんを起こしてあげましょう。くそ兄様寝かせる

……と鳴いてむずがりますが、可愛さに騙されてはいけません。ただのわがままです。> 必要なお時間の目安、十分。母の場合、三分< 手順二、深白ちゃん、そわそわしています。そうです、急いでお手洗いに連れていってあげましょう。急がないと可哀想なことになります。

「一人で行ける。そんなくだらない知識、生後一日で会得した……。侮るな……。」

何故か、怒られるのはご愛敬つてものですよね？ > 必要なお時間の目安、七分<

手順三、お風呂に入れてあげましょう。着ているぶかぶかのジャージ（心の着古したジャージ）を脱がしてあげましょう。身体を洗う時はやわらかいスポンジを使いましょう。深白ちゃんは肌がとても、弱いのです。時々、泡や水を飲もうとしますが絶対に阻止です。危険です、特にあわあわ。

「人をそこら辺の幼女と同じにするな……。くそ兄様は百三十センチ頭脳明晰姫を愚弄しています……。」> 必要なお時間の目安 三十分<

手順四、身体をバスタオルで拭いたら、ドライヤーで長い髪を乾かそう。そして、蒼空ママのお古のゴシックとロリータ調の黒いお洋服（ママの匂い、と言って喜んで着ます）を装備させてあげましょう。可愛さが七千上がります。でも、元々、深白さんの可愛さは七兆です（普通の中学生のすっぴんスペックは一万程度）。

手順五、化粧は……要りません。そんな年の増のすることです（普通の中学生の戦闘モードスペックは一万五百程度）。

では何が必要か？ そうです、髪を整えてあげましょう。整えた後は左右の髪を使って、くるくるとハムスターの遊ぶ運動器具みたいな輪を両サイドに作ってあげれば、深白ちゃんの身支度完了ですよ（深白さんの戦闘モードスペックは八兆です）。注意、歯は朝ご飯後に磨いてあげようね。おっと、忘れていました、後部に黒い薔薇のかんざしを装着。

く完成。全部、一人でできると言いますがツンデレなんですよ
陽乃心の証言より。く

そんな完璧な深白の幼児体型に異変が起こっていた。蒼空のスレ
ンダーボディにも。

新しい命を宿している？ お腹はふつくらとしている。

「くそ兄様、どうやら、深白妊娠したみたいですよ……」

「しいちゃん、蒼空も妊娠しちゃいました、第二児ですよ。喜んで
ね」

「えっ！ 僕、僕、ちゃんと避妊してるよ？」

当然、深白と蒼空は無視をした。最近、心を操る術に長けてきた
と、心は気づき始めていた。それでも、この瞬間、それだ！ とは
気づけずにいるのが人の良い心の長所でもあり、短所なのかもしれ
ない。

顔を赤らめる深白と蒼空は示し合わせたようにお腹をゆつくりと
撫でる。新しい命を慈しむ母の眼差しはヘタレな心を動揺させるに
は効果が在り過ぎた。

顔を真っ赤にさせながら、一步後退。派手につまずいた。その際
に彼はせっかく用意した有名ドーナツ専門店『ツナツナ』の超限定、
七色のドーナツが入った箱をお尻で潰してしまった。

そのぐにゃん、と柔らかいドーナツの感触とほぼ、差異無く

「あ、くそ兄様が……深白の好物」

無感情な声に少し寂しさのこもった深白の声がする。だが、心は
今、あまりの衝撃に動けないでいる。雲一つない空を放心状態の心
の双眸が映す。

何か、トスツと重いものが落ちた音がする。何かが落ちたなあ。

僕の品位も落ちたなあ、娘を孕ませるなんて……。

「元気出して、ママが後でコーヒー牛乳作ってあげるから」

蒼空の母性味、溢れる声が幼い深白を包み込む。それに静かに、
「うん、お母様。七折星しちおしせいのはちみつもたっぷり、入れてください。

ただし、牛乳はミコ星みなせきの皆瀬牛乳みなせぎゅうにゅう、インスタントコーヒーは雛星の

みみるブレンド……」

と、呟く深白。

また、何か、トスツと重いものが落ちた音がする。だが、心の耳には未来の我が子の声が聞こえていた。彼は思った。それでも良いじゃないか？ 子どもの笑顔は家族の心に温かい火を灯すだろう。みみるから深白誕生日に住宅型宇宙船 ミミルすぺしやるを貰ったし、子どもの部屋には事欠かない。船の名前が若干……激しく……気に入らないが。

「でも、僕……避妊してるよ。蒼空は萌え星を早く復興させるんだ！ って意気込んでいるけど、どう頑張ってもそれ、何百年後だよ。萌え星、ないし。ねっ、扇ちゃん？」

宇宙素材 ヒルドラでコーティングされた赤いドレスのようなパイロットスーツ（ちなみにディアシルドの効果上、パイロットスーツは必要とされない。ダサイので誰も着たがらない）を着たベリーシヨートヘアの少女に聞いた。

その幸福を含んだ声に足を止めた扇は躊躇ためらいなく、心の腹部を運動靴で踏んだ。相変わらず、心を虐めるのが大好きなの！ 笑顔を浮かべている。眼鏡が光っている……。

「陽乃家の家族計画なんて俺が知るかよ。知っていたら今頃、お前の所属する特別クラス IEDの連中に宣伝してるぞ、きつと。あ、身内だけじゃねえかよ、あそこ。ちっ、みみるに聞け、天才だろう、あれ？」

そんな心をかからかう材料が少なくなつて、つまらなかつたのか。手に持っていたお酒を浴びるようにごく、ごくと豪快に飲み始めた。その水滴が心の額に落ちた。

あー、わざとだな、と心は思う。普通、怒るところだがもう……年がら年中のため、むしろ、心地よく思えた。普段のDSなIEDの新米教官 有機物質感情士 第一位諸刃の刃の河霜扇だ、と。

「心、起きてよく見るのじゃ。蒼空と深白を」
みみるの呆れた中にもどこか、威風堂々とした含みのある声がし

た。そちらを向くと、実に立派な黒いオーバーニーソックスに出逢った。むしろ、これがみみるの本体でいいのでは？ と失礼な想像を膨らませるほどに心は幸福に満ちていた。

だが、彼は同時に真面目な学生という過去の栄光にしがみつく。

「うー、でも、でも、みみる。僕はまだ、IEDの新米パイロット候補生なのに……良いのかな？」

「人生は色々とある、なのじゃ。だが、心。お前の思い描いている未来はまだ、まだ、先のようにじゃ。ほれ、捕まるのじゃ」

みみるの困った奴なのじゃ、と言いつうな優しい小顔が心の瞳に映る。言葉の通り、白い手が心に差し出された。こんな対応をみみるがするのは、ここに集まるメンバーと後、ごく僅かの人だけだろう、宇宙は広いのに。それでも、そうできるくらいに彼女は成長した。

心は嬉しくなつて、微笑んだ。

「な、なんじゃ？ 嘆いたり、微笑んだり、と。やはり、地球人はよく解らんなのじゃ」

心を起こしながら、そうみみるは恥ずかしげに言った。

「全く、みみるさん、心を甘やかさないで下さい。最近、やっと……男の子らしくなってきたんですから」

この春、桜餅学園に転入した朝が凜々しさを宿す黒い虹彩をこちらに向けていた。そこには自分の発言に嘘はない。そんな強い意志がこもっていた。

いつだってそうだ。人にも、自分にも、厳しいのに僕には優しい、と心が信じているとおり、朝の厳しい眼差しに反して、彼女は微笑かに微笑んでいた。その微笑みを際立たせるのに相応しい春の微風が優しく、ポニーテールを撫でる。その風は朝の髪を結ったゴムに無理矢理、結びつけている風鈴の軽やかな音を奏でさせた。

その風鈴を聞く度に朝はまるで自分が生まれ変わった心境になる。しかし、その横では深白がけらけらと笑っていた。季節外れな風鈴が可笑しくてしょうがないようだ。

深白はそれが目的で風鈴をプレゼントしたのに朝は気づかず、深白の成長に感動してお金を出した心さえも気づかなかった。もつとも、この男が気づいたら宇宙中の人間は気づいている。今だって彼は呑気なものだ。

「朝ちゃん、ひどい。男ではないって言ってるようなもんだよ、それ」

そう言ってから、可愛い我が子の両脇を掴み上げる。

「元の可愛い、可愛い深白ちゃんに戻ってるよ！ ほーれ、ほーれ、高い高い」

「深白はそれ、生後二日で卒業しましたくそ兄様……。ふっ、嬉しい……」

相変わらずクールな口調ながらも、深白は不器用な微笑みで父に嬉しさを伝える。その父と娘を眺めて、母 蒼空はレジヤーシートに重箱を置いた。重箱を並べる手には幾つもの、ブタさんの絵柄の子供用絆創膏が貼られていた。優しい新米母の手だ。

そして、当たり前のようにみんなに一声掛ける。

「みなさん、蒼空はお弁当作ってきました。一緒に食べませんか？」
声量のある声ではないが、か細くもない声がみんなの視線を重箱の中身に注がせた。

重箱は華やかだった。一段目には、いなり寿司やおにぎり。おにぎりは深白の小さな口でも食べやすく、喉を詰まらせないように一口サイズだ。その代わり、色々な味を堪能して欲しい母心が鮭やかか、しらす、梅干し、細かく刻んだ卵焼き、ソーセージ、わかめ、佃煮といった具に余すところ無く、こめられている。ただし、梅干しが大嫌いな深白はそいっただけは見ようとしなかった。

「ママ、梅干しは要らない。あれは種なのです……土に還してあげて……」

「だ・め 深白、それじゃあ、大きく、なれないぞ」

「百三十センチの汚点は百四十センチのくそ兄様のおかげです……深白の責任ではありません。母、それに萌え星人は卵に返ってから

成長しません。どうやら、くそ兄様の血を受け継いだ深白も例外からは逃れられない……。いや、だからこそ……」

心は深白の真剣な顔を正面から見て、嘘だよな？ と目で訴える。深白は迷わず、首を横に振った。

重箱の二段目には、お肉が大好きな深白のために第一に考えて、一風変わった仕掛けがしてある。焼き肉用のタレが掛かった豚肉を包んでいるのはお野菜達だ。そのお野菜のラインナップは身体に良い奴らばかりだ。ニンジン、ピーマン、キャベツ、ゴボウ、キュウリだ。

「身体に良さそうですね。みみるさん？」

「朝はそういえば、焦げバーグの存在を知らないのじゃな。どうも、焦げバーグの一件がある故、我は蒼空の料理を疑ってしまうのじゃ。蒼空が我の入院の際にお見舞いの品としてあれを持ってきた、なのじゃ。今でも夢に見るのじゃ。ケチャップで味を誤魔化す夢……」

「白妖精剣が初起動した事件。アリク姫が訪問して宇宙連合とアリク連合の間に公式な話し合いの場を持ち合いましたよという歴史的な条約。宇宙平和条約が結ばれる切っ掛けを作った戦闘で入院した時ですね。心君が私と一緒にいつも、ジュースを買ってくると無理矢理、誘うので何か、あるとは思いましたが、それでしたか。デリュージョン イデオロジストのあたしでも気がつきませんでしたよ。盲点ですね」

「嘘だ！ ママは宇宙一料理上手です。くそ兄様は毎日、ママと深白の身体が一番、柔らかくて美味しいけど……料理も最高だ！ っ て叫びながら食べてます……」

自信まんまの深白の頭に手が添えられた。深白の父の手だ。心なしか、震えている。少女は、それは私への愛情の深さ……いいえ、愛の深さが故。ついに母を越えたと勘違いした。

「深白！ 嘘は言っちゃ駄目！ 深白は僕の娘なんだから、そんなこと言う訳ないよ」

きっぱり、否定された少女を優しい悪魔の微笑みが出迎えた。

その悪魔は重箱の三段目、野菜の群れを素通りし、重箱の四段目の手作り蜜柑ゼリーを一カップ、掌に載せた。そして、すっと、深白に差し出す。

「深白。諦めるな。奴は所詮、ドMのヘタレなんだ。くそ兄様と呼ばれて心が揺るがないはずはない。もう、一年と三ヶ月もくそ兄様というお薬をお前はあのヘタレに与え続けているんだ。今日のお薬は……深白がこのゼリーを口に含み、奴に」

「はい、はい。先輩。馬鹿な真似を止しましょうね。子どもの教育には最悪ですね、先輩は」

そう、心にとっては困ったことに扇の指導でパパと心と呼ぶはずの我が子が、心にくそ兄様と呼ぶようになってしまったのだ。しかも……最大の愛情表現だと我が子は疑いもしない。

放っていたら扇の言葉を鵜呑みにしてしまう深白の手から蜜柑ゼリーを奪い、ゼリーを食べやすい適量にスプーンに乗せる。そして

「深白ちゃん、あーん」

「あーん、おひいひい。くそ兄ひゃまあ」

うん、とても良い笑顔で食されるなあ、うちのお姫様は。そんな感想が娘の幼い魅力に蕩けた顔をした心からは容易く、読み取れる。いつの間にか、蒼空も深白に色々な食べ物を食べさせ始めた。自分の食事はそこそこにして。

「全く、幸せだね。陽乃さん宅は」

皮肉混じりに扇はそう言った。思えば、遠くまで来たものだと、彼女は空を見上げた。その空の彼方には宇宙人全般を追っていた自称 宇宙人ハンターの父と母がどこかにいるはずだ。彼女を独りぼっちにした宇宙人という存在。そして、両親が落石であっけなく死んだ後に孤児院の裏で出逢ったみみるに彼女は言った。その言葉をもう一度、みみるに言う。

「幸せは見つからない……。自分の心がドーナツの穴のようだ」
みみるはそれに対してぶっきらぼうに返事する。

「嘘、なのじゃ」

「ああ、嘘さ。幸せはここに在る。もつとも、あの人みたいにラリ
ったハッピーとは違うけどねえ」

扇の視線の先には、浅木新聞あさきを両手で持って傘の役割を持たせて、
スプリングラーの雨の中を走る女性 宮御みやご継きつなを眺める。ちなみに
黒い長髪をずぶ濡れにしている水滴は全て、ビールだ。

「ビール、臭そうなのじゃ」

今からこちらへと継が駆けってくる未来を予想して、みみるは鼻を
摘んだ。

>?<

しばらく、蝶がゆっくりと羽根を広げ、ひらひらと飛ぶような時
間が流れた。

「また、私の負けなのじゃ。どうして、心ばかりを引くのじゃ」

「どうして、僕がババの役になっていることをそれよりも知りたい
ですよ……」

「お前が一番、適任だからだろう？」

「あい！ 蒼空にとつてしーちゃんはかけがえのない人です」

「ママ……それ、意味違う……」

「全く、みみるさんはババが穴開くほど、見てしまうから皆さんに
バレバレなんですよ」

「あら、朝ちゃん。優しいアドバイス」

春の日射しのちよつと、眠気を誘う効果を紛らわすために始めた
トランプでババ抜きをする遊びをみるる、心、扇、蒼空、深白、朝
継は楽しみ始めていた。みんなで集まって遊ぶ昔ながらのアナログ
ゲームは面白い！ 誰もがそう思っていた。心は一つになっていた。
そんな空気を壊す存在の声が突然、空から振ってきた。

「まきぐそっ！」

「は？」

異口同音にそんな疑問の声がみんなの口から飛び出した。当たり前だ、まきぐそはないだろうとみんなが同じ気持ちで空を見上げる。空には桜餅学園のプールほどの大画面ホログラムモニターが浮かんでいた。そこにはみみるに似た赤い虹彩と、目の下の隈が印象的な少女が映っていた。一つ結びの幼い髪型がより、いつそう少女の異質さを際立たせ、サイズの合っていない白衣からはちらちらと胸もとが見えそうで見えない位置まで露出している。

少なくとも、心はこんな人物に心当たりはなかった。しかし、無気力系の顔をした少女の数パーセントにみみるに通ずる威厳を感じる。別にみみると虹彩の色が同じだから関連づけているのではない。その証拠にみみるだけはそのモニターの出現に立ち直りが早く、困惑の表情を浮かべている。どうやら、あまり会いたくない人物のようだ。

始めに声を上げたのはそのモニターの少女ではなく、みみるだった。

「何故？ 妹のあるるが緊急通信をしておるのじゃ？ もう、アリク連合との争いもないのじゃ。当分は平和なのじゃ」

少女 雖あるるはその言葉に不快感を示し、全身を揺するのに合わせて激しく一つ結びを振った。表情には表れないが相当、みみるの見解に反発心を抱いているのは誰の目からも明白だった。

満足したのか、あるるは自分の身体を揺るのを止める。服装には無頓着な方なのだろう、胸元が露わになっているのに気にしていないようだ。

心があっ、とそれを発見し、小さな声を上げるが、それを浮気だ！ と判断した蒼空と深白がそれぞれ右足、左足を踏む。心が痛みに飛び上がったのをみみるは横目でちらりと見て、あるるの生気のない瞳に牽制の微笑を浮かべる。

「その調子ではいずれ、来たる聖戦のレクチャーをされていない？ 理解不能、天才さんは理解不能です。本当、馬鹿と天才は紙一重ですか？」

「……」

ぞんざいな態度とも相手側に評価されかねない無言をみみるは貫き通そうとした。

そのみみるの態度は白妖精剣を心が初めて動かした日を心に思い起こさせた。また、独りで無茶をするのだろう。みみるは上から視線で人を顎で使うように見えて、実はそうじゃない。親しい人ほど、彼女は自分の心を相手に砕こうとする。例え、相手が望まないとしても。

心は少し、苛立った。みみるのそんな態度に。

友達だろう！ そんな意を込めて、あの時から抱えていた爆弾をみみるに敢えて投下する。

「みみる？ 聖戦ってアカエルさんも昔」

「もう、蒼空や心、深白……地球に住む民には関係ないことなのじゃ。我らの問題なのじゃ」

そう、拒絶するみみるの胸を朝がそつと包み込む。あまりの唐突な出来事にみみるの身体は硬直した。それを朝はまだ、まだ、お子様ですね、と余裕の破顔を魅せる。

「みみるさん、嘘を吐くのは下手ですね。心拍数が上昇してます。無駄ですよ、ノーなんて言わせません。あたしはリアリストではない。現実よりも先を見据える人間ですから。それに」

「友達だろう、みみる」

朝の言葉をここぞとばかりに心は先取った。

「しかし、なのじゃ」

みみるは知っていた。聖戦を知る者は二つの選択を必ず、せざるを得ない立場に追い込まれることを。運命に抗つての死か？ それとも、運命から背中を背けての死か？ だ。

みみるは苦渋の表情を浮かべる。できれば、心達を可能な限り、生存させたかった。最期はその存在すら、知らせずに心達を幸福のまま、安らかに逝かせてやろう、とさえ考えていた。

空に映った少女は判断できない姉をずっと、目を細めて眺めてい

た。が……限界のようだ。

「天才さん、信頼に答える。それしか貴女の道は百パーセントないので」

「ふう、そうじゃな……。少し長くなるのじゃ。話そう、なのじゃ」
観念と決意の感情は幼い少女の顔を女性特有の冷徹な仮面を被らせる。それは客観的に物事を眺める大人の女性の視点。

「今の宇宙は我らの星、みみる星の誇る望遠鏡 レイル・バーンのデータが五千九十二回目のリサイクルを終えた五千九十三回目の宇宙と導き出したのじゃ。これが、我らの祖先 雛るる女王が即位していたリユ時代雛歴六億七十二年のことじゃ。その一年後の雛歴六億七十三年に宇宙をリサイクルしていた存在をるる女王の元、行っていた宇宙解明計画の所属宇宙船 白妖精が発見に成功したのじゃ」

春なのに寒々しい風が深白の肌を突き刺す。ゴスロリ服は案外、薄い生地であるためか、身震いする。

太陽は幼子を燦々と照らしているのに、その恩恵を深白は受けられない。恐怖？ まさかと思いつつも、心の腰にびったりと抱きついた。ここは落ち着く。

「我らはその星を喰らい、巨大化する存在を畏怖の念を込めて、ユニバースホールと呼ぶことにした」

「ユニバースホール？ それが世界をリサイクル？ 訳がわからねえなあ」

科学を囓っているはずの扇が首を傾げる。その視線の先には頭を抱えている陽乃心の姿が映っていた。いつものようにさり気なく、助けてやるのだが、彼女のそんな優しさを彼は知らない。ため息を吐いて、炭酸の抜けきったサイダーを一口、飲む。

「馬鹿でも解るように説明しましょう。地球では意志を持って新本を書店で買う。意志を持って読み終わる。当然、要らなくなり……。そこで意志を持ってゴミとして捨ててしまつと資源が無駄になる訳です。そこで意志を持って資源回収ボックスに入れる。そう

すると、再生紙として蘇る……」

と、あるるが淡々と説明した。

「くそ兄様が解っていないので、深白がさらに説明します。意志を持って？ と強調したのはユニバースホールが意志のある存在だとアピールしたかったのですね、下手くそですが」

頭が良いところを披露する。深白はあることを期待して、父親の汗の臭いが染みこんだブレザーに顔を埋める。それは恥ずかしく、嬉しい、両親の良い子、良い子と交互に深白の頭を撫でる幼い快樂の訪れだった……。少女の自尊心は向上した。

こっちの少女 あるるは初めて、人の表情を見せる。それは憤慨。

「ちびに言われるのは心外だ、まきぐそっ！」

あるるの薄い乳に深白はゆっくりと、小馬鹿にするように喋る。

「くそ兄様が大好きそうな乳首さえも未熟なペドに言われるのは、深白的には心外です……」

「蒼空、そんな顔しないで僕は蒼空の桜」

「あい！ しーちゃん、恥ずかしい！」

心の口を慌てて、近くにあつた梅御握りで塞ぐ行為と、恥じらいの言葉はとても、同じ人間 陽乃蒼空がしでかしたことは思えない……。なんとか、心は梅御握りを嚙下しようともご、もご、口を必死に動かす。それを大笑う深白。

「説明、続けたい、なのじゃ」

「あ、この馬鹿一家には構わず、進める。みみる」

と、みみるの呆けた声に扇が応える。彼女達は陽乃一家がラブラブで時々、空気の読めない連中であることを熟知していた。今更だ……。

「ユニバースホールの進行はやがて、人類の全ての祖であるチキウを呑みこもうとした。彼らの技術力ではせいぜい、ツキ旅行が責の山だった。そこで陽乃心、なれの祖先の陽乃葵と陽乃聖夏を萌え星へ、なれの祖先の陽乃礼と陽乃聖奈を地球へと極秘裏に当時の女

王 雖しゆしゆるが逃した。それがアウル時代雖歴六億九千六百万百十二年に当たるとのじゃ」

意外なご先祖様話にじゃれ合っていた陽乃一家は真剣な眼差しを一斉にみみるに向ける。

だが、少女は勘違いする。これも、自分の説明力の結果！ 当然。豊満な胸を張る。

「しゆしゆるの友人としての気遣いだったようで、雖星の王位継承者にしか情報が閲覧できないレベルSの情報に指定してされているのじゃ。そして、我ら雖王家には義務として、萌え星と地球を見守ることがしゆしゆるによつて託されたのじゃが……それは長い歴史の中に埋もれ、忘れられた、なのじゃ」

そこで言葉を切り、心達を一人、一人、見据える。

「そう、我がインフイニティーエモーショナルエンジンのヒントとなる情報を求めに雖星の機密図書館に行くまで……」

「アカエルさんがみみるを心底、嫌っていた理由は……僕や蒼空の結びつきが偶然ではなく、雖王家に仕組まれたからだったんですね。そんな遠い時代から」

アカエルはみみるとは親しくなく、言葉をあまり交わさない。心は親になってアカエルの心情を初めて理解した。幼い深白の運命の輪のような髪を愛おしげに見つめ、そんな恐ろしい思惑に娘を関わらせたくないとも当然、思う。

「アカエルはアースガーディアンシステムを使用して真相に辿り着いたのだろう、なのじゃ。嫌って当然なのじゃ……」

「それには我も同感です、敢えてノー言いません」

姉妹はアカエルの件に対し、罪の意識を表情に表そうとも、身体に表そうともしない。ひたすらシビアが一同を真剣にさせる。

「地球だ、と丁度……最初の人類が登場した……頃、まさかなあ。ねえよ」

それは、肯定する扇の声だった。

「その地球人の考察した通り、猿から進化した人類は確かに存在

していた。だが、文明レベルが低い彼らは戦争により、全滅しまった。それに代わり、台頭してきたのが陽乃の血を継ぐ者達。良かったですね、陽乃心は限りなく、オリジナルの陽乃礼に近い。そして、蒼空も葵に近い。運命です、運命。あるは嫌いですが、そのワード

「 壮大な繋がりが心の胸を奮いたたせる。感動なんて綺麗なワードでは、明確なワードでは、表せない深い、深い色合いの感情の震え。それよりも俺、ヘタレが先祖かよ」

「 扇ちゃん、それ、自分の首を絞めてるよ？」
「 だよなあ」

>?<

「 あるるか……。何が白妖精剣が必要だ。そんな奴に勝てる訳ないよ。第一、深白はまだ、幼い。戦争なんかに行かせるか」

心はあるるに言われた自分が恐れていた台詞を、目の前にある大きな試験管 生命維持ポット ネバーにぶつけた。自分でも恥ずかしい八つ当たりだ。

それをアースガーディアン管制室の主であるアカエルがくすつと少女のような笑窪を作り、眺める。

「 白妖精剣が初起動した時の熱い陽乃心は何処に行ってしまったんですか？」

「 ですけど……。僕は深白を双対象人物には……。」「
「 したくないですか。甘えないで下さい、婿殿！」

激昂しているはずのアカエルは少女のように泣いていた……。
。。何故？ 泣いているの？ そう、心は問いたかった。違う。その答えを知っている。

自分は目の前の蒼空に似たエメラルドグリーンの虹彩を涙で輝かせ、泣く蒼空の母親に誓ったのだから。

それは深白を初めて、アカエルの元へと連れて行った日。誓いの

日。

> ? <

「しいちゃん、みしろちゃん、ほほえんだ」

僕にお姫様抱っこされた真つ白な肌の少女の頬を蒼空は遠慮なく触り続ける。ママ好きな深白はそんな些細な触れ合いでも簡単にふにゃん、とした笑顔をする。ピンク色のセーターを着た深白にその笑顔は似合っていた。

「そうだね、これがエンジェルスマイルだよ、蒼空」

「格好いい兄様、ママ。もう、深白は生後一週間です……」
そこら辺の赤子ではない」

深白の笑顔が太陽ならば、深白から今、発せられた言葉は月だ。

月は一見、無表情に見えるが、太陽の光で隠れていた美しさを際立たせる存在だ。その効果もあり、僕と蒼空は深白の一挙手一投足に愛の素晴らしさを感じる。そう、深白こそが僕らの永遠のオアシスだ。

それはあの人も例外ではなかった。

僕達はアカエルの通信

「婿殿、蒼空ちゃん わたくしに早く陽乃深白たんを見せに来ないと生命維持ポットから抜けだしてでも、這ってでも見に来ちゃうゾっ」

に急かされて、僕は今、アースガーディアン管制室の扉に触れようとしていた。

だが、触れる前にアカエルの緊張した声が中から聞こえた。

「入って良いですよ。とうとう、わたくしもお婆様になるのですね。緊張します。黒妖精剣から脱出ポットに乗り込んで以来の緊張度合いですよ。さあ、おいで、深白たん」

その声は優しそうだが、深白をどうにかしようという愛情のオーラに包まれていた。蒼空の先読みの力を濃く受け継ぎ、さらに僕の

血を入れることで瞬間読解の力を得た深白は思考をフル回転させた結果、僕の腕から無理矢理に逃げ出す。

「み、深白の経験上、この場合は帰る選択が正解です……」
だが、世の中、そう甘くない。こんな言葉を深白が学んだのはきつと、この瞬間だろう。

深白が後退ろうとした瞬間

独りで扉が開いた。そして、深白を目掛けて猛烈な勢いで生命維持ポット ネバーが飛んでくる。

いつの間に改造したのだろうか？ やはり、レールは不便だったのだろうか？ と呑気に考えていた僕を蒼空が必死の形相で突き飛ばす。よろめきながらも、僕はある地点にたどり着いた。

「え？ 嘘。直撃コース！」

その位置とはびっくりして今にも泣きそうな深白と、爆走中の生命維持ポット ネバーとの中間地点だった。

その位置に僕を運んでくれた蒼空を振り返る。蒼空はごめん！
しーちゃん。でも、深白の方が大事だから、と言わんばかりに舌を出し、可愛い笑窪を作っていた。わざとじゃないんだろうけど、何か悔しい。

「媚殿、知っていますか？ 車は急には止まれないんですよ」

蒼空と同じ可愛い笑窪を作ったアカエル。その表情を作るきめ細やかな肌が毛穴まで見えそうな位置にまで達するに時間は掛からない。ほら……今日も素っ裸で？ と予想していた。それを斜め上に飛んで、十代の少女が着そうな真っ白なワンピースと童話に出てきそうな赤い靴をちゃっかり、着用していた。可愛い……なんて、感想を僕は言えるはずもなく、むしろ、今は。

「そんな猫撫で声で、死亡エンドみたいな宣告は止めてえええええええ！」

「無理いいいいいいいい！」

クリアな壁を隔てて僕は蒼空の面影に出逢う。長い黒髪は撫でると、気持ち良さそうにあい！ と鳴いてくれる。耳元で囁いた後、

そこで吸う空気は甘いミルクティーの味。唇はいつだって希望を口ずさむ桜桃色。肩には幸せの青い鳥が百羽くらい集っている、だって蒼空の肩は宇宙一、キュートだから……。ワンピースの生地の下には少女の未成熟さの名残、思い出がいつぱい詰まっている。だから、僕らはいつだって子どもの頃に戻れる。幼女体型な蒼空には腰にくびれなんてない。それは少年の美さえも体現している。蒼空のお尻は控えめな膨らみだ。それは目で見なくとも、心の目でいつも拝める。蒼空の足は折れそうなくらい細い。だが、それは恐ろしく柔軟な動きを見せる。例えるならば、デパートの食品売り場で人々の合間を天真爛漫の笑顔を浮かべ、疾走する幼女の如き柔軟性。いけないと、解つてもアカエルに蒼空を見出してしまふ。

だからこそ、僕は固まっていた。

「しーちゃんの浮気者……」

背後で蒼空の怒りの声が聞こえる。心が読めるのだろうか？ 君はもっと、天使の声

ごんっ！ まるでその音は今日、聞くはずの除夜の鐘の音。あっはは、僕は未来に生きてるね

意識が遠のいていく。僕はそのまま、永久の闇に包まれていった……。格好いい兄様にはあまりにも相応しくない死だった……。おわり。

「って、扇ちゃんの真似をしないでね。深白ちゃん」

深白のそんなお通夜を独りで取り仕切る令嬢みたいな愁いに沈んだ声が、僕の意識が遠のくのを防いだ。僕はウィンドウズの起動並みに素早く、状況を把握しようとする。

今、脳……いや、ハードディスクが目まぐるしい回転をしている。まずは、自分の確認……システムエラー（額から鮮血）あり。

情報、深白は言い訳をするぞ。根拠、ハムスターの運動器具のような輪をくるくると手で弄んでいる。

「扇が言っていました。格好いい兄様の場合、どんなピンチでもそれなりにおふざけを入れておけば、コメディーパーツで済まされるか

ら……」

コメディーパート、ウィンドウズ内に情報があり 違う、僕は人間だ！ そして、現実にはコメディーパートなんてない！ と反論する前にアカエルがゆっくりと孫である深白に自分の見解を述べる。「良い子ですね。もう、婿殿の体質を見抜いているなんて」

「いいえ、それほどでもありません。深白は格好いい兄様のお嫁になる存在ですから」

「なごんでる？ はつかおあわせ、せいこう？」

天使の蒼空は賤しく、地面に仰向けになっている僕に天からの贈り物を地上へとその御手で垂らす。その贈り物は雛星の湿布。ヒヨコの形をした貼って歩くにはクソ恥ずかしい形が印象深い。だが、天使様からの贈り物。僕は意を決して、その湿布をおでこに貼った。ひんやりする……。リフレッシュ、マイ エンジェル。

「ありがとう、蒼空。うん、蒼空のおかげで初顔合わせは成功だ」
僕の言葉に一辺の曇りもない。蒼空、天使。深白、幼女。アカエル。蒼空の眷属。で、いいじゃないか。そう、人間には痛みを想像力で掻き消す力があるって、自称 デリュージョン イデオロジストが言っていた。でも、痛いものは痛いようだ。

「朝ちゃんの嘘つき、くすんっ」

朝ちゃんの嘘つきは事実だが、湿布の効果は本物だ。雛星の医療には感謝。そう、心から思おうとした瞬間、みみるの顔がちらついた。奴は尊大な顔を無理矢理、作って

「やっと、私の偉大さに心も気が付いた、なのじゃ。まあ、今まで気が付かなかったのが意外だったのじゃ。インフィニティーエモーションナルエンジンやサブエモーションナルエンジンシステムも我が作ったのじゃ。だから」

「凄いですね、雛星の医療品は。もう、傷を塞いじゃったよ」

心に響く栄華を謳歌していらっしやるみみる様を湿布ごと、丸めて近くにあったゴミ箱へと捨てる。それをすかさず、キャッチした一つの影が在る。

その影　深白は恥じらうことも、躊躇うこともなく、使い捨ての湿布に鼻を充てた。充てるだけではない。湿布に含まれる空気を掃除機並みの騒音を立てて、吸っている。

「くんくん……」

そこに加わる蒼空。

「くんくん……はあ、いいね、みしろちゃん」

「そうですね、ママ」

変態がいるよ、家族に変態がいるよ。

その騒動には加わらず、アカエルはポット内で透明なキーボードを操作する。いつになく、真剣だ。緊迫感が彼女から伝わってくる。

一体、何が？

アカエルがキーボードを消失させると同時に深白に語りかける。

「深白ちゃん、両手を広げてごらん」

名残惜しそうに湿布を蒼空に託してから、深白は両手を広げた。

唐突に両手に質量が加わる。それは誰の目からも軽いながらも重さを持っている黒いゴスロリ服だった。黒とフリルが印象的で、現実離れしていた。

「深白ちゃんにプレゼント。萌え星人は一生、背丈が変わらないからいつも、着てねっ」

「うわー、格好いいです。ありがとございます、これで格好いい兄様もイチコロ」

僕の脳裏にGを退治するハウスが浮かんだ。そのハウスから僕を掴み取り、ほくそ笑む深白。僕は近親相姦が嫌なので必死に逃げるが、彼女の手は僕の身体を離さない。

「うん、うん、深白がそれを着れば、男の子のお友達もできるな。お父さんは嬉しいよ」

「男性は格好いい兄様で事足ります。そうですね、ママ？」

「あい！」

母として、娘に父を奪われるのが平気なのか？ いや、蒼空のことだ。みんな、仲良くがモットーな蒼空だ。娘なら尚更、きょうゆ

う、とか言い出しそうだ。それも、それで嫌だ。

「萌え星の復興ができるくらい、二人を可愛がってあげてくださいね。婿殿」

「うわぁー、この人も同じ意見だよ」

「ところでわたくしは婿殿と二人で今後の家族計画について、話し合いたいのですが、蒼空？」

「あい！ いこつ、みしろちゃん」

「はい、ママ」

母と娘の声はいつもよりやる気に満ちていた。何のやる気なのかは知りたくないと僕は思う。それよりも、気になるのは急に翳りを見せたアカエルの佇まいだった。

「わたくしは反対しましたよね？ あなたに忠告もしました。あなたは知らずに茨の道を歩き出した。知ってますか？ 運命という言葉は本当にその現象があると思わせる数奇な人生が人間の歴史の経験値として積み重なっているから存在するのです」

「それが僕と何が？」

哲学的だが……僕如きがその運命に介入できるほどの存在には思えない。しかし……と、僕は考え込む。

その姿が滑稽だったのか、アカエルは妖艶に微笑む。

「ふっふ、少し、意地が悪かったようです、わたくし。陽乃心、何故、白妖精剣があると思いますか？ アリク連合よりも植民地を多く手に入れる武装としては度が過ぎているでしょう」

「聖戦……」

「また、その謎ワードですか……。教えて」

「まだ、あなたが知るには早い。でも、わたくしは意地悪なんですよ。どんな不幸なことからも蒼空や深白たん もちろん、婿殿も救えると誓いますか？ 婿殿」

「はい、もちろんです！ ですから、教えて下さい、聖戦とは？」

「まだ、秘密ですよ。あなたにはまだ、足りないですから。時が解決してくれます、時が」

時が。そんな三文字が僕にとって何か、巨大な意味を持つような気がして、蒼空と深白を連れて、住宅型宇宙船 ミミルすぺしゃるに帰宅した後もそれは溶けずに残った砂糖のように僕の心に痼りを構成した。

>?<

「あの時、教えなかったのは……聖戦は逃れられない人類の死という運命に抗う戦争だからですね。そして、僕は守るために冷徹にならなきゃいけない」

「成長しましたね、陽乃心」

しーんとした空間、その声はアースガーディアン管制室に響き渡り……心の耳にも響き渡る。

嘘つきだ。まだ……深白を危険な闘いへと出したくないと思っ
ている。だが、白妖精剣のインフイニティーエモーショナルエンジンの限界ギリギリの性能を引き出さなければ、運命には抗えない。そして 心は拳を握り締めた。指と指の間から朱色に染まってゆく。歯がゆい。自分と蒼空が、深白のような進化した地球人、進化した萌え星人ではないことが。深白の感情数値を測るのが……彼女が誕生して以降、一番してはならないことだった。それは蒼空と相談してのことだ。きつと、それを知れば、みみるは……宇宙連合の面々に誤魔化しの言葉が効かなくなる。

確信があつた。あの子が……とんでもない逸材で、唯一の存在である、と。

アカエルは厳しい眼差しを心に向けて、決意の言葉を待っている。「あの頃は、まだ陽乃深白の可愛いさだけしか、目に映らない新米パパだった。でも、それじゃあ……」

もう、良いですよ、とアカエルの悲哀の涙に濡れた鬨りから、薄く顔を出すひまわりの花のような優しい表情が声無く、語る。

心はゆっくりと、首を横に振った。

「駄目だって知った」

その言葉を聞いたアカエルは楽しそうに腹を抱えて、扉を指さす。「ふっふ、余程、あなたは好かれているみたいですよ。聞き耳を立ててないで、こちらに来なさい。蒼空、深白。能力を使わずとも、あなたたちの行動は筒抜けです。絆の糸で小指と小指が結ばれていまずから」

申し訳なさそうにしゅんとして、蒼空と深白は仲良く、手を繋いで心とアカエルの傍へと歩み寄る。

小さな深白の……本当に小さな両肩にゆっくりと手を置いた。心の黒い虹彩と、深白の翡翠の虹彩が混じり合う。

「深白、聞いての通りだ。僕たちが死ぬまで良い家族であるためには聖戦に勝つたなきゃならない。ユニバースホールの消滅、それしか僕たちの未来は切り開けない」

深白の両肩から彼女の震えが伝わってくる。深白だって、あの場において、難あるや難みみるの説明を聞いた。きっと、頭の良い子だ。可哀想に誰よりも理解してしまったのだろう。聖戦の勝利の力ギの一つが……自分の感情値、先読み能力、瞬間読解力であることを。

だが、心はそれらには問わない。

「一人の人間として、深白に問うよ。アリク連合のように自分の植民地を占領し、また、次の植民地へ……と逃げる人類の死の未来を選ぶか？ それとも宇宙連合のように死と闘う限りなく……不可能の生存に繋げる未来を選ぶか？」

その問いに深白は両肩に添えられた心の、父親の優しい大きな手を払いのけた。驚く父親を尻目に深白はいつものふと、魅せるあどけない微笑みではなく、凜とした少女の微笑みを浮かべた。

「深白は正式な有機物質感情士としての未来への切符を手に入れたパパとママの娘です。いずれ、それと闘います。それが今でも、構わない。むしろ、やってやります」

その言葉はいつものけだるさを。その言葉はいつもの世の中なん

て詰まらないと感じているみみるさえも凌駕する天才の好奇心に、挑戦心に、探求心に、点火してゆく。

心は初めて、自分の娘　陽乃深白が遠い場所に行ってしまったような気がした……。

だが、心はそれを隠し、力強く肯定の頷きを勇氣ある我が子にお守り代わりに渡す。

「行こう、深白。白妖精剣へ、と」

「うん、格好いい兄様！」

「行こう、深白ちゃん。蒼空の命を燃やし尽くしても、しーちゃんの未来、深白ちゃんの未来を守るから」

それは後、約八ヶ月しか生きられない母の愛情の全てを籠めた言葉だった。それを娘は哀しい顔をして、否定する。

母の頬にキスをして、父の頬にキスをした娘は背伸びをしたまま

「誰一人、欠けさせない……。深白の想いが、くそ兄様の想いが、ママの想いがそれを成す……」

心は思った。結局、僕は君にとって恋愛対象のくそ兄様なんだね。それでも良いさ。生きて、聖戦を終戦させることができるならば。いや、むしろ、君の中の蒼空に、君に恋している。

>?<

日本日時　四月一日　午後十一時十分　七秒。

離星　ミミルドームにて。

みみるは必死だった。ありとあらゆる説得の言葉を応じて、せめて深白だけは聖戦に参加させないよう、試みようとするのデスクを訪れる。

みみるから先に口を開こうとした。

その時、目の前のホログラムモニターが、部屋中が翡翠の光に染まった。そして、みみるや、あるるの身体をも染め上げる。

その瞬間、みみると、あるは一人の少女の微笑みを幻視した。蒼空とアカエル、心の面影をその身に受け継いだ少女、陽乃深白の華奢な姿。

「凄いのじゃ！ 何なのじゃ、この光は。紛う無き……インフィニティーエモーショナルエンジン臨界点光」
「間違いないですね、天才さん。あれは」

>?<

同時刻。

太陽系 地球周辺にて。

朝に乗せたエモーショナルブレイカー レゾナンスと、扇に乗せたエモーショナルブレイカー フランジュベルグが激しい剣舞を繰り広げていた。

鳴り響く、特殊合金 ヒノフェアリーの共鳴音。それはヴァイオリンの音に似ていた。

「レゾナンスの反応速度が極端に下がっているぞ！ どうした？ やる気あんのか！」

「扇教官」

「なんだよ、双嵐朝」

「あれを」

そう驚歎の声を出すしかなかった朝の身体を、レゾナンスを、フランジュベルグを、扇を、地球周辺を、翡翠の輝きが優しく包んでいく。

その光の先に朝と扇は一人の少女を見た。その少女は両手を二人に差し出す。まるで母性を既に獲得している母親のように。

その少女は蒼空とアカエル、心の面影をその身に受け継いだ少女、陽乃深白の献身的な姿。

「ああ、あれは」

同時刻。

第百星アリク星　アリク要塞　アリス兄妹の部屋にて。

絡み合う黒い二つの影。長身の女性の影が少し屈んで、中学生のような身長の高い少女の舌を自分の舌に滑り込ませる。互いの舌から滴る透明な唾液を至上のご馳走だと彼女達は思っていた。というのは、彼女達を冷やかな視線で見つめている中学生のような身長少女　アリス・カノンと同じ背丈の女性　アリク・チェロの意見だ。

もう、かれこれ、十分も長身の女性に見えるしなやかな体躯の持ち主だが戸籍にもしつかり記されている通りの少年　アリス・レオと、その妹であるアリス・カノンの情事を観音菩薩の如き、穏やかな静寂を保って観察している。

チェロは気弱な性格で、しかもエッチいことには固まる性質のあるアリク星の姫だ。今も、その性質のおかげで扉を開けて閉めて…二つの影を認識した途端にフリーズした。

なんて、恥ずかしいペアルックの深淵色のネグリジエ…とこのアリク要塞の主であるはずのチェロは生唾を飲む。

マトト（地球のトマトに似ている野菜。ただし、甘い）のように顔が真っ赤なのに、兄と妹の舌から…一筋の涎の橋が構築されるのを認識してしまう。動けないのだから仕方ないと、アリク姫は呪文のように心の部屋で唱える。声を出さないのは彼らへの配慮だ。だが、本当はそんな勇氣なんてない。

だが、そろそろ…ここに来た目的を果たさねば。身体に合わないドレスの裾を持ち上げて一歩、歩み寄る。

早く、死んだ先代アリク姫のように代々、受け継がれてきた全てを継ぐ者のドレスを着こなさねば。そんな気概が彼女をまた一歩、歩ませる。

自分の時代で逃げ続けたアリクの歴史を変えるんだ！　明日のア

リク星会で

宇宙連合と共に聖戦を戦い抜くことを宣言する！

全ての生きとし、生きるものの未来がこの一歩！

踏み出す。しかし、そこには自分の掴んでいるはずの生地が。当

然

「ふ、ふわわああああ！」

盛大な声と共に盛大に床にお尻をぶつける。チエロは今年で二十五歳なのに泣き虫だ。それが当たり前のようにわんわん、泣く兆候が彼女の双眸の金色がばやけてくる。

「うー」

その泣こうとする兆候を知るチエロの友人のカノンとレオは一斉に、ショートヘアの女性 チエロを心配そうに見つめ、すぐに駆け寄ろうとした。

その時、翡翠色の光がアリク要塞を、アリス兄妹の部屋を、ついに泣き出したチエロを、困惑するアリス兄妹を優しく包んだ。

その光の先にアリス兄妹と、チエロは一人の少女を見た。その少女は泣かないで、と言わんばかりにチエロの頭を撫でている。不思議なことにチエロはその細い手から人肌の熱と、微かな撫でられている感触を感じた。驚愕し、開いた口が閉じない。

「兄様あ、あれは心様と蒼空様の娘 深白様ではありませんか？

ですけど、単体での短距離ワープは人体を崩壊させるはず」

「そうだ、有り得ないことだぜ」

それにすっかり泣きやんだチエロが鼻水を啜りながら、答える。

「我々の勝利の鍵 深白様の総感情量が幻視化したものですよ。空論の産物だと思っていましたが、みみる女王の母君……我らにとつての裏切り者、レオやカノンにとつての母親 アリス・フルートのエモーショナルエンジン共鳴現象。人の持つ感情に共鳴して、それを点にして、感情の原子リアが拡散していく。リアの集合体はその主の形を作る。その量に達したのです……それを成すには空論上理論上、無量大数にも等しい有機生物のリアが必要です！ 有り

得ない話です！ ふわああ、この光、暖かい」

「では、この光は？」

と、アリス兄妹は異口同音に自分達の聖戦の鐘を叩いてくれと想いを込めて、チェロに願う。

「カノン、レオ。逃げるのはどうやら、終いの時がやってきたようです。あれは」

> ? <

同時刻。

地球。陽乃本家 庭園にて。

頑丈な垣に守られている陽乃家の根城は昔ながらの武家屋敷だ。

その古ぼけた垣の白い色が翡翠の色に変色してゆくのに最初に気づいたのは、宇宙連合の動きを陽乃財閥当主 陽乃典命へと報告に来た陽乃財閥が送り込んだスパイの女性だった。

その女性 いつもの水色の着物姿の宮御継は亡き親友 美樹のアホ顔を真似て、歓喜の涙を流す。

やったのよ、貴女の願い 聖戦の英雄を私達の誰かが生きている間に見れますように、が叶ったのよ。

それを報告すべく、心を身ごもった美樹の願いを病室で聞いていた後の一人を捜しに行こうとするが……その人物はいつの間にか、継の隣にいた。

自分の嫁の願いが叶ったというのに陽乃典命は難しい顔をしていた。顎に蓄えた髭を右手で弄ぶ。何を考えているんだか……。

翡翠色は周囲に浸食していた。その浸食は止まらず、継や典命を優しく包み込んだ。その光の先に陽乃の執念と希望を見た。その執念と希望は少女の形をしている。そう、それは命が確かに受け継がれていく証、それは陽乃美樹、陽乃典命、陽乃心、陽乃蒼空の次に続く者である陽乃深白の幼い姿。

「あらあら、陽乃家の歴史が報われる日が来たようですね……弟ち

「やん」

「私達が恐れていた聖戦への闘いの狼煙を一番、泣き虫で……へたしだった心が上げたんだ。それを思うと感無量です。陽乃財閥の影を表に出す時が来た」

その言葉にリアの集合体は主、深白の代理とばかりに肯く。それは偶然だったのだろうか？ または違う意味を持っていたのだろうか？
だって、陽乃財閥の裏を陽乃深白や陽乃心が知るのは現当主 陽乃典命の死後のはずなのだから。

それなのに陽乃の光に未来を感じた。継はゆっくりと言葉を紡ぐ。
「そうね、だってあれは」

「人類を救う英雄の産声」

その短い人類の歓喜の海は宇宙に溢れた。翡翠の海に同化したいと望んでいるかのように、その後を追う。

聖戦を知る誰もがその言葉を口にした後、決意した。聖戦に生きて、勝利する！

聖戦を知らない人間はその光に包まれた瞬間、儚さと凜々しさの両方を兼ね備えた少女の姿に温かい気持ちになれた。やがて、それは身内に、他者に対する温かい気持ちの原動力になっていく。もちろん、誰一人、それに気づかないが。

幸福は人々を未来へと導く。その光を宿して、白い四枚羽根を広げた白い妖精は翡翠の空を駆ける。

その機体は白妖精剣。そして、その機体の最強モード 星崩しの光。

「リア・レイン発動を確認……。くそ兄様、マニュアルにありません……」

「え、知らないよ。なんで、発動したの？」

「シーちゃん、三人の総感情値をインフィニティーエモーショナルエンジンが支え切れていない。深白の感情値を優先。それでも

七百億。計器の故障？」

深白、心、蒼空は同様のあまり、気が付かない。

一つの悪意を持ったメッセージに。

日本語で、

目覚めはいかがかな陽乃葵、陽乃礼。まだ、君達が生きていなんて予想外だよ。また、一戦を交えるというのか……。そこまでして私の身体の再生と破壊を止めたいのか？ 知っているだろう？
これが一番の美容法だって。

と敵意が伝わ

ってくる。

しかし、それは誰にも伝わらず、メッセージは消えた。

別の情報を表示しているホログラムモニターには、

インフィニティーエモーショナルエンジンの負荷をリアの集合

体で緩和……。総感情値 七百億五千万まで回復。総感情値

未知数……。数値化不能で現状維持。

リア拡散超距離ワープ

星崩しの剣

星崩しの閃光

武装解除します。

「くそ兄様、モード名が白妖精剣 星崩しの光から、リア・レインに」

「みみる！ 聞いてないよ。そんな話！ 操縦方法知らないよ、僕」

「しいちゃん、そら、まにゅある、さがす」

「蒼空が退化したよ！ これ、絶対あの馬鹿のせいだからね。馬鹿天才のせいだからね」

その頃、雛星では

「くつしゅん！ なのじゃ」

「馬鹿に見える天才さんは風邪、引かないはずなので……誰かに悪口を言われたよう……」

「あるる、我の場合は賞賛の言葉なのじゃ。あつ、なのじゃ。心じや。リア・レインの存在を説明し、忘れたのじゃ。きっと、ありがとう、みみる天才と歓喜に打ち震えているに違いないのじゃ！」

「頭が春な人」

第五章 消える意味、在る歓び

第五章 消える意味、在る歓び

>?<

五月七日……全ての有機生物の人生が誰も知らずに、絶望の時を刻み始める。

その絶望は意志を確かに持っていた。離星の自分を観測するジャンヌ・ダルクを迷惑そうに眺める。だが、脅威にならない。脅威になるとすれば

「リアを無限に集約する者……リア・レイン」

その声ははつきりとした人の言葉、日本語だった。リア・レインをリア・レインたらしめる者の言語だ。あつてはならない宇宙に毒しかもたらさないリアの光。それこそが彼 ユニバースホールが沈黙を真に破る合図。焰が静かに広がっていく。ジャンヌ・ダルクの観測を狂わす。血の衣をその身に展開して……。

五月七日 午前 五時三十分。

各組織、宇宙連合（地球は宇宙連合の傘下に四月十日から加入）、アリク連合との聖戦に必要な調整を終えて、エクスカリバーは本国の離星へと飛び立つ。みみるを対象人物、あるを想い人にしたエクスカリバーは普段の二倍ほどのスペックで宇宙を駆け抜ける。いつものように離星へとワープをするためにワープ施設の一つである太陽系ワープタワーへと向かう。一年前には、ワープ装置 スライダーゼロだけだったが、今では地球旅行の需要が増え、休憩所として一つの街が形成されていた。

みみるとあるは休息と食事を得るべく、エクスカリバーを要人専用のドックに入れる。そして、彼女達が向かったのはスライダー

ゼロ 街区だった。その何の他愛もないハンバーガーショップに入店する。

「いらつしゃいませ。二名様で、お席の方は喫煙席にされますか？ 禁煙席にされますか？」

カウンターで接客をしているふくよかな体が特徴的な女性がこやかに対応した。

みみるはあるるの手を引く。そして、無邪気に言う。

「もちろん、禁煙席なのじゃ」

「何言つてノー。あるるがいる場合は妹のあるるを基準に物事を考える。それ、姉の……天才さんの義務。ということで喫煙席へレッツゴー 雛シスターズ」

あのー、と困り気味のカウンターにいる女性店員を余所にあるるは勝手に右側の喫煙席のある方へとみみるごと、歩む。そうはさせないと、みみるは近くにあった無料のドリンクが楽しめる機械にしがみつく。

「嫌、なのじゃ」

みみるの抵抗に軋む機械。機械の上部に位置する硝子から、激しく波打つオレンジジュースが覗けた。みみるとあるるの後ろにはたくさんの客が迷惑そうに立っている。

あるるはみみるに邪悪な笑みを浮かべる。

「まだ、陽乃心に恋愛感情を抱く姉。天才さんのご要望を聞いて、日程にはなかった桜餅学園 クラスIEDに赴いてやった。次、あるるのご要望」

「うむ、そ、それじゃあ、仕方ないのじゃ」

項垂れるみみるを引き連れて、またもや、勝手に左側の喫煙席の一つへと腰掛ける。

みみるとしてはそれはどうしようもないことだった。陽乃心、白妖精剣のパイロットでクラス IEDの中では昨日の戦闘訓練において、扇、蒼空に次ぐ第三位の実力を持つ。その感情値は一般の地球人を軽く凌駕する。それ故、訓練機の初期のエモーションナルブレ

イカー ブロンズに搭乗しても、ブレイカーの命ともいえる刃が彼の感情値に堪えきれず、大破する。それでいつも、扇や蒼空に隙をつかれる。それが敗因だ。

その悔しそうな顔を彼には無断で携帯に撮っていた。みみるは携帯の透明な画面に映る彼の横顔に頬を赤らめる。

「やつぱり、格好いいのじゃ、心。風に揺れるスポーツカット、そこから香るシャンプーの清潔な香り。薄茶色の瞳に見つめられたら、我はいつもの我ではなくなりそうじゃ……」

「姉……」

「いかん、我は威厳を持たねばならぬのじゃ！」

急に立ち上がり、みみるはテーブルを叩いた。まだ、口をつけていなかったオレンジジュースが零れたのには気づかず、まして、周囲の視線と必死に他人の振りをしようと思案する妹の視線には気づかない。

「我と同じく小柄な心は長身（百五十五センチ）の蒼空には合わんのじゃ。いっそ、蒼空から……引き離すのじゃ。エクスカリバーの速度と我の恋する感情値を併用すれば、白妖精剣にだって追いつけないのじゃ。だが、それは」

「姉、犯罪です」

あるるに肩を掴まれて、静かに椅子へと沈むみみるの視線は蛍光灯をじっと、見ていた。それしか、彼女に批判の視線を向けないモノがないからだ。相当、馬鹿恥ずかしい。

「でも、それでも、我は天才じゃ」

「はい、はい、天才さん。メニューから、食べ物を選ぶ……」

>?<

冷やかな空気も慣れるものだ。しばらくして、みみるにはオムライス、あるるにはバラエティー豊かなサラダが卓上に置かれた。それを一心不乱に二人が食べていた時だった。

みみるの携帯が激しく鳴る。あるはそれを咎めようとしたが、すぐに切るだろうと思いい、猶予期間を与えた。姉の表情は平常時の偉そうな顔から、難しそうに眉間に皺を寄せた顔へと変貌した。

サラダが不味くなる顔だ。どうせ、自分の意見を求めるに違いない。地球に来る以前、みみるはあるに最低限の知識的な見解を述べるだけだった。それは一方通行に、まるで自慢のように……。地球で何かがあったのか？ みみるはあると対等に付き合うようになり、父親を廻る恋愛合戦からもみみるは手を引いた。みみるが手を引くと、あるも父親に興味を失った。

みみるが喋っている間、サラダを掬う手を止めて自分に関する分析を行う。気になってしまつと分析せずにはいられない。それがあるの性質だ。だからこそ、本当の天才と肩を辛うじて並べられる。みみるが恋愛感情を抱いている陽乃心に最近、あるも研究対象以上に期待をしていた。聖戦を終わらせる英雄としての期待？ いや、違う。自分も心が欲しいのだ。いや、それも違うな、と眉間に皺を寄せる。

そうか、自分のみみると同じものが欲しい。つまりは 幼い頃、一つのオモチャを共有していた。互いの服を互いに交換して着ていた。あの頃の無邪気な関係に戻りたいのだ。

そう結論付けると、自分の盲目さに深く、深く、幻滅した。それを隠すようにフォークを握り、天井高く上げて、一気に降下。目標物のトマトにフォークは突き刺さり、みずみずしい鮮血を小皿に滴らせる。それに構わず、あるの大口はトマトを嚙る。また、血が流れた。

ぼた、ぼた、と小皿に血痕を残す。

まだ、携帯を使用している姉にとつとつ、妹は照れ隠しにキレる。「天才さん、食事中は携帯を切つて下さい。どうせ、ろくなことのない用件です。エネルギー補給は生きる者に」

「な、なんじゃ、と！ そんな馬鹿なことが……映像がある？ だつたら、早くこちらへと転送するのじゃ！」

「姉！ 何が！」

その姉の驚きは尋常ではないことは、産まれた瞬間から曲がりなりにも家族をしているあるにはそれだけで伝わった。フォークをゆっくり小皿に置く。まだ、トマトはフォークに刺さっていた。

みみるはあるるに視線を合わせる。その顔は泣きたいのに我慢している顔だ。唇を噛み締めている。それが証拠だ。だが、あるるは敢えて、指摘をしない……。

「雛星の半分が切り落とされた。幸い、旧住民区じゃ。あそこにはもう、人はいないのじゃ」

「みんな、第二雛星へと移住した、そういえばそうですね」

そのあるるの相槌を遮るようにみみるが

「えー！」

と声を上げる。

我慢の限界だ。あるるはマナー違反だと知りながらも、みみるの肩越しに姉の携帯のホログラム モニターに見入る。地下深くにあるミミルドームの景色がいつもと違っていた。まるで、その空間は人の体内のようだ。どす黒くもあり、鮮烈でもある赤一色の風景。

その中に深刻な顔をしたスタッフ一同 百五十名がいる。ヘルマンを始め、酒乱のメアリー、三十路で彼氏ゼロのウリア、三キロ太ったとあるるに歯の欠けた笑顔を見せてくれたディビット 第二雛星に恋人がいて来週、拳銃を挙げるんだと歓びをみみるに語っていたカーセフ。みんな、みんな、知っている。そのみんながユニバーズホールに呑みこまれている。

「まだ、少し消えるまで時間があるようです」

一同を代表してヘルマンが硬い表情、硬い声質でみみるとあるるに語る。

「リアか……リアの集合体の進化である人類が無機物質よりも呑みこまれるスピードを遅くしておるのじゃ！ 早く脱出するのじゃ。

エクスカリバー フウガで奴の身体を刻め。あれはインフィニティ
ーエモーショナルエンジン搭載機じゃ！ それを利用すれば」

ヘルマンはそれには肯定も、否定もせずは無視して話を進める。彼の顔には諦念と決意が表れ、それがきりつとした顔を形作っている。分厚い唇からふう、と息が漏れる。それを皮切りに彼は話を再開する。もう、誰にも遮らせないと目がぎらついている。難いの良い体の男はいつもの可笑しいくらいな美少年の甲高い声に戻る。

「エクスカリバー　フウガ、フランジュベルグ　エンオウの二機は地球に到達できるようにプログラミングしておきました。みみる様の真インフィニティーエモーショナルエンジンと、ある様の短距離ワープ装置　ルミミがきつと、任務を遂行することでしょう。作り手の性格はともかく　」

みみるとあるは黙って聞くしかなかった。彼らの最期の想いを。彼らのなけなしの勇気を。彼らの全身の震えを。彼らの引き攣った笑顔を。

彼らの歴史の終焉を。いや、違う。きつと、彼らは次に繋がる子ども達に人類の歴史を渡すべく自らの死と今も闘っているのだ。

だからこそ、みみるは偉そうに強気な表情を。だからこそ、あるはタバコを口にくわえ、いつもの報告を聞くようなだるそうな表情を演出した。

「最期になりますよ、完成しましたよ、聖剣の刃の地図が。それは地球のアースガーディアンにデータ送信済みです。アカエル様から受諾を一時間前に確認しました。みみる様、ある様、どちらかがこの刃に名称してください。コードネーム　エイガでは華がないでしょ？　私達はその名を墓石に刻み、消えましょう」

あると、みみるはその声にたいしての、回答は一つと言わんばかりに口を開く。

「お前達が決めるのじゃ。自分の墓石に刻む名くらい」とみみるが涙声で言い

「ヘルマン達が決める……」
あるがそれに続いた。

既にヘルマンだけになっていた。赤い空間でヘルマンの豪快な笑

い声が携帯越しからでも鮮明に聞こえた。まるで陽気に彼が大好きなハンバーガーとビールを喰らっている時の声だ。

「では、お言葉に甘えて。　ディア　チャイルド」

「良い名なのじゃ」

「ですが……意外にヘルマンはロマンチック君だったんですね。あの目測が初めて外れました」

ヘルマンの両足は消えかけていた。その足からリアが放出されている。それは彼らしい優しさに溢れた銀色だった。痛みはないのだろう。ただ、恐怖に分厚い唇を震わせている。そして、なんとか、言葉を紡ぐ。

「みみる、あるる、ありがとう。人類を、自然を、星を、宇宙を救ってくれ、どうか」

それがヘルマンの最期の言葉だった。彼は消しゴムで消されたように消えた。銀色のリアもそれと同時に消えた。

だが、微かに……スタッフ達全員の合わさった愛しい声が聞こえる。

みみる、あるる、君達は生きる。そして……未来を子どもに。魂は常に二人の姫の傍に、と。

みみるは赤い空間しか映らぬ携帯電話を切った。そして、無言のまま、二人は精算を済ませて、エクスカリバーに搭乗した。

みみるは我慢できたのだが、妹がすぐに泣きたいのを互いの肩を刺しているチューブ　エンゲージチエーンから伝わる感情によって敏感に感じ取った。

「あるる。我も泣く、なのじゃ」

「姉？」

「彼らのために強くなる。その前準備じゃ」

「涙を……ですか。この悔しさを刻むために？　それでしたら賛成……」

二人の泣き声はまるで母親を捜す赤ん坊のように容赦がなかった。

その日の晩。雛みみる（宇宙連合）、アrik姫（アrik連合）の間で地球　アースガーディアン内にて、公式な会談が緊急に執り行われた。それは、雛星がユニバースホールに飲まれたことを危険視してのことだった。結果、聖戦の最終段階　決戦を行う道を両者は選択する。

五月八日　午前　十時三十分。

宇宙連合側のユニバースホール対応戦力が招集される。それは校内放送によってだった。

「クラスIED、UHの件で至急、話があるのじゃ。今から呼ぶ者は」

そのみみるの声を聴いて、特別クラスではない一般の生徒は口々に「誰だ？　あの小学生みたいな声は？」「ったく、また、誰かが放送室ジャックしたよ。先週も特進の飛び級で入った子……名前なんだっけ。ああ、陽乃深白ちゃんだ。その子が陽乃心に愛の告白してたぞ！」「えー、まじかよ」

との声を発する。

それを面白がる人物がいた。もちろん、表向きは新米教師、本当はクラスIEDの新米教官　河霜扇だ。彼女は眼鏡をワイシャツで拭きながら、隣を歩く表向きは秀才揃いの特進クラスの生徒、本当はクラスIEDの新米パイロット　陽乃心の腕を肘で軽く突つつく。「おい、呼ばれてるぜ。僕が君達の話に乗ってる深白たんのくそ兄様だよって言いにいけっ」

「そんなの、できませんよ。扇ちゃんは教育者になってからも僕を虐め続けるんですね」

「馬鹿、前にも言っただろう？　俺はお前をMの戦士として教育してるんだって！」

「そ、そんな恥ずかしいことを廊下で言うなど、ナンセンス極まりないですよ。今は放送に集中すべきです」

「妄想主義者？ の自称が聞いて呆れるぜ。とんだ雛ちゃんだ」

「なんとも言うていただいても結構ですよ、教官」

そう、さらりと窺^{たしな}める双嵐朝。いつものリクルートスーツではなく、ちゃんと制服を着ている。まだ、慣れないのか？ ひらひらのミニスカートを何度も整え直す。

その様子を見て、扇がにやりと我に秘策あり、とばかりに悪巧みの笑みを浮かべる。それを遮るように陽乃心は朝に同意する。

「ちゃんと話を聞かないと、きつと、みみる、怒りますよ。星間問題に発展しますよ。前だって、あるのおやつを食べた、食べないでみみるがあると喧嘩して、それがそのおやつを製造していたメーカー倒産へと誘ったじゃないですか。みみるの強制力で……」

誰もがその時、みみるが吐いた大人は汚い的な言葉を思い出す。

『どうじゃ。これがみみる。これがみみるの力なのじゃ！ おかしを無くせば、あるも怒ることないのじゃ！』

その調子とまるで代わり映えのない偉そうな声が廊下中に響き渡っている。

「陽乃心、陽乃蒼空、陽乃深白。そして、彼らの教官 河霜扇、真夏梅雨（まなつ うめう）。放送室で我が待ってやるのじゃ。さっさと来るのじゃ」

真夏梅雨と聞いた瞬間、まだ、給食のおばちゃんというキーワードが心の脳内を支配する。あんなに優しく蒼空に付き添って、給食を一緒に作ってた人が……実はその裏では白妖精剣のような雛星にとって機密事項を内外に知られないように暗殺を主に請け負っていた怖い人なんて……。

心は溜息を吐いた。世も末だな、と。その横で朝の歩が止まっていた。

「どうしたの、朝ちゃん？」

「呼ばれなかつたんです、あたしの名前が何故」

「当然だろう？ 陽乃一家にはあれがある。俺と従姉の梅雨姉貴には深夜に届いたエンオウがある。あれ無しでUHとは遊べねえだろ

う？」

えっ！ あの虫も殺さないような優しい表情の元幼稚園の先生と、虫を残虐に羽根を一枚、一枚ともぎ取ること濃厚な河霜扇が血縁関係？ と思わず、心は首を傾けた。

その疑問すら、吹き飛ぶ荒い声がクールな表情だった朝の口から飛び出す。

「ですが、私は！」

「馬鹿！ 死にてえのか」

必死の形相の朝を扇の怒声がいとも簡単に跳ね飛ばす。

朝は解っていた。理性が理解しても……心を想う気持ちが彼女を奮いたたせる。静かに。だが、心臓が熱く鼓動するくらい情熱に燃えて……。

扇はその言葉を朝に対する回答として、心の背中を歩け！ の意で一蹴り入れて渋々、歩き出した心と共に朝の視界から消える。

残された朝はただ、一般の生徒の喧騒に紛れて存在が稀薄に染まるしかなかった。だが、それでは……朝の想いは満たされない。

そんな朝に宇宙連合関係者と共に、後に下された任務が同盟国の安全確保だった。朝は地球人の安全確保に回ることになり、上司は宮御継だった。

>?<

五月九日 午前 七時十分。

桜餅学園に去年、建設されたIED専用ドックでは白い妖精の鼓動が聞こえていた。鏢に羽根を得た聖剣が咆吼を上げる。勇ましい叫びに呼応するかのようにドックの扉が開き、透き通った青が広がる。

その白き妖精内部には、透明な膜　ディアシールドに守られ、互いの肩に刺さるチューブ　エンゲージチェーンにより結ばれた陽乃心、陽乃蒼空、陽乃深白がいた。

「蒼空、ディアチャイルドの装着の手順は？ 昨日の夜、復習したよね？ 覚えている？」

「しーちゃん、心配性。まるで蒼空がキーボードでの深白ちゃんのサポートができないみたいだよ。双対象人物の自我が壊れないように、ディアチャイルドの出力を操作する！ そうでしょ？」

「いいえ、違います。ママ」

これが父親の間違いだったら、深白は言葉の限りを尽くしてけな貶しただろう。彼女はいつも、父親としてではなく、格好いい深白の愛を受け止めてくれるお兄様像を心に持たせたいようだ。

「あ、あれ〜」

蒼空が目を丸くさせる。余程、自分の理解度に自信があったようだ。

「ディアチャイルドが壊れないように……リア・レインの光に刃の素材 ヒノフェアリーが堪えられないから、刃に一定以上の感情値が及ばないように操作する」

そう、淡々と深白がママに教える。その顔はなんとも得意げだ。きつと、ママに教えることが嬉しくて仕方がないのだろう。

「じゃあ、なんで白妖精剣がリア・レインを発動できるの？」

と蒼空が当然の疑問を持つ。宇宙最強の金属 ヒノフェアリーは白妖精剣の外壁などにも使用されているだろう、と考えたからだ。

心もそれには賛同し、肯く。

「ん〜、気合い？」

「くそ兄様の頭はぼかぼか日和。いつも、と同じで安心です」

深白の言葉に賛同の笑い声が響く。機内にいる蒼空、深白以外にも中空に浮かぶホログラムモニター越しに、

エクスカリバー フウガのパイロット 雛みみると、雛あるる、

フランジュベルグ エンオウのパイロット 河霜扇（有機物質感

情士 第一位 諸刃の刃）と、真夏梅雨（有機物質感情士 第一位

瞬即の殺し手）、

エデンのパイロット アカ・エル

の笑い声を響かせ、白妖精剣は一瞬で宇宙へと舞台を広げる。それを追うように全身を炎に纏い、鏢に鬼の形相を、刃の他に左右に角を持ったフランジュベルグ エンオウが続く。そして、黄金の粒子の竜巻をその身に纏うエクスカリバー フウガが飛翔し、それを追うように不死鳥 エデンが空を翔る。

それを桜餅学園上空に位置するブレインウェーブを周囲五百キロメートル展開中のアースガーディアン 地球大使室から見守る双嵐朝。その唇は悔しさに結ばれていた。前髪によって隠れている片眼がぎらついていて。そんな敵つい視線にも関わらず、いつものきっちりしたリクルートスーツをしっかりと着こなしていた。

それを目で追っていた宮御継は、

「難儀なものだね、あなたも」

と、溜息混じりに朝を気遣う心情を示す。

朝は俯いたまま、その心遣いを突き放す。

「あなたは後方支援。陽乃財閥から提供された超巨大戦艦 ノアの箱船で地球の住民を可能な限り……逃がす係」

「……」

「逃げるみたいでやだ？ ん？」

「そうですね。あたしだけ、闘えない……。確かに、レゾナンスは攻撃は中途半端、防御は対戦艦レベルなら機能を果たす……。それだけのエモーショナルエンジン搭載機です」

「違うわよ、朝ちゃん。私達も闘うの。リア・レインのディアチャイルドはインフィニティーエモーショナルエンジン事装填する実質上無敵の聖剣の刃。でもね、ユニバースホールは未知数。だから、それぞれができることをするのよ」

そんなのあたしは望まない！ と朝の瞳が震える。

「ですが……そんなの！ ちっぽけですよ！ 幾ら、あたしがデリュージョン イデオロジストだからって許容できません。心はあそこにいるんです、あたしは、あたしは……」

「女の子、で生き残れるほど、聖戦の最前は甘くない！ いい加減、

成長しなさい。あなたの初恋は終わったのよ、朝。もう、心君と肩を並べる必要なんてない。自分の器を知りなさい」

はつきりと弱々しい女の子の瞳を見据える紺。大人びた和服姿も相成って、朝など、まだ、十七年しか生きていない女の子だと嫌が応にも教え込まれる。そして、萎縮してしまふ。

「……」

「あなたは優秀なんですから、フランジュベルグ エンオウやエクスカリバー フウガ、白妖精剣 エデン搭載型、エデンの予備のエンジンや刃の部品を護衛する側に回りなさい」

事務的な冷静さを伴う硬い声は朝の萎縮をさらに加速させる。

「……」

「それほどまでに、あなたの初恋は大切？」

ふと、いつもの柔らかな紺の声質に戻り、俯き、今にも泣きそうな少女に尋ねる。それは朝にとって突拍子もないことだった。びっくりとした表情がそれをよく示している。

だが、彼女の萎縮は魔法のように溶けた。それは幼い頃から、確信がある事柄で、何度も悩み、成功を夢見た悪友のようにいつも、そこに在る感情。胸の奥底が華やぐ。

「はい、今でも……あたしは初恋してます、心君に。レゾナンスでその想いと一緒に飛んでいます」

「あら、あら、心君は本当に幸福ねっ。宇宙中の男の子からお腹を刺されても文句が言えないくらいに」

「だったら 賭けましょう。その想いに。陽乃家の裏で創られた最強の機体 レゾナンス・フィールドを。一時間前に完成ほやほやよ。ちよっと、待ってて」

朝に背を向けて、扉の取っ手を握り締めた紺を戸惑いの声が止める。

「でも、昨日、ブリーフィングの通り。聖戦の最前はクラスIEDの中でも、インフィニティーエモーションナルエンジン搭載機だけが出撃するはずじゃあ」

「ふふーん」

と、鼻歌が混じった自信の表れで朝に応えるだけでそれ以外、喋ろうとしなかった。当然、朝には意味不明だ。

「え？」

「待っててねん。ちよつと、陽乃財閥　チキユウ部門に連絡してくる」

「地球部？」

何もかもが解らない朝を残したまま、継はそのチキユウ部門とやらに連絡をしに行く。しーんとした空気の中でその場を決死して動けない家具達と朝は同一のものであるかのように完全に動きを止めていた。頭だけが仕切りに不安な展開を幾つか、並び立てる。その度によく、見ると……朝の喉は微かに上下していた。

>?<

「凄い何？　これ……」

そう眼下を覗き込んで感嘆の声を上げる朝。はなおか花岡動物園に連れて来られた時もびっくりしたが、動物園の地下に巨大な空間が広がっていたのだ、無理もない。その空間に一つの街が健在していた。外にあるコンクリートジャングルとは違い、いうなれば、ここはクリスタルジャングルだ。ただし、ただの鉱物ではない。特殊金属ヒノフェアリーと彼女は推測した。

煌びやかな光の反射によって、互いの建物に灯りを贈る。その小さな営みが大きな営みへと変質すると、地下とは思えない光に満ちた空間ができあがる。まさにそれは光が織り成す芸術だった。

朝と継を運ぶロープウェイは静かに継が言うには、始まりの駅へと目指す。

「驚いたでしょ。陽乃財閥は太古の昔から存在していたのはみみるちゃん達の話で理解しているね」

朝と対面して座る継が子どものように純粹にそう言った。そして、

朝が驚く顔を再度、確認してから話を続ける。

「そう、太古の昔から、雛星よりも前にチキユウにいる時から、ユニバースホールに闘いを挑んできた唯一の一族。リア・レインは正統な一族の奥義って解釈が正しいのよ。デジタルなものではなく、アナログね。人間そのもの。リア・レインの正体はリア。感情の原子の結び手となる正統な陽乃の一族の人間の感情が高ぶり、周囲の人間と、完全共鳴した瞬間にリアが結ばれていく。その結び手の力が強いほど、リアは協力的になる。有機物質。つまり、人間の心が持つリアは」

「ちよつと、待て下さい。動物や植物だって」

「あら、あら、IEDでまだ、習ってないのね。驚いちゃだめよ。人間は偶然、リアを獲得して無機物質から逃れた。ユニバースホールが操作している無機物質からね」

「な、じゃあ、神だって言うんですか？」

それに継は首を横に振る。

「沢山、ある宇宙のシステム。無機物質の進化体であるユニバースホールは無数に観測されている。たまたま、私達の住むユニバースホールがたった一体だけよ。リアは無機物質の運命に干渉する力を少しだけど、持っていた。その力が人間を文明人にしたのよ。それを増幅し、兵器にしたのが、エモーショナルエンジンのシステム。みみるちゃんは馬鹿天才だから、そんな理論を飛び越えて、エモーショナルエンジンを開発しちゃったけどね。あれには、全部の星を観測している私達。陽乃財閥。チキユウ部門も驚いちゃった。焦ったわ。リア・レインの奥義を産まれながらに会得できる組み合わせ、蒼空ちゃんと心君の二人を引き合わせるんだもの」

その存在がああ可愛いらしい女の子、心と蒼空の子ども……そう思うと、朝はロープウェイのどこでもいいから、破壊したくなかった。特に窓硝子なんて、良さそうだと舌なめずりする。

その視線に気づいた継は腹を抱えて笑った。

「だから、悔しかったので細工してやりました。白妖精建設時に、

陽乃財閥から全宇宙に提供していたヒノフェアリーではなく、鏡面きやうしめ金属きんごくをヒノフェアリーと偽ってみるに与えました。インフィニティエモーショナルエンジンの開発成功記念だつてね」

継が口を閉じる。丁度、ロープウェイが始まりの駅へと到着した。そこには人が溢れていた。人種を問わず、年齢を問わず、各々が外と同じ生活をしている。子どもをあやす母親もいれば、仕事帰りの汗まみれの青年もいれば、ランドセルを背負った少年少女もいるし、月刊陽乃家という漫画雑誌をベンチに座って読んでいる中学生もいた。

「みんな、陽乃に仕える技術者や、その関係者よ」

その人混みの中を掻き分けるように、コックの恰好をした小さな女の子が近付いてきた。背は深白と同じくらいだろう。気の強そうな眼光鋭い少女は当たり前のように継の隣で立ち止まる。栗毛色の髪は腰まで流れていて、その髪に癖はない。

その少女の正体を話さずに、継はまずは目的の場所に行こうと提案し、少女と朝がそれに賛成する。

その目的の場所は他とは違い、暗い教会だった。ただ、普通の教会とは違い、中身がなかった。椅子もなければ、祭壇もない、パイプオルガンもない。壁や床は真っ白だ。

中央へと三人が進むと、急に継が喋り出した。

「紹介するよ。陽乃財閥の重鎮の一人、陽ひの乃すず」

「説明は省くよ。僕の存在はそう、重要じゃない。恥ずかしがり屋なんだ」

「その服装と……その眼光の鋭さで？　ですか……無理がありますよ」

「あら、あら、言われちゃったね」

「僕の個人的な趣味嗜好をずたずたにしている時間は残念ながら、僕を含めた人類に有意義な時間を与えません。ごらんなさい」

そう、この場には滑稽なコックさんの服装のすずが静かに言った。強気なオーラを全身から発しているのに。

「ホログラムモニターを」

と、さすがさも、普通だとばかりに言う。すると、三人の前に映画館のモニターの二倍はあるホログラムモニターが出現した。そして、そこには広大な宇宙と、白妖精剣を始めとした数機の自軍機、友軍機が確認できた。それをモニターが穴が開くくらいに見つめる朝。

闘いは既に始まっていた……。

>?<

五月九日 午前十時。

そこには人の住める惑星がなかった。ただ、広大に広がる宇宙空間が確認できる。確認した瞬間、エクスカリバー フウガの内部にいるみみるとあるは悔しさを隠そうとせず、全てを表に出していた。その顔は焰のように真っ赤になっていた。

心は同情の声を掛けてあげたかったが、何をどうしたら……良いのか？ 解らなかった。自分もそれとは種類が違うが、感情のやりとりのない痛みを感じた記憶がある。でも、これは本当にどうしようもないのだ。

だから、陽乃心は、陽乃蒼空は、陽乃深白は、二人を 人類を 悲しませる存在を自分にできる最高の嫌悪感を瞳に乗せて、それを睨む。

それは、無機物質の塊であり、太陽に似ていた。真っ赤に彩られた外観は、数日前にはそこにあつたはずの雛星の血を全て、絞りとつたようだ。

「……早くやるのじゃ、我はヘルマン達の仇を討つ」
「趣旨が違いますが、それにはイエス」

低い二つの声、みみるとあるが獲物に今すぐ、飛びかかりたいと、白妖精剣、正確には陽乃心を急かす。この部隊の長はみみるである。だが、事実上、ユニバースホールと対峙できる第六世

代の旧型 白妖精剣以外にない。

リア・レイン。無機物質を変えていくわずかな力の集合体が人類のたった一つの剣だった。

>まあ、そう急かすな。リアの集合体の進化体の皆、皆様<

「何？ ユニバースホール内から音声を直で、だと」

「完全に機体を擦り抜けて聞こえてくる」

黒妖精剣に搭乗しているアリス・レオ、アリス・カノンが驚愕に震えた。急いで、カノンがシステムチェックを開始する。細い手がキーボードをピアノのように扱う。

「システム エラーを認められない？ そんな」

「こつちもだ、ちくしょう。なんだ、この訳の解らない技術は！」と怒鳴る扇。

「苛立つても仕方ありません、ですが、まきぐそな事態」と静かな怒りを燃やすあるる。

「アカエル！」

戸惑う仲間達をモニターで確認しつつ、陽乃心はただ一人、冷静に思考を巡らせている蒼空に似た女性 アカエルを呼ぶ。その女性はその呼びかけでこちらの意を理解する。

「エデン、分散」

アカエルの言葉がエデンを分散させる最後の承認となる。不死鳥の各部は白妖精剣を取り囲む。鏢の上部に頭部、白妖精剣が二枚の羽根を閉じた箇所我真つ赤な羽根、エデンのエンジン エモーショナルエンジンを完全停止して不死鳥の胴体が白妖精剣の柄に装着される。予備にエデンが積んできたインフィニティーエモーショナルエンジンは白妖精剣が装備している刃 デイアチャイルド内部が開き、そこに収納される。これで装填できるエンジンは七つになった。

「七回で決める。そうだよね、しーちゃん」

蒼空がデイアシルドから手を伸ばして

そこに硬い感触が伝わる。それは蒼空が意図していなかった感触。

その正体を当然、目で捉えている蒼空はむっとした。誰にでも解るようにわざと風船のように両頬を膨らませる。

その正体は、エデン内部から短距離ワープしてきた生命維持ポットネバーだった。その内部に満たされている液体に沈んでいる蒼空の母 アカエルはにこやかに蒼空を見て、微笑む。

「ああ、そうだな、蒼空。一回で決めるぞ、深白の時のように。帰ったら、夜明けの太陽に二人の裸体を曝し、重なり合おう。二人目、つくろう、蒼空」

「って、偽造しないで下さい、僕の言葉を！」

「そもそも、くそ兄様はそんな事を望んでいません……。深白との子どもを望んでいます」

「いや、僕は……」

あまり、笑顔を見せない深白がママ用の笑顔のパパに綻ばせた。

その笑顔で心は自らの理性を一度、置き去りにしたなんとも無責任な言葉を叫ぶ。

「ああ、もう！ 帰ってきたら蒼空の子どもでも、深白の子どもでも、二人の子どもでも、つくろう。なんたって僕は君達を愛しているんだから」

「あい！」

「うん」

その暖かい雰囲気を押されて、深白がリア・レインを発動させる。深白の白い肌が翡翠色に輝いていた。

深白は願う。幸福な未来を、家族の未来を、救うための光を。

一度、宇宙に拡散されるはずだった翡翠色の輝きはそのプロセスを踏まずに、ディアチャイルドに全て、吸収されていく。

その過程で、激しいアラーム音が鳴り響いた。

「総感情値 七百億オーバー……。想定されている総感情値の量以上！ 深白、リア・レインを解除してもう、充分、ディアチャイルドのリア倉庫に貯蓄された」

「はい、ママ」

深白はリア・レインを解除するために深呼吸して、一気に拡散された自分の感情から自分の心を引き抜いていく想像を構築した。それは一瞬で成果として現れる。翡翠色に輝いていた全身が白い肌に戻っていく。

「ふうー。ママ、ディアチャイルドの貯蓄は？」

「深白」

「くそ兄様には聞いてないよ」

感情を殺した顔で言われた鋭い一言が心を抉る。精神的にダメージを受けた心を見て、アカエルは素直になれない女の子してる、と深白に対して感想を抱いた。

その横で、蒼空がモニターに映る情報を読み上げる。

「リア倉庫に百億マター、留まっている。許容限界ぎりぎり」

その言葉を聞いて深白の眉間に皺が寄せる。自分が世界を救うんだ！ そんな焦りを感じていた。それは脅迫概念に近かった。幼い少女はその感情を知らず、ただ……苛立つ。怯える。

それを誰よりも理解していたのは、深白の大好きなくそ兄様だった。ディアシールドから抜けだして、深白の頬に光る涙を指先で丁寧に拭う。そして、泣き虫な娘の顔と対面した。

「いいか？ 深白。自分、一人で闘うんじゃないんだ。偉そうなみみる、まきぐそと女の子らしくない数々の言動を見せるある、くそ兄様を昔から楽しく虐める扇ちゃん、敵同士だったアリス兄妹、いつだったか……深白に人形劇を見せてくれた梅雨さん、お前のママ……蒼空、お前の祖母……アカエルさんも闘う」

「でも……」

「それだけじゃないよ。地球に残ったみんなを守る役割についているくそ兄様の親友 朝ちゃん」

「それはくそ兄様が」

「知っているよ、彼女が僕を今でも好いてくれていること。でも、蒼空と出逢ったから、土壇場でヘタレちゃう昔の僕と同じ性格の深白がここにいる。それだけで良いでしょ？」

「……」
「闘っているのは、宇宙連合の人も、アリク連合の人も……そうさ、世界中のみんながこんな中途半端な場所で途中下車なんてしたくないって思っている。僕もそうだ。蒼空だって後、数ヶ月の人生の旅路だけだ」

蒼空と心が視線と視線を交わし合う。二人は優しく微笑んだ。

「しーちゃんの言う通り、蒼空は途中下車は嫌っ」

「ママ……。深白はずっと、怖かった。ここで死んじゃうのも、ママがここじゃないとここで死んじゃうのも」

深白が本格的に泣き出した。それに困った蒼空は深白の背中を包み込んだ。暖かく、優しい香りが……。深白の涙を止めた。ひくっ、ひくっ、喉を鳴らしながら、母親の顔を、父親の顔をそれぞれ、二度見する。

「人はね、いつか死んじゃう。でも……。ね。ほとんどの人が幸福なことにその過程や、最期を選ぶの。自らの意志で。蒼空の場合はしーちゃんや、深白ちゃんのおかげで幸福な最期を迎えそう。あれを倒せば。ねっ、簡単でしょ？」

「うん、簡単……。あいつを倒して、ママの　ううん、みんなの人生を幸せにする。みんなの意志で、深白の意志で」

深白が決断する間に、白妖精剣 エデンをエクスカリバー フウガが前方で、フランジュベルグ エンオウが左側で、黒妖精剣が右側をガードしていた。

白妖精剣 エデンのディア チャイルドの聖剣が翡翠色の光を纏う。

>いきなりリアの集約か。私の声に過剰反応することもない。かつては、無機物質だった人類の名残だと考えてくれればいい。さて、私を追い詰めた陽乃葵と陽乃礼に敬意を表し、ささやかなハンデとして今まで、君達に時を与えていた。その気になれば、いつでも滅ぼせる存在なのだよ。自分が頂点にいと錯覚した愚者達<

それには誰も耳を貸さなかった。深白の決断がみんなの決断を促

していた。

その決断の焔に薪を放る。それを成すのはみみるの気高き叫び！
「作戦通りに行くのじゃ！　まずはエクスカリバー　フウガとフランジュベルグ　エンオウを奴の攻撃の的に晒す。その合間を縫って黒妖精剣、白妖精剣　エデンが突撃。一撃で決めるのじゃ。こつちの装甲が持たないから、なのじゃ！」

それに応える鬨の声。

白妖精剣　エデン、黒妖精剣は通常飛行で駆逐目標　ユニバー
ス　ホールを目指す。それを追い越す短距離ワープ装置　ルミミを
搭載した二機。

短距離　ワープによって、まるでフランジュベルグ　エンオウと
エクスカリバー　フウガは神出鬼没に、どこへでも出現する。効果
がないと知っているが、みみるとあるはエクスカリバーの刃を開
いて、砲身から光の奔流　セイント　ブラスター　クラスリミッ
トを容赦なく、ユニバーホールに打ち込む。

「効果がないと知っていても！」

「真インフィニティーエモーションナルエンジン搭載機の第七世代、
出力は総感情値　百万マター、なのじゃ。さらに圧縮解凍する新シ
ステム　オーバー　リアによって総感情値　五百万マターなのじゃ
！」

「雛王家の底力。味わえ、フルコース」

さらにあるがセイント　ブラスター　クラスリミットを連射と
同時に柄から無数の星型　スターカッターを放出する。その鋭利
な刃先が迷い無く、ユニバーホールへと突っ込む。

それと同時にフランジュベルグ　エンオウが動き出していた。

「閻魔よりも恐ろしいぞ、俺達が組んだらな！」

「ふっふふふ、この空気、やっぱり、和ます。はいはい……」

「強者の夢の跡すら、残さず、焔が呑みこむ。顕現、狂気の業火
の剣」

フランジュベルグ　エンオウから、扇と梅雨の禍々しいまでの叫

びが聞こえる。それは、自らの刀身に聴かせる戦歌。その歌に活気づけられたかのように刀身は赤く燃える。周囲に浮かんでいる隕石群は見るも無惨に蒸発し、溶けていく。隕石が溶解してできた道を悠々とフランジュベルグ エンオウは進む。その高速で動く焰はまるで燃え尽きることはない流星のようだ。

その流星はユニバースホールを切り裂く……。それはエクスカリバー フウガのクラスリミットの奔流のまさにその一瞬、後だった。だが、何事もなかったかのようにユニバースホールは赤い巨大な塊であり続ける。

ユニバースホールからは嘲笑が聞こえる。まるで人間がその中に存在するみたいだと、誰もが焦りをみせる。

>次は、私から攻撃をさせてもらおうか？ 人間……リアの集合体よ、どんなに自分達が矮小なのかをその身に痣として刻め……< その硬質の音が響き終わるのを待たずに、戦局に大きな変動が訪れる。

エクスカリバー フウガの全身を包むように回転しているリアの竜巻を押しつけて、柄を激しく、黒い手に殴りつけられる。その衝撃にみみると、あるるの身体は若干、振動を感じる。だが、ディアシールドの防御力の前では無傷に等しい。

無駄なのじゃ、とみみるが口を開く前に第二波、第三波、第四波 第七十波がエクスカリバー フウガのありとあらゆる箇所を傍若無人に殴りつける。蓄積されたダメージが各部に凹みを生じさせる。

内部を激しい上部、左右、下部の揺れに晒される。

「どうなっているのじゃ、モニターを見る余裕もないのじゃ」

「天才さん、恐らく、ユニバースホールは宇宙全体の無機物質を操ることが可能」

「ならば、何故？ 我らの機体は正常なのじゃ」

「それは……リアに、有機物質に干渉しているため」

「そう……じゃったな。頭もゆらゆらでめっちゃめっちゃ、なのじゃ……」

…おええ！」

あまりの揺れにみみるは胃の中にあるものをぶちまけた。朝食に食べたサンドの具がまだ、消化しきれずに床に飛び散った。ピーマンがそのままの形で残っていた。それを目ざとくあるの目が捉える。

「我慢つてもものが昔からないですね、天才さん。あ、今もピーマンを否定してますよ？ ピーマン食べないと胸、ノーです」

「喧しいのじゃ……我はいつも、素直なのじゃ！」

「威張ること、それ？」

と、あるるがキーボードを操りつつ、無表情に非難というエッセンスを加えて言った。

あるるがどんなにユニバースホールに対策を講じようとしても、クラスエンドレスの使用が妥当と、モニターに表示される。それでは……と頬から熱い汗が流れる。

そのモニターを覗いていたみみるが口中の甘い唾液を全て、呑みこんでから重々しく口を開く。

「あるる、早まるでないのじゃ。セイント ブラスター クラスエンドレス発動後は……我らに未来はないのじゃ。まだ、希望はある、なのじゃ！」

一方、フランジュベルグ エンオウはユニバースホールの周囲を回りつつ、計画性のない軌道に乗って、燃えたぎる剣で何度も斬りかかる。だが、空気を切るよりも虚しい手応えだけが刃先にある。

「くそっ！ 俺達の機体では適わねえつてのが解っているのに……こんなに苛つく！ ああ、苛つくね！」

「うーん、幼稚園の年少さんみたいに駄々をこねない、扇さん」

「でもよお！ 梅雨姉貴！」

「忘れましたか？ 私達の目的はユニバースホールに飛びつくウザイ蠅さんです」

と、梅雨が余裕の微笑みを浮かべる。だが、その微笑みも一瞬にして凍り付く。

>本当にウザいな、君達は。ならば、最初の犠牲者は君達だ。順番なんて、関係ない。無機物質以外の異物は排除する。それは我々の共通見解だ<

「お前がそうでも、俺達は俺達が主役の映画を一人、一人、生きてんだあ！ 勝手に幕を下ろすなよ！ エセ太陽！」

「蠅だつて、刺す程度はできます」

「姉貴！」

「刃の限界以上に熱度を上昇させます。もし、ディアシールドも崩壊したらすいません。一緒に死んでね」

「もちろん！」

二人の同意が成され、同時にキーボードを操作して、エンターキーを最後に押した。その瞬間、フランジュベルグ エンオウは真っ赤に燃える。真っ赤な鬼の口から炎が放出される。みるみるうちに外部が焦げていく。

だが、それには気にせずに、扇と梅雨の

「いけええええええええ！」

「これが最期の連続攻撃です」

「刃が続く限り、切り刻む！ 奥義 むげんえんばざん 無限炎波斬！」

その名に相応しく、刃先と同じ位置まで伸びた鋭利な二本の角と、エンオウの名に由来している炎王の刃でユニバースホールを切り刻む。

炎王の刃は刃こぼれを細かく、生じさせる。だが……その成果はある！

「ユニバースホールが裂けた！」

と、歓びの一声を扇が上げる。

>それがどうした！ 蠅は払えばいい！ ただし、私の場合は蠅には死を確実に与える<

その言葉を聞いた途端、視界が真っ赤に染まった。自分の腹を影のように薄い刃先が貫いていた。腹から跳んだ血はフランジュベルグ エンオウの内部を突き刺す無数の薄い刃にかかる。

だが、扇は苦痛に喘ぎながらも……希望はある、とほくそ笑む。
梅雨も同じように、黒い刃に肩を射貫かれながらも、浅い息を繰り返して、希望はある、とほくそ笑んだ。

> 何故？ 笑う。その一撃は確実にお前達を死に導くはずだ！ 何故？ 笑う<

「個性の……うっ。ない没個性に……はそれは。あう。解らねえぜ！」

「はあ、はあは、本当に、ヘタレさんなのに最期は決めてくれる！」
二人は翡翠色の閃光を見た。その閃光こそが希望。

> な、なに <

> ? <

その閃光 希望をみみる、ある、扇、梅雨が目にした六分前。
焔を剣に帯びたフランジュベルグ エンオウト、リアの竜巻を巻き起こし進むエクスカリバー フウガが先行したのを確認した時から、ある種の疑問を心は抱えていた。

何故、タイムラグもなく、何のシステムも使わずにユニバースホールは僕らに直接、声を届けることができた？ しかも、言葉の端々から、前から人類側の行動が筒抜けだった？

「いや、違う。あいつは僕達をずっと、観察していたんだ……。だが、何故？」

> リア・レインを継ぐ者、忘れてしまったのか？ 人間は不便な生き物だ。宇宙へと還元され、また再生される無機物質の座を自ら、捨てたのだからな。我を知った瞬間に<

「当たり前だ！ 僕達はお前のために生きてるんじゃない！ コマにされてたまるか！ そうか……」

無機物質を操る能力のように見えるが……扇達と闘っているユニバースホールは違う。あいつは無機物質の集合体＝宇宙。個であり、全でもある存在。恐らく、リアを体内に取り込んでいる人間 有

機物質以外全てがユニバースホルの手足。

ならば！

>無駄だ。その程度のリアでは私の存在を確信することすら不可能だ<

不気味に頭の中に直接、響く声には耳を貸さない。ひたすら、キーボードを打ち続ける。あれの応用をすれば　きつと！　心はインタキーを少し、強めに押した。

「格好いい兄様。リア拡散。無機物質集合体　ユニバースホルの全影響を遮断します。リア拡散超距離ワープ、いつでもほぼ、無限に使用可能。モード　リア・レイン　エデン」

ちよつと、深白がびっくりしながら、心の方を真ん丸お目で見つめる。心は少し、得意げにピースサインを娘に送る。娘も父親の行動を賞賛に値すると感じていたのか、ピースサインで返す。

全体に翡翠色の衣を纏ったリア・レイン　エデンの光は隣を平行して飛翔している黒妖精剣にも効果を及ぼす。

それを予期していなかったアリス兄妹は呆然とモニターを見つめる。

インフィニティーエモーションナルエンジンより高純度なリアが機体に何らかの影響を及ぼしています対処を。

その必要はないと、口元を隠してカノンはか細く笑う。

「これで俺達は消えたも同然か！　リア拡散超距離ワープの予備動作を利用したつてちび助がこちらに説明を超越しやがった。英雄さん、みみるより天才じゃねえか！　はっはははは」

そう豪快に笑った後、モニターに映る心を見上げる。

心もモニターに映るレオを見上げる。

かつて、剣と剣の激突を繰り広げた日を見た双眸は、今……剣と剣を一つにする決意をその双眸に交わし合う。

「さて、一気に突っ込みましょう！」

「おうよ、英雄さん！」

「左右から行きますよ。私達は右から左へと突っ切ります、蒼空様

「！」
弱々しいが、そこには確固たる意志のあるカノンの声が黒妖精剣内部に響いた。

黒妖精剣は彼女の意志を受けて、ユニバースホールから高速で右へとコース変更する。

「あい！ 蒼空達は左から右へ突っ切る」

黒妖精剣の軌道を確認した蒼空は深白の方を見る。全身を翡翠色に輝かせた深白はもう、既に進路の変更を行っていた。

リア・レイン エデンは黒妖精剣とタイミングを合わせるために遙か、彼方へとワープをしたり、惑星の影へと隠れたり、月へとワープしたり 実に五十以上の普通では考えられない光以上の速度でコースを変更する。

黒妖精剣がユニバースホールの右方向に到達した瞬間、リア・レイン エデンはユニバースホールの左方向へと超距離ワープを果たす。

「黒妖精剣 墮天使の剣発動」
だてんしのつるぎ

黒妖精剣の漆黒の四枚の羽根が鏢から離れ、剣先へと移行する。その漆黒の羽根の一枚、一枚から禍々しい黒い光が剣先へと吸収されていく……。

「深白！ リア・レイン エデン 星崩しの剣」

「はい、くそ兄様」

締まらないなあ、僕ら一家は……。もう一度やり直しと思っていたヘタレなど、知ったことか！ とリア・レイン エデンの不死鳥の如き嘴から深白の名のような深い白い光が、翡翠色に光るディア・チャイルドの中央部を駆け抜ける！ そして、ディアチャイルドを超えてユニバースホールを目指し、止まることを知らない光の刃は伸び続ける。

その様子をモニター越しに観察して、自分達が先に出た方が良くと判断したアリス兄妹はその意見で同意だと互いに頷き合う。

黒妖精剣の黒い波動は機体前方を包み込むまでに膨らんでいた。

それを解消するが如く、ユニバースホールを斬る。

同時に

永久に伸びるであろう白き光の剣の先にある鮮血の塊のようなユニバースホールすら邪魔だと突き破る。

そして、黒妖精剣とリア・レイン エデンが共に互いの位置を変えらるべく、交差する。

その二機が重なり合う瞬間を狙って、三分割されたユニバースホールの胴体から手刀が突き出た。リア・レイン エデンはその手刀を交わすまでもなく、通常移動さえもはや、点と点を飛びはねるような短距離ワープで軽々、通り抜ける。

だが、黒妖精剣は必殺の一撃にインフィニティーエモーショナルエンジンが一時的に能力を低下させる。それでも、レオとカノンは雄叫びを重ね合わせて、その思いの丈 互いの無事をエンジンの出力へと変換させていく。

迫り来る手刀を寸前にして、完全に避けた。……とカノン兄妹は誤認した。

「当たるかよ！ そんなちやちな攻撃！」

黒妖精剣の遙か下方向に見える三分割されたユニバースホールをモニターで確認して、レオは捨て台詞を吐いた。

アラーム音が鳴り響いた。甲高く、鋭いアラーム音はそれだけで機体に重大な何かが生じたことをアリス兄妹に備に知らせる。

「何……くそ、掠った」

先程の勝利の宣言はレオ自身によって、取り下げられる。モニターがエンジンの出力が低下していることを表している。冗談じゃない、とレオは思った。

宇宙連合から提供された技術 インフィニティーエモーショナルエンジン構築論はそんな柔な攻撃で破綻するような代物ではない。余暇のリアさえもエンジンの熱暴走や、外部の変化から守るように使用されるべく、設計されている。

それをいとも簡単に貫くなんて、敵を甘く見ていた。そう言葉に

せずともレオの歯ぎしりが語る。

レオの隣からはキーボードの忙しない音が聞こえた。

「エンジン破損。緊急予備エンジン展開。航行のみ可能です、お兄様」

「ここまでか……よ」

「ですが……奇襲は成功です」

「ああ、そうだな」

そう言葉と一緒に息を吐いた後、レオはカノンに近づいた。輪郭のはっきりした顔は下を向いていた。彼女が見ている床にはそこらじゅうに涙が落ちていた。

そつと、顎に手を添えて、カノンに自らの存在を見せつける。

「生きているだけで得だと思え、後は見守ろう」

「はい」

そう囁きあつたアリス兄妹のシルエットは予備エンジン 初期のエモーショナルエンジンの静かな作動音に包まれながら、重なつた。激しく唾液を吸う音がそれに混じり合つ……。

>?<

「レオ！ カノン！」

黒妖精剣がインフィニティーエモーショナルエンジンを切り離している光景を映すモニターに気づいた深白が彼らを心配して叫んだ。蒼空と同じく天才的な知識吸収力を持つ深白だが、まだ、年を一年と少ししか重ねていない子だ。冷静に考えれば、あれはエンジンの爆発に機体が巻き込まれないように投棄したのだろう。投棄した方が安全だ。

「深白、今は奴を倒すことに集中しろ！」

「でも、パパ！」

「集中しなさい、ほら、まだ黒妖精剣は飛んでいるから安心しなさい」

蒼空の声に対して、深白は既に肯くだけだった。小さな顎がゆくりと動く。

「ママ。あれは許せないもの……。壊す、壊す、未来を信じる、未来を信じたい」

アカエルがその深白の感情に近い総感情値 願望に総感情値設定を行う。それを深白、蒼空、心へとモニターで伝える。

リア・レイン エデンは三分割されたユニバースホールをまるで睨みつけようと、静かに停止した。

そして、エクスカリバー フウガとは異なり、剣先のみが左右に分かれてそこから、銃口が覗く。それは確実にユニバースホール周囲に影響を及ぼそうと黒光りしている。

「吹っ飛べ！ ユニバースホール！ これが深白の、パパの、ママの、おばあちゃんの、みんなの、願いの力！」

深白の想いに共鳴した銃口が翡翠色の光を集合させる。星崩しの光発動と全てのモニターに表示される。ディアチャイルド インフイニティーエモーショナルエンジン全て装填と次に全てのモニターに表示された。心と蒼空の判断で全ての装填が行われた。リア・レイン エデンの攻撃を受けても尚、ユニバースホールの欠片達が再び、一つになろうと藻掻いていたからだ。

生半可な攻撃は通用しない！ その想いをも、威力に吸い込んだ太陽ほどに直径のある翡翠色の太陽が銃口に構築された。

それに堪えきれず、ディアチャイルドはヒビの悲鳴を上げる！

一発勝負だ……。深白の頬に汗が伝う。そして、深白は自分の今、尤もすべき行動をインフイニティーエモーショナルエンジンへと想いを飛ばす。

くらええ、ユニバースホール、と。

それを忠実にリア・レイン エデンは実行する。解き放たれた翡翠色の太陽 星崩しの光は目では捉えきれない速度でユニバースホール周囲を爆発させる。

翡翠色のカーテンがモニターの視界を奪う。

「や、やった……のか？」

「うん、しーちゃん、終わっ」

それが晴れた瞬間

> 残念だったな、リア・レインを継ぐ者<

その声の主 ユニバースホールは再生を終えて、数分前の完璧な状態へと戻っていた。まるで同じ映像を観ているような錯覚に心も、蒼空も、深白も、アカエルも陥る。

> どうやら、機体は不完全だったようだなく

その声と同時にリア・レイン エデンに激しい漆黒だけの宇宙空間からそれよりも深淵な黒い魔剣が無数に、それこそ、数えるのが馬鹿らしくなるくらいに殺到する。

すぐに深白はリア拡散による点と点を結んだ囲いのようなバリアを形成して紡ぐが、深く亀裂の入ったディアチャイルドまで覆うことはできなかった。

深白の精神状態は誰の目からも一目瞭然だった。顔が真っ青になっている。

ディアチャイルドは最初の魔剣の軍勢の攻撃に耐えきるが、無残にも次の軍勢の一撃で硝子の破片のように宇宙空間に散らばった。

「勝てない……こんな化け物」

ついに深白の心が折れて、両膝を床に伏してしまふ。そのまま、動こうとしなかった。

その深白の心理状況が大きく機体の総感情値を根こそぎ、奪った。モニターが無音で危機を告げる。七百億マター、五百億マター、百億マター。

心はその減り具合を見て、そろそろヤバイと心臓が飛び出そうになる。だが、それよりも深白の暗い表情を明るくしたかった。それは……父親として？ 深白に恋愛感情を抱いて？

その両方だ！ とディアシールドから一步、足を踏み出す。ディアシールドの加護外の床は絶えず、振動していた。視線を床や壁に巡らす。それらは所々、凹んでいた。

それが何だ。気持ちだけはそんな気概があるのに振動に堪えきれず、両足がふらついた。そして、床へと叩きつけられた。

「何をしてるんです、婿殿。あなた、死ぬ気ですか？」

「違いますよ、僕は人類を助けるために二人の大好きな女の子を守るんです。蒼空はママだから怯えないけど。深白はまだ、お子様だから……怖いんだよな」

心の言葉が正解だとはつきり、解るように蒼空の顔も、深白の顔も赤く染まる。

床に顎を強か打ったようだ。二、三箇所、口内が切れて激痛が走る。こんな痛みなんて、朝ちゃんとの件に比べたら　と匍匐前進ほふくぜんしんを始める。

その身体を今度は横揺れの衝撃が襲った。身体は左へと揺れに持って行かれて壁に背中から激突し、床に額を打ち付ける。

額から血がつつーと下へと皮膚を撫でる感触。その感触に負けなかったのはただのヘタレを時々、ヘタレないヘタレに変えてくれた家族の声。

その声の中にあつて一番、泣き虫な声に向かって助走をつける。振動に足が捕られる前に心は両足を揃え、両腕を振り上げて飛翔する。

深白の両肩をそのまま、振り下ろした両腕で包み込んだ。

「くそ兄様、温かい」

その安心しきった声が妙に透明に聞こえた。現実味を今更ながら、感じていたのだろう。自分も恐怖　今から逃げていた。そう気づいた瞬間、人間の限界を思い知った。だが、それでも、良いと深白の体温は教えてくれる。

互いの想いが、互いを助けるのだから……と、にんまりと引き締まりのない顔で心はモニターを覗き込む。その合間に蒼空のキーボードを叩く音と、地球と通信している声が聞こえた。

モニターの数値は計測不能。確か、数値は八百億辺りまで計れるはずだ。

「シーちゃん、新しい刃を地球近郊に届く算段をつけました。地球の人達が届けてくれるそうです。ひよっとしたら朝？」

「偉いぞ、蒼空！」

>行かせるか！ リア・レインを継ぐ者<

ユニバーズホールがリア拡散長距離ワープを計ろうとするリア・レイン エデンに身体事、衝突してくる。辛うじて、ユニバーズホールとリア・レイン エデンの合間にリアが集まった硬いエメラルド色の壁が両者の衝突を防いでいる。

だが、このままでは攻めることができない。

何とかしようと心が思考を働かせようとした時、ユニバーズホールの腹の中に黄金の輝きそのものの砲撃が吸い込まれた。

エクスカリバー フウガの最強の武装 セイントブラスター クラスリミット。その閃光の背後にエクスカリバー フウガが満身創痍ながらも飛翔していた。

「なれの相手は我ら、雛王家がする。とくと味わうのじゃ！ 我らの英知を」

通信可能領域に入ったのか、モニターにみみるとあるの無事な姿が映る。偉そうな奴は死なないというのはアリス兄妹の件で確認済みだ。やはり、みみるはしぶとい。蒼空と心は顔を見合わせて、柔らかく微笑んだ。

一体、何を微笑んでいるのかは深白には解らず、首を傾けた。アカエルは憮然とした態度で雛王家を見据えた。

心のディアシールド内にあつたモニターの一つが秘匿回線に付き、このモニターの映像または音声はディアシールド外では遮断されます、と説明が表示され、みみるの顔を次に大きく映した。相変わらず、染み一つ、傷一つない凛々しく綺麗な女の子の顔だ。

ツインテールのオーバーニース神はゆっくりと口を開いた。

「初めて出逢った時から我は陽乃心に……興味を抱いていた、なのじゃ。自分でヘタレと言っている通り、ヘタレの時もあるのじゃが……ヘタレない陽乃心は最高に良い男なのじゃ。できれば……我を

三番目でも良いからお嫁さんにして欲しかった、なのじゃ。愛してる心……」

みみる……。お前……死ぬ気か！ と問い詰めたかった。口は開いているのに声が出ない。答えを知るのが恐ろしかった。なんて、浮気者なのだろう。きつと、自分のみみるだけじゃない。みみる、扇、朝、蒼空、深白 みんな好きなんだ。なんてヘタレなのだろう、と心が自己嫌悪に完全に沈むのを待たずに……全ての気力を振り絞るようなただ、一人の鬨の音がリア・レインに響いた。離れ……。

「陽乃のリアを継ぐ子よ！ リア拡散超距離ワープ 地球！ なのじゃ！ 迷うな。大儀の前に目の前の石ころの存在なんて無視するのじゃあああああ！」

「まきぐそ……」

深白はそう、呟くくらいの抵抗しかできなかった。こんなにも強い感情をモニター越しからも送る存在をどう説得しろと言うのだ？

リア・レイン エデンは後腐れ無く、エクスカリバー フウガとフランジュベルグ エンオウを残し、その宇宙域から離脱した。

僅かな翡翠色の弱々しい光の粒がエクスカリバー フウガに降り注いだ……。

>?<

「全く、最期に小さな蒼空にあるの台詞をパクられました。まきぐそつ。これが本家……」

妹のあるるの半分冗談、半分本気の言葉に姉のみみるは言葉を返せないでいる。

みみるがどうしようもない展開を打開するべく、重い口を開く。

「とっておき、なのじゃ！ リアトルネード加速。砲身に集まれ、なのじゃ！ 行くぞ、あるる。覚悟は？」

「聞かれるまでもない……。王族は誇りと義務を持って生きている

……。ノーは言わない、天才さん」

「お姉ちゃん」

「あるる。さよなら、なのじゃ」

「うん、お姉ちゃん、バイバイ」

二人は最期に言葉を交わすだけでどちらも顔を合わせようとしなかった。二人共に同じ考えを持っていた。

きつと、姉の顔を見たら、メモリーオーバー リアを解除してしまつ。

きつと、妹の顔を見たら、メモリーオーバー リアを解除してしまつ。

あれは、私の

あれは、あるるの

最初で最期の協同研究の成果だ。雛姉妹の英知の集大成、互いの共通する記憶を一番、感情の触れる設定に自動的に合わせる。それが走馬燈の如く 走馬燈に脳内に進み、それをリアに残さず還元するシステム。それがメモリーオーバー リア。記憶を超越する感情の原子。

「セイント ブラスター クラスエンドレス……ぶち抜くのじゃああああー……」

みみるはシステムの起動に必要な過程を終了し、最期にエンターキーを一押しした。

「わああああー……」

激しい脳内を素手で弄ばれるような激痛に苛まれる。これを越えるには並大抵の精神を必要とするが……二人は同じように獣のように叫び、堪える。

すると、痛みが消えて自分達は自分達の身体を残して何処かへとすつと心だけ飛んでいく。

走馬燈。記憶が二人の心を包み込む。

最初は互いを初めて認識した時、同じような朱色の瞳に、身体よりも大きな頭部の天辺には金髪が少し生えているところまで

似ていた。不思議とお互い、見つめ合っていると繋がっているような感覚を覚えた。ただ、あの頃……優しい温もりに抱かれているだけで良かった。

さらに、さらに、記憶が、記憶が、目まぐるしく、目まぐるしく、永遠に巡ってくる。

それはどちらかの心が消えるまで、それは両方の心が消えるまで……その二つのプロセスでしか抜け出せない。悲しいけれど、悲しくなれない記憶の旅。

>?<

エクスカリバー　フウガの纏うリアの竜巻が次々とユニバースホールを千切りにする。それよりも速い速度でユニバースホールは完全な再生を果たす。宇宙空間に無限に広がる無機物質を吸収して。

だから、みみるとあるがどんな結末を迎えるか？　陽乃ずには解りきった事実だった。

やがて、エクスカリバー　フウガの攻撃が止まる。竜巻がその身からも、削ぎ落ちた。黄金の聖剣だけが宇宙空間に漂う。

「予想通りだね。やっぱり、目立ちたがり屋の馬鹿にはこれがお似合いさ」

「あなた！」

その冷淡な言葉に双嵐朝はずすの胸ぐらを力強く、掴む。

「すまん、すまん。僕の悪い癖が出てしまったね」

その言葉は今の激昂した朝には届かない。頭に完全に血が上っていた。朝は自分が、大人しい奴はキレるととんでもないことをするそのタイプだと自覚していた。自覚しているからこそ、怒りに身を任せた。黒妖精剣に搭乗している子ども好き（主に深白好き）なアリス兄妹、フランジュベルグ　エンオウに搭乗している陽乃一家を対象に愛のあるいじめを行う扇と元幼稚園の先生の梅雨、リア・レイン　エデンに搭乗している宇宙一楽しげな陽乃一家。

その人々を思うと、朝の拳は自分の肩よりも高い位置へと掲げられる。その拳を振るう前に拳は継の両手に硬く収まる。たった、それだけなのに前へと一步も進めない。

それを承知とばかりにすずは淡々とまた、喋り出す。

「ディアチャイルドは不完全だよ。鏡面金属ではないからね。自信がなかったし、目立ちたくないから、僕は表舞台に上がる気はなかったんだけど。僕は死より先を望んでいるからね。どっちでもいいのさ。人間が全て滅しよう」と

「あなた！」

「でも、興味が出てたんでしょ？」

叫んだ朝に少し加勢するような継の質問がすずの冷静な表情を一変させる。コックさんの被るあの白い帽子で視線を隠して、継の好気の視線から逃れようとする。

小さな、本当に小さな声で呟く声が朝の耳が捉えた。

「……あいつ、年下だと勘違いして、毎日、僕を風呂に入れたんだ。嫌だった……あいつのスポンジを操る技術は僕にぴったしだったし、優しく声を……」

そんな呟きを聴かれているとは本人だけは露知らず思わなかったようで、いつもの滑舌の良さを失い、しどろもどろに喋る。

「そりゃあ……大嫌いな？ 男が大好きな男に変わったからさ。好きなんだよ？ 運命に屈しないリアの響きを持つ陽乃心が。研究対象に……相応しい。陽乃に相応しく、な、な、ない人間だったの、にね」

「泣き虫で、優しいですから心君」

継の双眸が何も無い真っ白な壁のある部分を手でなぞる。それを黙ってすずが眺めていた。二人の強い眼差しを受けている白い壁を朝も眺める。

何も変哲もない壁のように思えた。だが、壁はゆっくりと左右に割れていく。その暗闇の空間に何か、巨大な影が二つ、ある。

すずが照明にスイッチを入れる。

「さあ、行きなさいあれを」

「これは？」

すずの言葉を遮って朝が質問した。朝の眼前には大剣の形をした白い機体があった。中心に赤い宝石が埋め込まれた鍔の上方向に二枚のシールド。そのシールドには薔薇が刻まれていた。柄の下には巨大なアームが装備されている。

そして、その機体の横には刀を想起させる細身の刃がブースター付きで保管されていた。

まず、すずがその刃のブースター部分を一撫でして、その装備の名を口ずさんだ。

「由緒正しいリア・レイン対応武装 ユニバースウィルス」

「そして、君の機体 圧縮リアエンジン搭載機 レゾナンス・フィールド」

と、顎をしゃくる。それが示す先にすずの言葉通りの機体 レゾナンス・フィールドは存在していた。

その名を聞いた後、すぐに朝は急いでレゾナンス・フィールドに乗り込んだ。レゾナンスの名を継いでいるだけあって総感情値を引き出す手法は同じだった。ディアシールド内に朝の大切な想いが籠もった子ども用の包丁。

その包丁は朝と心にとっては思い出深いものだった。中学の頃、何気に明日のお弁当、何しようかな？ と頬杖を突いておふくろの味特集という項目を熟読していた。それを横目で心が観察していた。心はふと、こう言った。

「おふくろの味が……どんなのだろうなあ」

「ああ、そういえば、心君の家、小さなコックさん？ が作ってくれるんですものね。いつも豪華でびっくり！ 伊勢海老や蟹が丸ごと、入っているお弁当を持ってくる人って心君ぐらいですね」

「朝……僕はあのお弁当、恥ずかしいんだ。朝ちゃんはナーニさんと面識がないから知らないけど、彼女……思いついたら一直線なんだ。普通にスーパーに売っている食材で頼みますって言っても耳を

貸さないんだ。一応、返事はするんだけどね」

「心……」

心が誤魔化していることなんて、朝にはお見通しだった。なんてって産まれた時から病院が一緒だったのだから。おまけに両親は親友同士だった。そんな朝だからこそ、気づける。心のおふくろの味への憧れ。きつと、心のことだ。面識はないがナーニさんにも文句なんて言えずにいつも、ありがとうと労いの言葉を掛けているのだらう。

よし！ と朝は自分の頭を叩く。

「うわあ、朝ちゃん……どうしたの？ いきなり」

「私が毎日、一品だけ届けてあげる」

あの時と同じわくわくとした高揚感が朝の心から生まれてくる。

「私が一品だけ届けてあげる、ついでです！ 私は心君を諦めた訳じゃない！」

一つ、一つの言の葉に籠められた想い達は朝の肩に突き刺さっているエンゲージチェーンからその先に繋がっている子ども用の包丁へと急速に流れていく。

過去の朝は言う。

「し、心君、これはある意味、おふくろの味なんだからね」

今の朝は言う。

「心君、私のリアは全て、心君で構築されているんです。私の妄想は心君を救うんですよ。救ったら……陽乃一家に入れてもらいます！ 宇宙は広いのですから、一夫多妻制くらいなんてない！」

その決意に合わせて、激しいエンジンの駆動音がある。初期設定が終わった。そう朝はレゾナンスを駆っていた経験から判断し、確認のためにホログラムモニターへと視線を滑らせる。

レゾナンス・フィールド

フィールドバスター……正常

リア短距離ワープ……正常

リア・フィールド・シューティング……正常

ジョイント・アーム……正常

ツインリア・レイン……移行可能

「ツインリア・レイン。全く……人類はどこまで進化するのでしょうか？ デリユージョン イデオロジストの私にとっては興味津々です。そして、その進化の果てを見るのはきつと、心君と私の子どもですよ！」

少女の激しい妄想……もとい、激しい片思いが陽乃財閥の虎の子を眠りから目覚めさせる。

その虎の子の咆吼にも似た駆動音に誘われるように朝はキーボードを叩く。完成！

「レゾナンス・フィールド リア短距離ワープ」

その言葉と共に優しい妄想に満ちたリアの礫が機体外部を包み込む。リアの色は熱い少女の心とは裏腹のクールな青。それは普段の少女の色だった。

中空に浮いたレゾナンス・フィールドは柄の下に装備されたジョイントアームを器用に使い、ユニバースウィルスという名を持つ聖剣の刃を握り締める。それを合図に機体はその刃ごと、突然、消え去った。

>??<

レゾナンス・フィールドとユニバースウィルスが消えた空間は体育館を連想させるほど、広くて静かな空間だった。

その静けさに一石を投じるように宮御継は陽乃わずに声を掛ける。
「あの子に託してよかったですか？ ひきこもりコツクのナーニさん」

「おいおい、今は宇宙最強のひきこもり研究者 陽乃わずかよ、君」
先程まで緊張していたはずの顔が自分のやるべきことは全て、終わったと不安の欠片もない無垢な笑顔を魅せる。その笑顔は心にお風呂に入れてもらった後の笑顔に似ていた。

思えば、この娘も難儀なものだと継は思った。心の株は数年前よりも明らかに価値あるものになってしまったのだから。だが、それを解つても尚、さすが笑っているのだと継は理解していた。それくらい長い付き合い、長い歴史が二人の間にもあるのだ。

「まあ、いいさ。陽乃の次期当主　心様のお手紙が正しければ、相
当な戦力になるよ、あれも。そして、あれもね」

天井を越えた先、空を越えた先、地球を越えた先の漆黒の空間を
すずは見上げている。どう考えても人間の眼では彼女の見たいもの
は見れない。それでも見続ける結果は解りきっているのだから。

リアの訪れをすずも、継も天井を見上げて待ち続けた。

>??<

どうしてじやろうか？　と疑問を頭に絶えず、巡らせていた。両
腕に重さを感じる。

あるるだった少女の身体をみみるは揺さぶり続けた。

「あるる！　我を、我を、目を覚まして我を呼ぶのじゃ！　お姉ち
やんって呼ぶ、なのじゃ！」

猫の尻尾みたいなの一つ結びが、だぼだぼの白衣が、閉じた瞼が、
コーヒーやタバコを年中、手にしていた指先が、幼い頃……みみる
をお姉ちゃんと追いかけて回した足が動いているのは……みみるが揺
らしているからだ。そう、姉が理解した瞬間……不思議と体内に籠
もった熱は冷めていった。

「我よりも先にお前が疲弊したのじゃな。しかし……我も長く、な
い」

それを示すように言葉を声にして見る。頭に整備用のトンカチで
殴られたような激痛を感じた。そして、口の中が赤い液体で満たさ
れ始める。溜まらず、その赤い液体　血液を床に吐き捨てる。妹
に掛からないように、唾を飛ばす要領で。

「エクスカリバー　フウガ……我らの墓としては贅沢じゃな。ねえ、

ある」

優しく髪を撫でるみみるの手を聞こえるはずのない声が止めた。それはホログラムモニターから聞こえてくる。残念ながら、総感情値を失いつつある機体が自動的にみみるの生命維持にエネルギーを回しているため、画像は映らない。声のみだ。

「死ぬのはまだ、早いですよ。少し、待っていなさい」

「アカエル。何故じゃ！」

アカエルはみみるの質問に答えなかった。

若干の振動の後、アカエルを容れている生命維持ポット ネバーが目の前に現れた。それを待っていたように全システムが復旧した。ホログラムモニターには、エクスカリバー フウガ・エデンとモニター名が表示されている。

「さあ、早く私のポットに入って治療をみみる、あるる！」

その叫びはみみるには届かなかった。みみるは遅すぎると呟きながらも表情は軟らかく、それをモニターから覗いていた。

「あれは観たことがないモード、なのじゃ。しかし」

>??<

粉々に身体を分散されたユニバースホールと、エクスカリバー フウガ・エデンの間に突然、機影が出現した。それは徐々に本体を具現化させていく。

白妖精剣の最強のモード 星崩しの光の上に、レゾナンス・フィールドが重なり合っている。下部の、つまりは白妖精剣の白い刀身には七つの星がそれぞれ、斜線で結ばれていた。その星々はまるで北斗七星のようだ。白妖精剣の鏢の周囲には四枚の羽根が寄り添っている。その羽根の前方を左右とも、薔薇の彫りが印象的な盾が装着されている。上部の、つまりはレゾナンス・フィールドの大剣はどんな物をも砕き潰す威圧感溢れる重厚を放っていた。レゾナンス・フィールドの鏢の中央に位置する赤い宝石から順に白妖精剣を巻き

込んで翡翠色に染まっっていく。

翡翠色に染まった二対となった聖剣こそ、ツインリア・レイン。人類の最終兵器が人類共通の敵と対峙する。

「ユニバース ホールがまた、この宇宙圏に現れても僕が、僕の子孫が、リア・レインを駆ってお前を滅ぼす。それが僕達の幸福に繋がるならば」

朝から聞かされたユニバースホールの本質、それを知っても尚、心は己を奮いたたせる。傷ついた仲間がホログラムモニターに映し出されていた。

彼は思う。自分だけの勇氣ではない。これは仲間と培った勇氣だ。>だが、人間はその幸せと同質の他者の幸せを壊すことしかできない。それは無機物質の存在も危うくさせる。戦争を起こし、消費される無機物質はお前達の捨て駒ではない<

正論を言うが……正論は無数にあると蒼空は知っている。それは少女が二年と五ヶ月ほどで学んだ全ては価値観の違う仲間と共にあった。それが彼女に教えた。その教えを蒼空は叫ぶ。

「わがまま、を通す。それしか、蒼空は生きる方法を知らない！」
蒼空の強い眼力を宿したエメラルド色の双眸と、同じ色を瞳に宿す深白がその先を淡々と続けた。その口調は徐々に強くなっていく。
「そのわがままが、人類の英知をデータ化させ、個々に届けるシステムを創り上げ、人類自身を進化させた。これがリアの集合体です。その過程に戦争も、和解も、平和も満たされている」

「赤点ですね、ユニバース ホール」

と、格好良くやや、キザめに蒼空の旦那、深白の父親である陽乃心が締める。

「補習なんて、心君よりお馬鹿です」

と、強引にレゾナンス・フィールド内部から双嵐朝が締める役割を横から搔つ攫う。

そのあまりに強引な態度には朝がキレた時の激しい怒りとは違う朝らしくない静かな怒りを感じる。心は苦笑するしかなかった。そ

れを眺めて、横から二つの溜息が聞こえた。

その溜息を合図にツインリア・レインは音もなく、完全に丸い球体へと戻ったユニバースホールに目掛けて急速移動する。それはユニバースホールさえ追えない軌道！

「ユニバースホール、どうした？ 俺を攻撃してみる」

>……くつく

「くそ兄様、それは無理です。ユニバースホールは五十億人以上のリア数を越える集合体には攻撃できません。地球やましてや、一番近い第二彗星には……。悔しいですが、陽乃財閥からの情報です」
と、ツインリア・レインの示す敵のウィークポイント欄から抜粋して深白が説明した。もの凄く、不服だったのが、幼い少女の頬はふくれっ面になっている。

>陽乃のか、陽乃が何代にも渡って私を調べた、というのか！ 陽乃め。陽乃め。忌々しいチキウウのゴミめ！<

「そのゴミがお前を壊す！ お前が壊した多くの命と何ら、変わらないお前の命を壊す」

その言葉に逆上したのか？ ツインリア・レインを宇宙空間から現れた無数の闇色の魔剣が襲う。だが、避ける必要もない。これはリア・レインではない。二対の聖剣 ツインリア・レインだ。総感情値も常時無量対数の領域。それ故 どの魔剣も二対の聖剣に触れる前に恐れを成して闇へと逃げ帰る。

それだけじゃない。ツインリア・レインだからこそ、無敵のリアを得られる。その二対の聖剣の中心には小さな、小さな白い輝きが球体となって構成されていた。これが人々から絶えず拡散されていくリアを分けてもらえるツインリア・レインの最強武装 人類の希望を詠う。

その小さな球体の遙か彼方にその力の一部をくれた人達がいる。
人類全てに感謝を込めて深白が

>???
<

その小さな球体の遙か彼方にその力をくれた人達がいる。

ある幼女はオモチャを自分の足で踏んでしまつて、壊れたオモチャを両手に抱いて泣いていた。そこに翡翠色の少女が現れた。

「お姉たん、だあれ？」

「深白です。それより、その車が壊れて悲しいですか？」

「うん。お姉たん……直せない？」

「無理です。その車はしんじやつたんですよ。ママの代わりなんていないでしょ？」

「うん」

「それと同じです。今は車さんのためにも笑顔で彼を天国に送つてあげよう」

「うん、そうする。きっと、天国で車さんもぶーぶーしてるよね」

「はい」

そう、深白が肯くと、幼女は満面の笑顔でオモチャの部品を自分の小さなハンカチにくるみはじめた。幼女の身体から仄かに悲しい感情が空へと舞い上がった。それは深白の幻影に吸い込まれていった。

同じように老若男女を、星を、宇宙船を問わず、深白の幻影は様々な感情　リアを集める。

そして、深白の仲間も、その幻影にリアを捧げる。

雛みみる。雛あるる。

「深白、私のリアと……妹のリアを託す」

アカ・エル。

「ぱっぱと世界を救つてみんなで焼き肉パーティーしましょうか？」

あれ、食べれない？」

扇。

「深白！　ぐずぐずすんな。後、七秒で片付ける。そうしないと、お前の父をいじめるぞ！」

梅雨。

「ふふつ、痛めつけられちゃった仇を一億倍にして返してね。そうしたら、お姉ちゃん、また、本を読んであげる。何が良いかな……」
桃太郎さん？」

アリス兄妹。

「行けええええええええ、ツインリア・レイン！」

「お兄様？ 真似ですか？」

「いいや、俺の愛がそうさせたのだろう。来いよ、キスしようぜ」

「深白様が観て」

「いいじゃねえか。このリアも連れててもらおうぜ。愛で人類を救つてやるぜ！」

双嵐朝。

「深白、あたしも陽乃心君が好きなんです。愛してますよ。帰ったら勝負ですよ！」

陽乃蒼空。

「全てのシステムは正常だよ。後は深白の心次第、失敗しても笑わないから全力でやりなさい」

陽乃心。

「さあ、僕らも君と一緒に引き金を引くよ。だから、心を強く！ 生きるって願って！ それが深白に願う全てだから。僕の」

「はい、格好いい兄様。深白は格好いい兄様とママの子です。一発で終わらせます」

そう応えた幻は深白の背へと消えていく。

>??<

撃つ。エンタキーを強く押して！

「ユニバースホール、これが深白達の意志です……。消えろ、まきぐそつ！ ツインリア・レイン、人類の希望を詠う！」

ユニバースホールに最期を与える唯一無二の白き光が放たれた。

白が赤を浸食して行く中、ユニバースホールは初めての敗北を味わ

っていた。絶対的な敗北だった。破壊、再生されるはずの宇宙が違
う未来を歩む。それはユニバースホールにとって望まぬ未来。

その未来への渴望が叫びへと変わる。

>私は宇宙の一部にしか過ぎない。私は無機物質の末端でしかない。
無駄だ、リアを継……ぐく

その言葉を最期にユニバースホールは完全に消滅した。太陽のよ
うに赤い光はもう、どこにもなかった。いや、この宇宙にはなかつ
た。

きつと、また、ユニバースホールは出現する……。そんな弱気な
言葉を蒼空は心に仕舞い込んだ。そして、別の言葉をもつ、消えた
存在に対して言う。

「それでも、きつと、蒼空の子孫が戦い続けます。自分達の命とい
うバトンを次の世代に手渡すために……誰かを愛するために」

その時に自分はいないことを蒼空は理解していた。

それもきつと、宇宙の歴史の一部に過ぎない。だが、家族は覚え
てくれている。そう、想い、蒼空は深白の身体を抱いた。そして

「おつかれさま、さすが、蒼空の娘」

「ママ！ 暖かい。人工暖房機」

娘とじゃれ合うのだ

エピソード ママの贈り物

エピソード ママの贈り物

> f i n <

世界は確かに救われた。あの日、宇宙の何処でもお祭り騒ぎとなった。世界は一つになったかに思えた。だけど、世界は変わらず、複数の意見に分裂し始めた。まだ、あれから三ヶ月しか経っていないのに。そして……次の宇宙を統べる者になると星々でテロにも似た戦争が始まっていた。

僕は世界の身勝手さに激怒しそうになる。その度に病身の蒼空はやつれた顔で僕に言うのだ。

「だから、人間って面白いんだよ、しーちゃん」
って。

「適わないよなあ……」

「何が適わないのか？ あるるの生命力か？」と全く健康なあるるの声。

「それも適わないけどね」

僕の新しい住居であるみみるとあるるスペシャル号（あるるの退院祝いだという理由であるるの発案により、建てられた普通の二階建ての家）にはあるるとみみると蒼空のために来ていた。彼女達は丁度、蒼空との別れを済ませて病室から出たところだったようで、ソファに座り、吹き抜けの天井から蒼空の名の由来である星々、煌めく空を見ている僕に声を掛けてくれたのだ。

「リア崩壊現象」

そう……あるるが寂しげに口にした。

「萌え星人は地球人と違って人体の規定以上のリアを外に排出できず、内に溜め込んでしまうのじゃ。これは皮肉にも蒼空を……助け

ようと思つて色々……診断した結果なのじゃ。すまぬ、心……」

今まで隠していたのか、そんなことをしなくても僕は受け入れられたと言つべきか？ いや、止そうと僕は自分に言い聞かせるようにみみる達から目を逸らした。その先には蒼空と僕が出逢つた日、一緒にケーキを食べた時の写真が立てに容れられて飾つてあつた。

あの時は、ショートケーキに怯える蒼空に大丈夫だよって声を掛けながら、僕が蒼空の口にショートケーキの欠片を少しずつ、運んだんだ。ああ、だから、蒼空の口の周りには真っ白いクリームがくっついているのか。

僕は思わず、大笑いしてしまった。忘れっぽい僕にも、今と変わらぬ無垢な蒼空にも。

「よしましよう、みみる。これはとても、自然なことなんです。確かに僕達、人類は文明が発達したおかげで寿命が延びました。だけど、確実に別れはくるんです。蒼空……」

丁度、一階の台所から出て来た蒼空と目が合う。身体は前よりも痩せてしまつて、骨が浮き出ているのに翡翠色の双眸は変わらず、僕を暖かく見守ってくれている。

「しーちゃん……」
耳をすまसानければ、聞こえない声だが、僕にははっきりと聞こえた。

「もう、寝てて良いよ。楽しい夢を見てね」

そう言つて、蒼空の唇にゆっくりと自分の唇を重ね合わせた。その瞬間、妙に切なくなつて僕は蒼空の頭を抱えた。この口づけが永遠に続くように。

息が苦しくなつた。自然と口と口が離れていく。蒼空の息が僕の顔に優しく触れていたのに今は触れていない……。

蒼空は何かを決意したように左手の薬指にはまっている結婚指輪を眺めてから、僕に強い眼差しを向けてくる。

「しーちゃん、深白と最期にお話しがしたい、二人きりで」

「……最期なんて言わないでくれ……」

「最期……なんだ。ごめんね、しーちゃん」

そう言った蒼空の顔は疲労に顔を歪めていた。今までその疲労を内に秘めていたことは誰でも解る変わりようだった。目を凝らすと確かに蒼空の着ているワンピースは汗で濡れていた。頬には涙と汗が伝う。

「ごめんね、気づけなくて」

「うん、蒼空こそごめん。最期は最初みたいにしーちゃんと笑顔で別れたかった」

「いいじゃないか……僕らは一人では何もできない無力な人間なんだから」

「うん。ありがとう」

「僕こそ、蒼空……あ、ありがとう……」

僕と蒼空の明日はそこで終わる訳ではないって知っていた。その明日は深白に受け継がれている。ただし、別のレールの上にある別の駅を目指している。

だからこそ、その理屈は寂しさを隠せない……。蒼空、さようなら。

トン、トン、トン……と杖を叩くようなゆっくりとした階段を登る音。私はその音が悲しくて仕方がなかった。だけど、私は泣く訳にはいかない。

ずるいよね……ママは。

きっと、そうやって自分の想いも、私の想いと一緒に常に在り続けようとするんだね。でも、嬉しい。

あれ？ 泣いているのに……頬を触れると涙に紛れて笑顔が隠れているのがはつきりと解る。

そうか、私はまだ、ママと一緒にいたいんだ。

足音が私の部屋の扉の前で止まった。入って来ようとはしない。

私はママと別れたくなかったけど、ママの時間はそれを待たないことを知っている。どうして、萌え星人であるママの三年間

と、萌え星人と地球人の混血である私の生きる時間……これから生きるであろう時間、六年間という差が生まれたのだろうか？

ただ、その差を疑問に思いながらも、答えは出なかった。怖いっ
て思いだけが心臓の鼓動を早くする。そうだ、ママに慰めてもらおう！ 抱きしめてもらおう！

扉が開いた。私はママだと解っていたから、そのまま、私よりも背の高い暖かい身体を抱きしめた。あれ？ 逆だなあ。良いか……。

「暖かいよ、ママ」

「……」

「ママ？」

「……」

「ママ……」

「……」

「ママ……重いんだよ、それ」

私は自分の薬指にいつの間にか、はまっていた金色のシンプルなデザインの指輪を見下ろした。

ママの呼吸は聞こえない。私が支えていなければ、きっと、もう……。

「解ったよ、ママ。深白にしか、陽乃心は任せられないんですよ。

でも、良いの？ 深白、格好いい兄様の娘……」

「……」

「うん、解った。任せて……」

「……」

「解ったから、お願い……声を聴かせてよ、ママ」

悲痛な叫びじゃあ、ママも声を聴かせてくれないと思って、私はママにお洋服を強請る時のように甘い蜜のような声をママの耳元に響かせた。

「……」

「……」

「ママ、暖かい。まだ……人工暖房機」

これが死ぬこと。これが死の重さ。
ママが最期に私に教えてくれたこと。さよならなら、私の可愛くて
頼りになるママ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1729x/>

宇宙人と僕

2011年12月13日05時51分発行